
第4章 舞台芸術活動のシステム

1節 オープンシステムによる制作・クローズドシステムによる制作

1章、2章、3章を通して、我国の文化会館の現状及び問題点、
について考察をした。そして、その過程で、文化会館の舞台芸術活動
の抱える諸問題を根本から解決するには、まず、何をあっても舞台
芸術の制作・上演の方法やプロセスについての基本的な理解が必要
であることが確認された。そこで本章では、この点に焦点をあてて
考察を行うことにした。

元来、Theater, Teatroといった欧米の言葉は、そこで行われ
る芸術や、場だけを示すのではなく、その活動を支えている組織の概
念も含むものであった。つまり、これらは切り離すことの出来ない一体の
ものであった。たとえば、ミュンヘンのオハラハウス(ナショナル
シアター)には、大道具製作所もあれば衣裳製作所もあり、歌やオー
ケストラも抱えている具合で、よほどのことが無い限り他の組織
の力を借りずにオハラ制作・上演を行うことができる。このよう
に、演劇やオハラ制作に必要となる全ての職種を自己の組織として持
ち、施設も全て完備してあるような体制のあり方、筆者は舞台芸術
の制作におけるクローズドシステムと呼ぶことにする。欧州におけ
る演劇やオハラ活動は、このクローズドシステムが基調になった
制作形態をとっているといえるであろう。ところが、我国で
は、少なくとも現代舞台芸術の領域では、幸か不幸か、このようなク
ローズドシステムは、成長しなかった。舞台芸術を創造するのに必要な
役者、歌手、踊り手、メイクアップ師、大道具や舞台設備操作の裏方、プロ
デューサー等の各職能は、それぞれシステム全体から見れば不完全
な部分集合でしかない。劇団組織、道具製作組織、プロデューサー組織と
いった複数の独立採算をとる小単位に分散している。かなり完備し
た組織力を持つ劇団であっても大道具や衣裳の製作は外注するのが
一般的であるし、ましてや自分自身の芝居を専用に上演する劇場を
持つ劇団は非常に少ない。一般的には、公共あるいは民間の貸ホー
ルが利用されるのが普通である。このことについては、即ち3章で
状況を観察した。つまり、どんな劇団でも、舞台芸術の制作・上演

システムとして見た場合、単独では不完全なシステムであり、必ずその組織外の補集合としての組織の協力が必要な構造になっている。互いに補集合を必要とする部分集合が社会システムの中に広く分散し、ある舞台芸術の制作過程でその都度巧妙に結合・分離を繰り返しながら全体のバランスをとっているのが、我国の舞台芸術の制作システムなのである。これを筆者は、先の欧州に見られるクローズド型の制作システムに対して、オープン型の制作システムと呼ぶことにした。

我国の文化会館は、このオープンシステムにおける上演場所として、貴重な役割を果たしてきた。特に3章で見たように、地方において広く、芸術文化活動を浸透させた功績は大きい。しかし、反面、文化会館の活動は、舞台芸術の制作活動のほんの一部を担うのみであり、他の組織に大きく依存している事実をともすると忘れがちであった。これは我国の舞台芸術がその制作形態の基調をオープン型のシステムに置いていたこと。そしてこれは、合理的な姿をとるといふよりは、むしろ慣習的で潜在的な体系のもとに整えられていたため、全体像の把握がなかなか困難であるという実状によるものと思われる。本論文では、現代舞台芸術という土俵に立つ限り、クローズドシステムによる場合でもオープンシステムによる場合でも、そこに必要とされる業務内容は総体として同一であるという仮定に立ち、総体の把握にくり、オープンシステムを、比較的、全体像のつかみ易いクローズドシステムの分析・比較を通して明らかにしようとするものである。クローズドシステムの例として、現在、最も構造が明快で、ひとつの完成の域に達している西ドイツの公共劇場の例を選んだ。以下クローズドシステム及びオープンシステムの舞台芸術の制作について考察を加えることにする。

2節 クローズドシステムによる西ドイツの公共劇場

1) 西ドイツの公共劇場の概要

1) -a) 分布と規模

*1 "Theaterstatistik
1978/79"
Deutscher Bühnen-
verein.

1978年度の西ドイツの劇場統計「Theaterstatistik 1978/79」*1を主として西ドイツの公共劇場の概要を見るのが本項のねらいである。まず、劇場統計「Theaterstatistik」について、それが、いかなる種類の統計であるかを述べる。これは、主として公共劇場が中心となった西ドイツの劇場組織の加盟する「Deutscher Bühnenverein」(ドイツ舞台連盟)が編集する、西ドイツの公共劇場、公共オーケストラ、民間劇場に関する公演数、観客動員数、組織規模、年間収支などの部門にわたる膨大精緻な統計である。これを西ドイツの劇場活動に関する唯一公式の統計資料と見なしてさしつかえない性格のものである。本項では、この中から公共劇場に関する部分を中心に主な項目をまとめて取り上げてみる。

本統計資料によると、1979年現在で、西ドイツには、74の都市に87の劇場事業体が所属している。ここでいう劇場事業体とは、組織上、財務上、ひとつのまとまりとなっている劇場活動を行う団体を指す。この劇場事業体には、ひとつの劇場(ホール)しか持たず、チャンネルの演目しか行わないようなものもあれば、複数の劇場を持ち、オペラ、バレエ、演劇という複数のチャンネルにまたがる活動を行っているものもある。従って、公共劇場事業体がその基地として公演活動を行っている劇場数は、さきにも多く、統計資料の中から、異なる事業体が同一の劇場を利用してしている場合や、屋外劇場のような特殊な場合をのぞいて合計で232の劇場数となっている。これに対して、西ドイツで定期的に活動を行っている民間劇場は、事業体数で28、劇場(ホール)数で83であり、公共劇場が民間劇場よりもはるかに大きな数となっていることが判る。つまり、基本的に西ドイツの劇場活動は、公共劇場が主体であり、公共劇場によって支えられているといえよう。

図4-1に西ドイツの公共劇場事業体のある都市の分布状況を示し

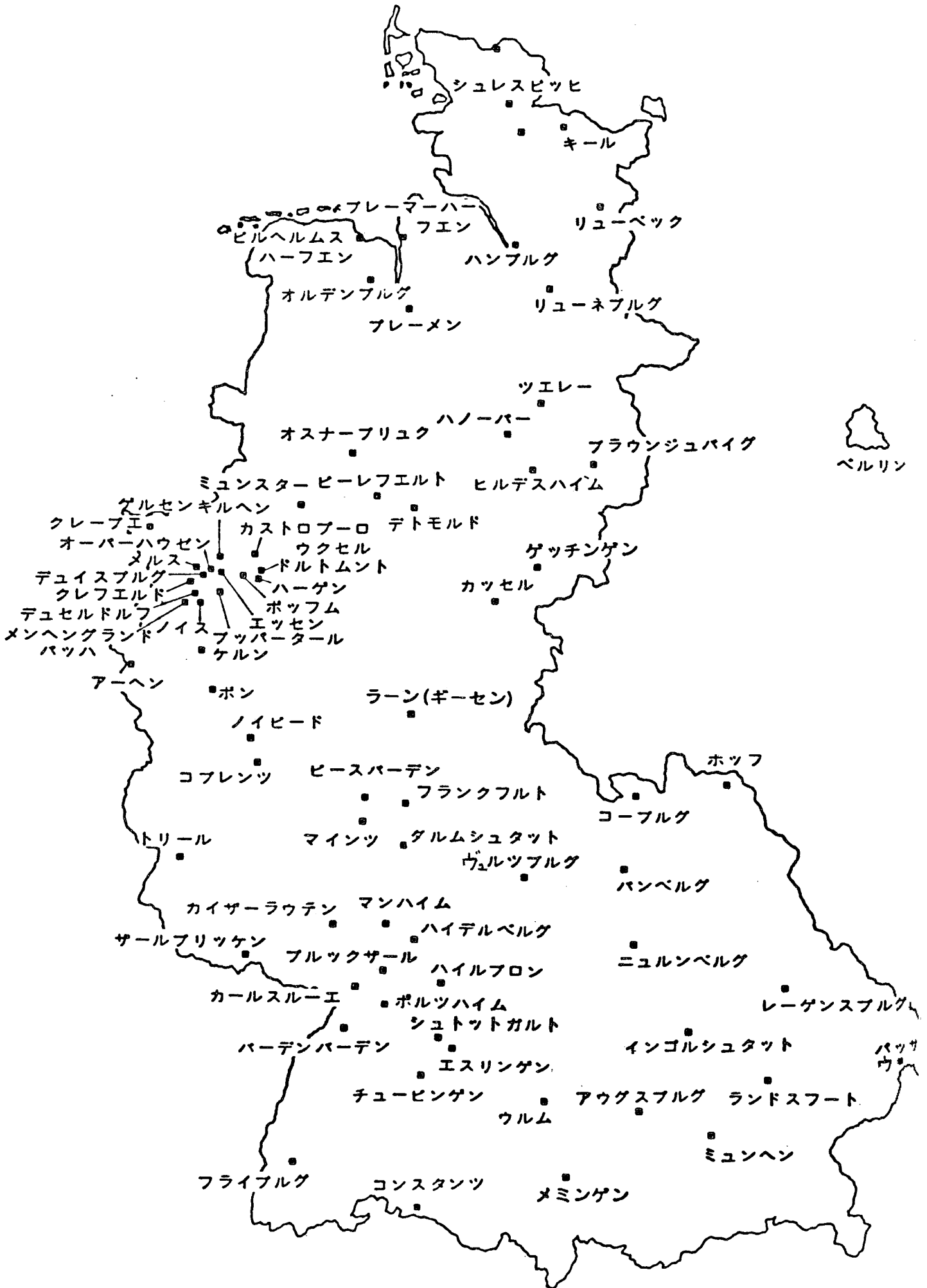


図4-1. 西ドイツ 公共市場 専業体のある都市

た。しかし全国各地に分布しているのが理解できよう。都市の規模別に見ると表4-1に示すようになる。我が国の文化会館は、主として

	設置都市数	設置事業体数
人口100万人以上の都市	3	10
人口50万人～100万人の都市	9	13
人口20万人～50万人の都市	19	20
人口10万人～20万人の都市	20	21
人口5万人～10万人の都市	17	17
人口2万人～5万人の都市	6	6

表4-1 都市規模別の公共劇場の分布

て、人口10万人以上の都市を中心に設置構想がなされているが、西ドイツでは人口10万人以上の都市では51の都市で64の劇場事業体が存在している。そして、これらは、単にホールを持つのみではなく、そのほとんどが、後に詳しく考察するように劇団・楽団、制作組織・技術者集団を抱え、自ら独自の作品を制作・上演する力を備えたものであるというのが特徴である。この点で、文化会館とは、本質的に異なるものである。西ドイツでは文化会館的な施設は、市民ホール(stadthalle)等と呼ばれ、これら劇場とは、別にある。これについては、正確な統計資料がないため、正確な数は把握できないが、主要都市には、少なくとも1施設は設けられていると推定される。市民ホールの役割は、各種の集会や市民祭り、客演劇団・楽団などの公演場所として利用されるのが一般的である。この市民ホールの最近の傾向については、本節5項でもう一度検討する。

さて、ここで、もう一度、西ドイツの公共劇場にもとめる。西ドイツの公共劇場における地域サービスのあり方から見た型には、ふたつのものがある。ひとつは、州立(国立)劇場、市立劇場と呼ばれるもので、主として、ある拠点劇場を中心とした活動を行うものである。もうひとつは、地方劇場(Landesstheater, Landesbühne)と呼ばれるもので、ある特定地域内の施設(市民ホール等)を巡回してまわすタイプの劇場である。もっとも、この両者は、厳密に分離できる性格の

ものではなく、その境は明確ではない。本拠地劇場でも多くの公演を行なから巡回公演も多く行うタイプのものも数多く見られる。以下分析の対象とする劇場統計には両者のものが含まれた統計であることをあらかじめ断っておきたい。

都市規模	オペラハウス専用		演劇専用		オペラハウス、演劇共用		小劇場・スタジオ		講堂、市民ホール等	
	ホール数 (*1)	平均客席数	ホール数 (*1)	平均客席数	ホール数 (*1)	平均客席数	ホール数 (*1)	平均客席数	ホール数 (*1)	平均客席数
人口100万人以上	6 (2.0)	1465	7 (2.3)	906	1 (0.3)	523	6 (2)	244		
50万人～100万人	8 (0.9)	1239	9 (1.0)	782	1 (0.1)	909	12 (1.3)	239	5 (0.6)	1271
20万人～50万人	5 (0.3)	968	13 (0.7)	497	14 (0.7)	913	16 (0.8)	173	14 (0.7)	1036
10万人～20万人	2 (0.1)	955	9 (0.5)	435	13 (0.7)	749	23 (1.2)	121	7 (0.4)	919
5万人～10万人			6 (0.4)	418	9 (0.5)	583	13 (0.7)	102	4 (0.2)	713
2万人～5万人			4 (0.7)	533	4 (0.7)	600	1 (0.2)	99	1 (0.2)	1488
計	21	1212 (平均)	48	592 (平均)	42	753 (平均)	71	159 (平均)	31	924 (平均)

表4-2 西ドイツの公共劇場が使用するホールの規模と種類 (Theaterstatistik 1978/79 P5～P21参照により作成)
 [注] (*1) は、1都市(表1-1)あたりの劇場の数

表1-2に西ドイツの公共劇場が使用するホールの規模と種類をホールの存在する都市の規模別に見たものを示す。これは、基本的には、Theaterstatistik 1978/79にもとづいて112113か、その中から屋外劇場や、教会等の特殊なものはこのようにある。

この表は、Theaterstatistik 1978/79の原資料を参考にしながら、西ドイツの公共劇場の都市規模別に見た特徴を記すと以下のようになる。

- ① 人口100万人以上の都市は、西ドイツには、バルリン、ハンブルク、ミュンヘンの3都市ある。これらの都市の公共劇場の特徴は次のようである。
- ② 各都市とも、オペラハウス、演劇劇場を複数個持っており、
- ③ これらの劇場は、別々の事業体として独立している。

2) 人口 50万人から 100万人の都市で公共劇場をもつ都市は 9都市あるがその特徴は次のようである。

⑦ 各都市とも、オペラ・バレエ専用のホールと演劇専用のホールを擁している。これは 100万人都市と同様である。

⑧ ただし、ここではオペラ・バレエと演劇はひとつの事業体としてまとめられている。つまり、ひとつの事業体がオペラ・バレエ専用のホールと演劇専用のホールを擁していることが多いということである。

3) 人口 20万人から 50万人の都市の公共劇場の特徴は次のようである

⑦ オペラ・バレエと演劇用にそれぞれ独立したホールを擁し、人口 50万から 100万の都市に典型的に見られる事業体も少し見られるが、ここで主流を占めるのは、オペラ・バレエと大規模な演劇をひとつのホールで行う形式のものである。これはドイツでは多演目劇場あるいは三部門劇場と呼ばれている。

⑧ この規模の三部門劇場には、小あるいは中ホールとして演劇専用ホールと、実験的な試みのためのスタジオを擁しているものが多し。

⑨ ひとつの都市では、全てのチャンネルがひとつの事業体としてまとめられている。

4) 人口 10万から 20万人の都市の公共劇場の特徴は次のようである。

⑦ 人口 20万から 50万人の規模の都市に見られたような、三部門形式のホール、演劇専用のホール、そして小さなスタジオを持つ形式も見られるが、最も典型的なのは、三部門形式のホールとスタジオを持つタイプである。

⑧ また、三部門形式ではなく、オペラ・バレエは行わず、演劇公演のみを行う事業体のみを所有する都市も見られる。

5) 人口 5万人から 10万人の規模の都市に見られる公共劇場は次のような特徴を持つ。

① 最も多く見られるタイプは、オペラ・バレエを行わず、演劇公演を主体とするホールをひとつと、小さなスタジオを掛つ形式である。

② この規模の劇場では、地方劇場(ラントステアター)形式を持つものが多く、他の場所へ出張公演する回数が多くなっているのが特徴である。

6) 人口2万人から5万人の規模の都市に見られる公共劇場は、次のような特徴をもつ

① 基本的に一都市一事業体一ホールのもものが多く、その内容は、オペラ・バレエも行う三部門形式のものと演劇しか行わないものがある。アトリエはほとんど持っていない。

② やはり、地方劇場(ラントステアター)形式をとり、他の施設へ出張し公演することが多い。

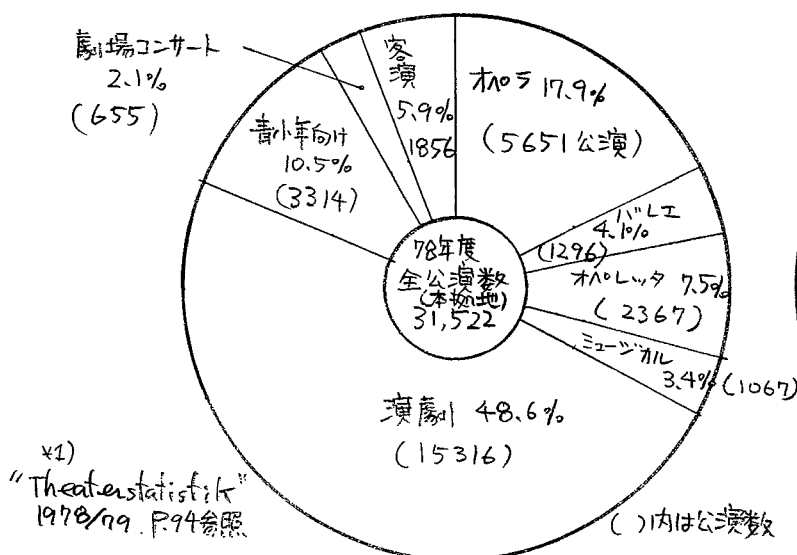
上記のように西ドイツの公共劇場は、都市の規模により、その組織構成や施設構成に相違が見られる。一般的に都市規模が大きくなるほど、演目の専門化の傾向が強くなる。また、オペラ・バレエは、主として人口10万人以上の都市を中心に行われている。それに対して演劇は、かなり規模の小さな都市でも行われる傾向が強い。

ホールの規模については、オペラ・バレエ専門ホールの規模の平均が1212席、演劇専門ホールが592席、三部門ホールが1075席、アトリエは159席と、全体的に規模の小さいホールが多いのが特徴である。ホールの規模は、いかなるタイプのものでも、都市の規模が大きくなるほど、客席数もやや増加する傾向を持っている。

1) - b) 公演数と観客動員

ここでは引続いて "Theaterstatistik 1978/79" を用いて西ドイツ公共劇場の年間の公演数と観客動員について考察する。

図4-2a には、まず本拠地公演における1年間の公演の演目の種類と総公演数を示す。これは、西ドイツの公共劇場のある74都市の合計である。これによると、演劇公演が最も多く、全体の48.6%と約半数を占めている。次いでオペラ公演の17.9%が高い。ここで、オペラ公演・バレエ公演・オムレッタ公演を合計してオペラ・バレエ公演として考えると全体の29.5%を占めることになる。西ドイツのミュージカル公演については、オムレッタ歌手によるものと演劇以外の俳優によるものがあり、オペラ劇場でも演劇劇場でも行われるが、これは全体の3.4%程度である。青少年向け公演は、それが演劇的なものかオペラ・バレエ工的なものは、統計からは判読できないが、全体の10.5%を占め、西ドイツの公共劇場の大きな柱となっていることが窺える。これはやはり、公共劇場の使命として、青少年の情操教育の機関としての役割を担っているからであろう。公演数全体を見ると、1978年度には全国の公共劇場で、実に1,522公演の公演が行われている。これは実に驚くべき数字である。西ドイツの公共劇場が、11かに充実した活動を行っているかが、この数字によっても読みとれる。1都市あたり直すと、平均426公演/年/都市となる。表4-2bには、年間の総



*1) "Theaterstatistik" 1978/79, P.94参照

図4-2a 西ドイツ公共劇場の本拠地公演の演目の種類と公演数(1978/79シーズン)^{*2}

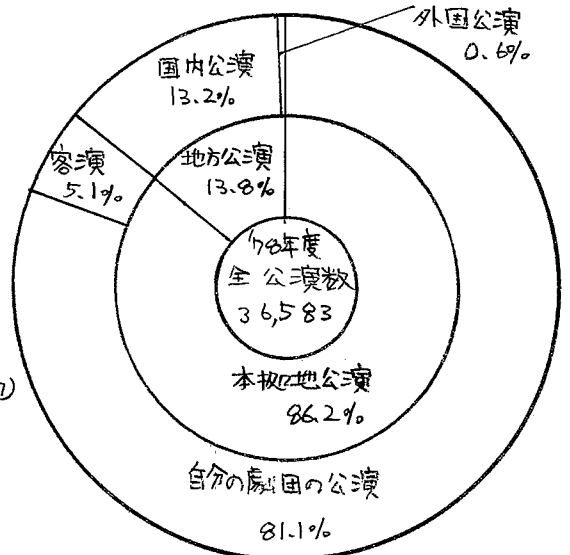


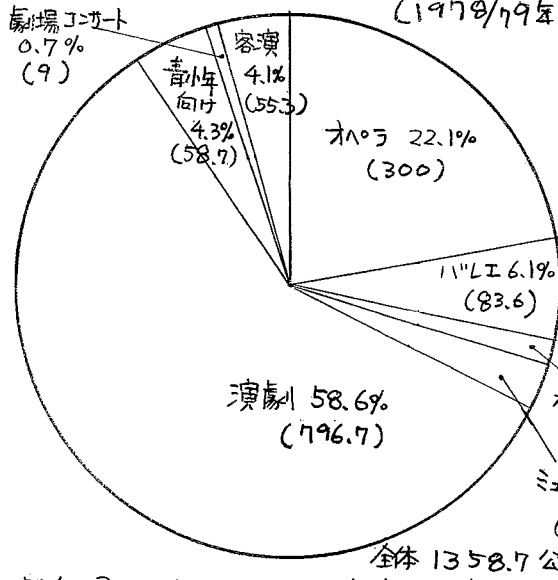
図4-2b 西ドイツ公共劇場の本拠地公演と地方公演の比率(1978/79シーズン)

公演における本拠地公演と地方公演の割合を示す。西ドイツの公共劇場は、公演場所としてのホール(劇場)ばかりでなく、公演のための組織も持っているのが特徴であるが、その本拠地の劇場で全公演の86.2%を行い、かつ、81.1%を自らの劇団の公演によって行っている。本拠地劇場において、他の劇団の客演を行う割合は、総公演数の5.1%と非常に少ないのが特徴である。残りは、地方公演つまり各地の他のホールに出向いて公演を行うものであるが、その大半は国内に限られている。

さて、ここで、もう一度演目の種類に話を戻す。図4-3a~fに都市の人口規模別に見た公共劇場の本拠地公演の演目の種類と一都市あたりの平均公演回数を示す。(1978/9年)本節11-a「分布と規模」に於いて、西ドイツの公共劇場は、都市の規模に従い、その形態には異なる特徴のあることを示した。それと対応してこの図を見ると次のことが言える。

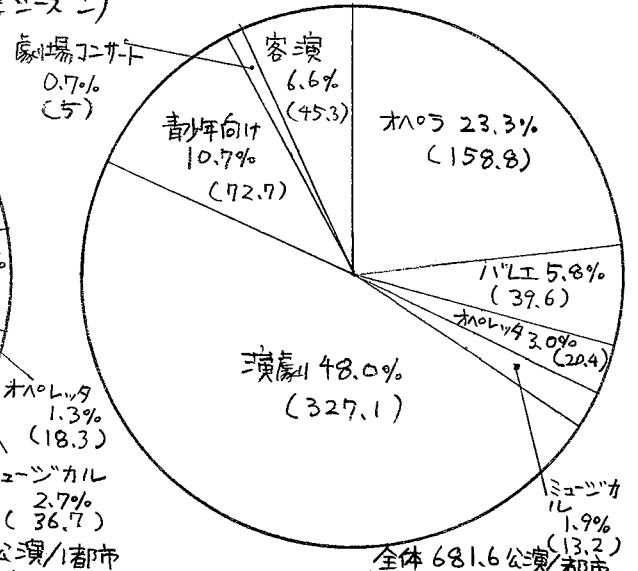
- 1) 人口100万人以上の都市では、オペラ・バレエの公演を主体として行う事業体と演劇公演を行う事業体が独立しており、かつ、複数の劇場を持つ傾向が強いが、それに対応して、1都市あたりの年間本拠地公演総数が1359回と非常に高いのが特徴である。オペラ公演に対してオペレッタ公演の比率が少なく、どちらかというところ本格派指向が強いという傾向も見られる。青少年向けの割合が低いことも、本格的なものが多い環境の現れと受けとることもできよう。
- 2) 人口50万人から100万人の都市では、事業体としてはひとつであるがオペラ専用劇場と演劇専用劇場を別々に持つところが多い。人口100万人以上の都市と比較すると、オペラ・バレエ系の演目の占める割合は、それほど変化していないが、青少年向けの公演の割合が増えているのと、1都市あたりの年間本拠地公演数が100万都市に比して、約半分に減っているのが特徴である。
- 3) 人口20万人から50万人の都市では人口50万人から100万人の都市に比して、オペラ・バレエと演劇系の公演をひとつのホールで行う三部門劇場の形式をとるケースが多い。ここでは、後者の都市に比して、オペラ公演

図4-3 a f 都市の人口規模別に見た公共劇場の本拠地公演の演目の種類と1都市あたりの平均公演数 (Theaterstatistik 1978/79 P94より作成) (1978/79年シーズン)



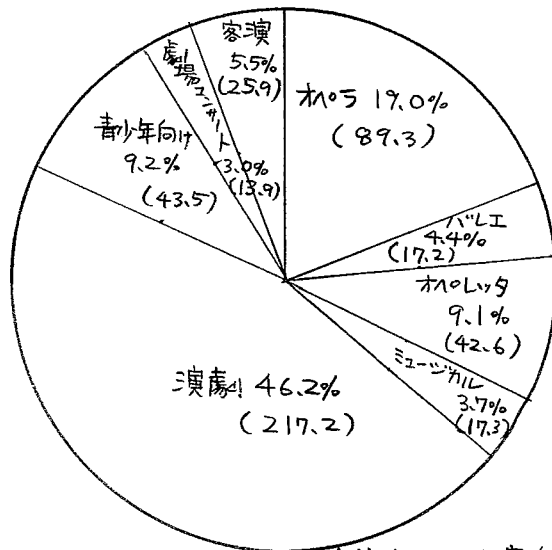
全体 1358.7公演/都市

図4-3 a 人口100万以上の都市の公共劇場の本拠地公演の演目の種類と1都市あたりの平均公演数



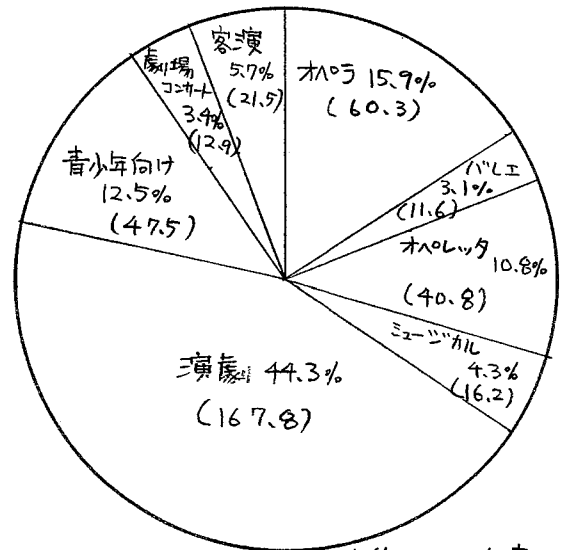
全体 681.6公演/都市

図4-3 b 人口50万~100万人の都市の公共劇場の本拠地公演



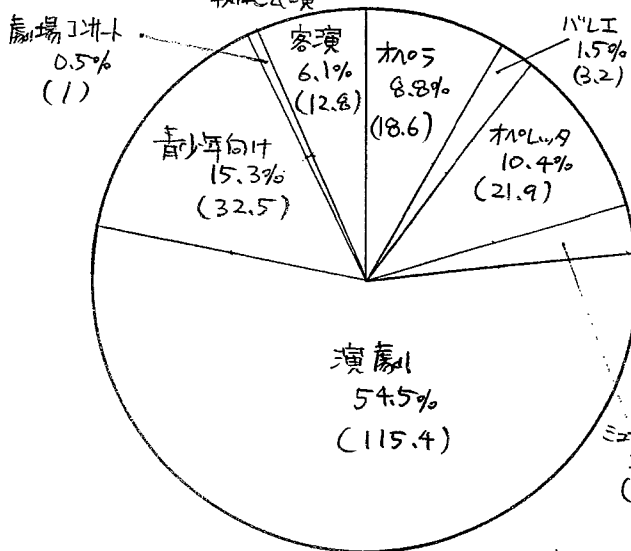
全体 470.5公演/都市

図4-3 c 人口20万~50万人の都市の公共劇場の本拠地公演



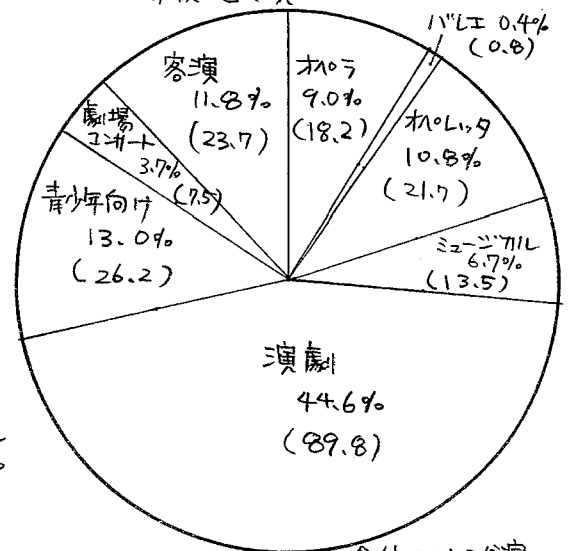
全体 378.3公演/都市

図4-3 d 人口10万~20万人の都市の公共劇場の本拠地公演



全体 211.6公演/都市

図4-3 e 人口5万~10万人の都市の公共劇場の本拠地公演



全体 201.3公演/都市

図4-3 f 人口2万人~5万人の都市の公共劇場の本拠地公演

に対するオペレッタ公演の割合が多いのが特徴である。音楽劇に関しては、大都市に比して、本格的なものより換乘的、軽妙なものが多くなる傾向が見られる。

- 4) 人口10万人から人口20万人の都市も小型の三部門劇場の形式をとるものが多し。全体の傾向は人口20万人から人口50万人の規模の都市の特徴と類似しているが、年間本拠地公演数が減少し、オペレッタ指向がより増加するなどの特徴が見られる。青少年向けの公演の占める割合が増加しているのも特徴である。
- 5) 人口5万人から10万人の都市ではオペラバレエのアンサンブルを持たず、演劇のみを行う劇場が増加するが、この傾向を受けて、オペラバレエ系の公演の割合がこれよりも大きな規模の都市に比して著しく減少しているのが特徴である。また、年間本拠地公演数もさらに減少している。青少年向けの企画は比率として増加する傾向にある。
- 6) 人口2万人から10万人の都市の特徴は人口5万人から10万人の都市の公演の特徴と類似しているが、前者は後者に比して、他の劇団による客演を受け入れる比率が増加しているのが特徴である。

以上のように、公共劇場における公演の110ターンのには都市の規模による差異が見られる。全体の傾向として、オペラ・バレエは、都市規模の大きな所で盛んであり、かつ、都市規模が大きくなるに従って、オペレッタよりもリアリティなオペラが好まれる傾向を帯びている。また、青少年教育のための特別な企画の占める割合は、都市規模が小さくなるほど高くなる傾向も見られる。他の劇団の客演を受け入れる割合も、都市規模の小さいほど高くなる傾向がある。

図4-4には、都市の規模別にみた西ドイツの公共劇場における年間総公演における地方公演と本拠地公演の比率を示した。これによると、人口20万人の規模以上の都市では、地方公演は全体の1割に満たないが、10万人~20万人の都市規模になるとやや増加し1割を越え、人口5万人~10万人の規模の都市では29.4%、人口2万人から5万人の規模の都市では9.6%と大きく増加する。これは、小さな都市の人口では、単独で劇場公演を

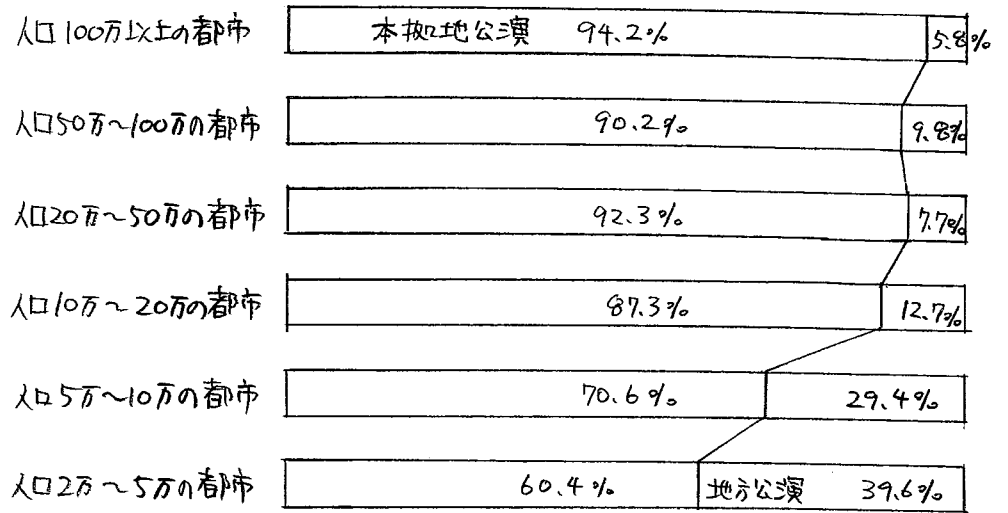


図4-4 都市の規模別に見た、年間(1978/79年シーズン)総公演における本拠地公演と地方公演の比率(Theaterstatistik 1978/79 P.94より作成)

支え切れず、畢竟周辺の都市の観客に依存する割合が多くなるからである。ちなみに、人口5万人以下の劇場は、本節(1-a)で述べた、地方巡回活動の中心に置く、ランデスタター形式のものが多くなる。

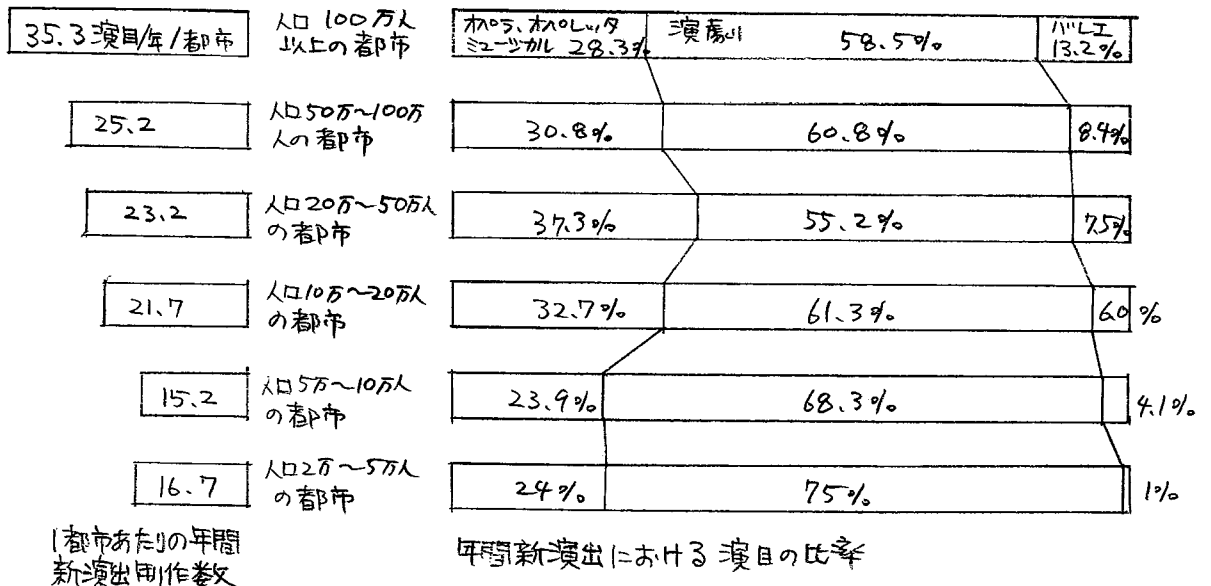


図4-5 都市の規模別に見た年間新演出制作の状況(1978/9 シーズン)

図4-5には、都市の規模別に見た年間新演出制作の状況を示す。西ドイツの公共劇場では1978/9のシーズンには、1都市あたり平均21本の新演出制作、つまり、新しい演じ物が制作されている。これを都市別に見ると、やはり人口の大きな都市ほど多くの新演出が毎年制作されていることが判る。また、都市の規模が大きくなるほど、オペラ、バレエの

の制作が演劇の制作に比して多くなる傾向もうかがえる。

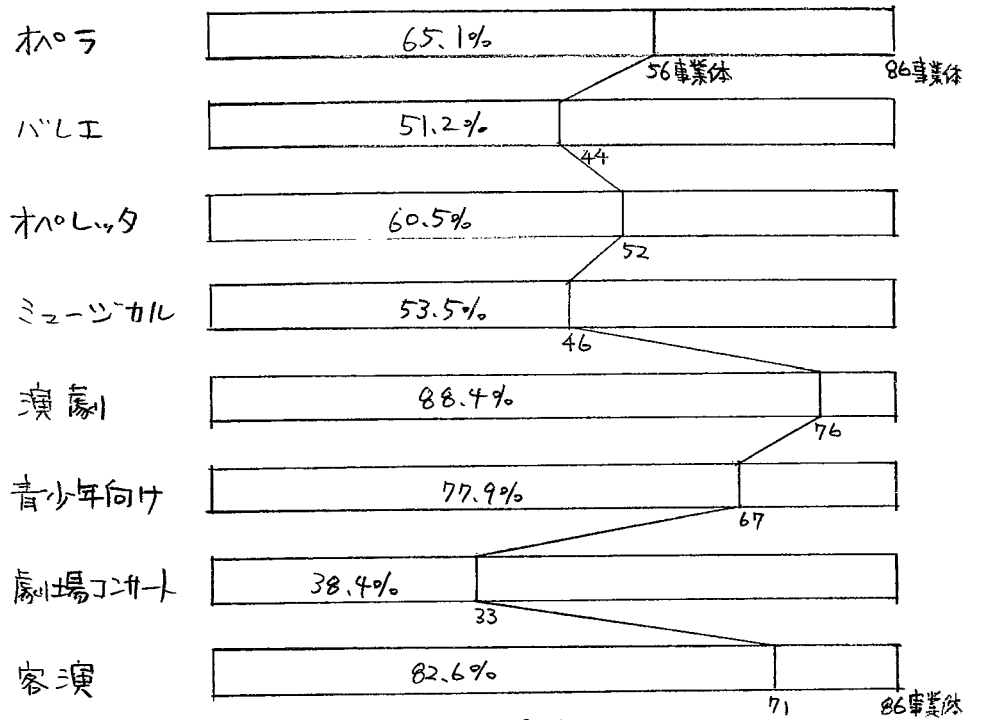


図4-6 西ドイツの公共劇場の事業体86の内、各演目の上演の有無(1978/9年シーズン)

注1) 事業体数は合計で87あること本節(ア)で示したが、この中に特殊な形式をとるライントイツオペラが含まれる。ライントイツオペラは、公演組織としてのライントイツオペラと劇場主体としてのデュッセルドルフオペラハウスとデュイスブルクオペラハウスの事業体として区別されているが、本論では、容易に区別できないため、以後の集計では、事業体として扱う場合、ライントイツオペラとデュッセルドルフオペラハウスをひとつにまとめ、2事業体として扱うことにする。

図4-6には西ドイツの公共劇場の86の事業体において各種の演目などの程度上演されていくを示した。(1978/9年のシーズン) によると、最も上演頻度の高い演目は演劇で88.4%の事業体が演劇公演を行っており、青少年向けの企画も77.9%の事業体で行っており、主要な事業のひとつとなっている。オペラ公演は65.1%の事業体で、オペレッタは60.5%の事業体で行っている。バレエ、ミュージカルの公演はせよ少なく、約50%強の事業体が行っている。

次に西ドイツの公共劇場の観客動員について考察する。図4-7に1978/9年のシーズンにおける年間総観客動員とその演目による内訳を示した。これによると、演劇とオペラ・オペレッタが2大観客動員力をもっていることが判る。公演数では演劇に比して少な

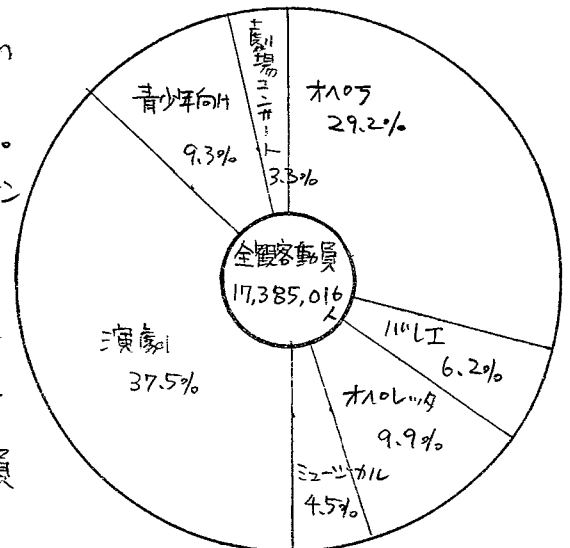
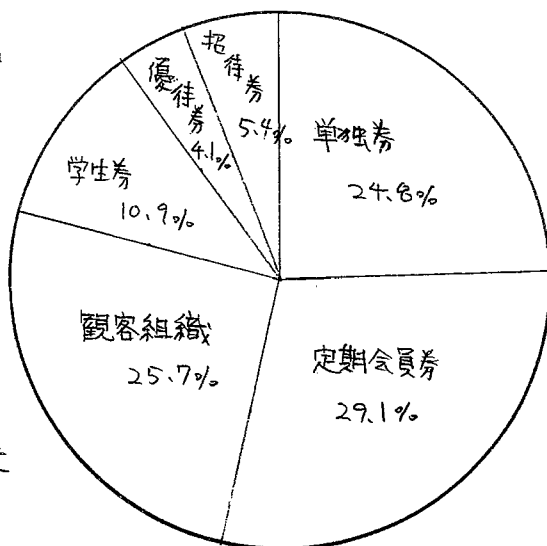


図4-7 西ドイツの公共劇場の年間総観客動員数(1978/9年のシーズン) Theatersstatistik 198/9 P.95(1987)

1) オハラからの動員力では、演劇公演と肩を並べているが、これは、オハラを上演する劇場の観客収容数が演劇劇場のそれよりも上回っていることによる。

図4-8に、西ドイツの公共劇場における本拠地公演の各種切符種別を示す。これによると、西ドイツの公共劇場では、単独券の他に、定期会員券及び観客組織^(*)による動員が本場の基幹の柱となっているのがわかる。また、学生券も大きな比重を占めている。

(*)
たとえば「フォルクスビューネ」のような観客組織



これをさらに、図4-9a~fにより 図4-8 西ドイツの公共劇場の本拠地公演における各種切符種別 (1978/79年) 各都市規模ごとに見ると次のようなことが言える。

1) 単独券は100万人以上の大都市の公共劇場と2万人から5万人の小さな都市の公共劇場で大きな割合を占めている。100万人以上の大都市を例外と考えれば、単独券による率は、都市が小さくなるほど高くなる傾向を持つ。

2) 定期会員券は、100万人以上の大都市では22.0%とやや少ないが、残りの都市では、ほぼ全体の30%程度を占めている。

3) 観客組織は人口20万人以上の都市で特に強く組織されている。小さな都市では、その組織力が弱い為、観客動員に対する寄与率が小さくなる傾向がある。

4) 学生券は、人口2万から5万までの都市における寄与率が7.9%と小さいのを例外と考えると、都市規模が小さくなるほど寄与率が増加する傾向が見られる。これは、おそらく、都市が小さくなるほど、一般の観客の動員が困難になる為、いさおい学生などを優遇して動員を高めようとする努力が行われていることによると推定される。また、都市が小さくなるほど公共劇場の使命が、社会教育面、青少年の情操教育面での意味が大きくなる為と考えられる。

図4-9. 都市の人口規模別の公共劇場の本拠地公演における各種切符種別
(1978/9年のシーズン) "Theaterstatistik 1978/9" P95より作成

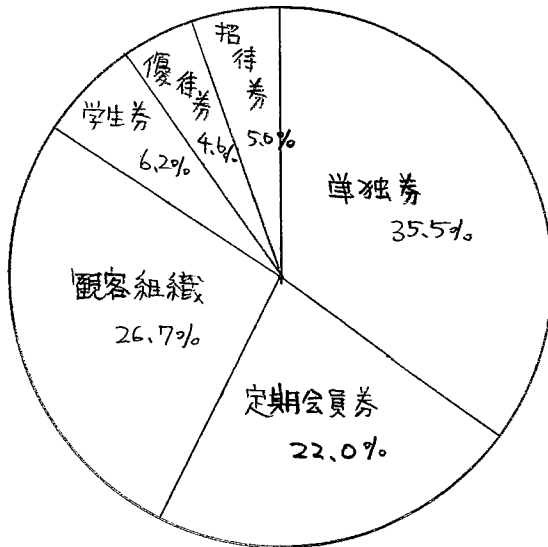


図4-9a 人口100万人以上の都市の公共劇場の本拠地公演における各種切符種別

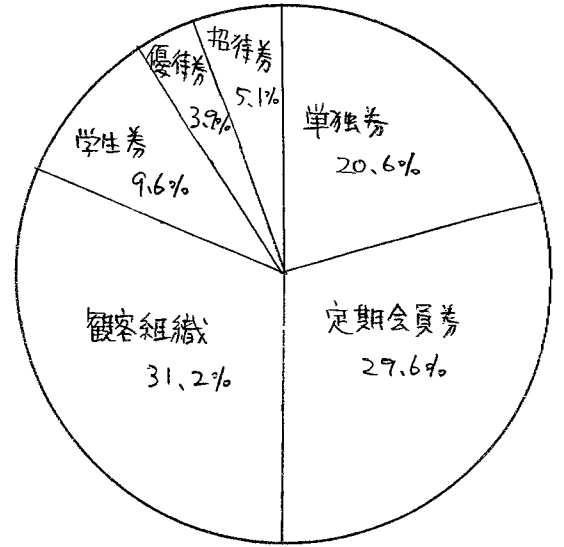


図4-9b 人口50万から100万までの都市の公共劇場の本拠地公演における各種切符種別

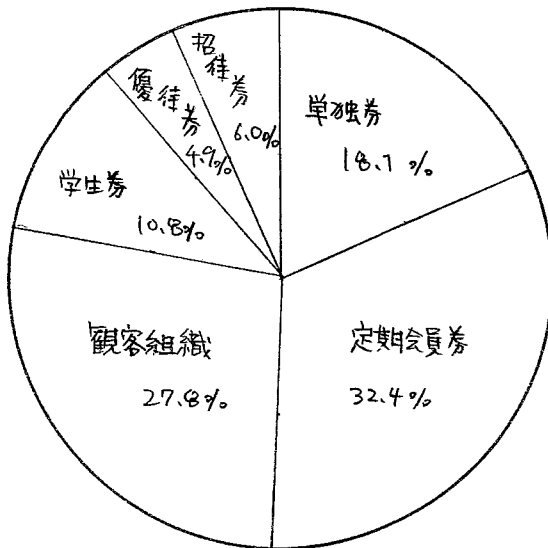


図4-9c 人口20万から50万までの都市の公共劇場の本拠地公演における各種切符種別

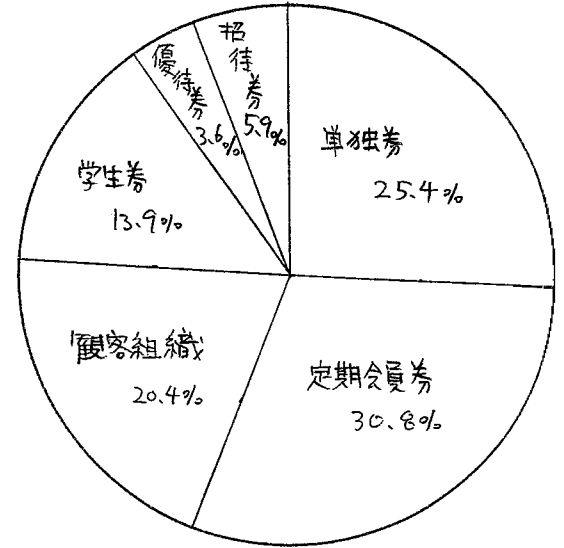


図4-9d 人口10万から20万までの都市の公共劇場の本拠地公演における各種切符種別

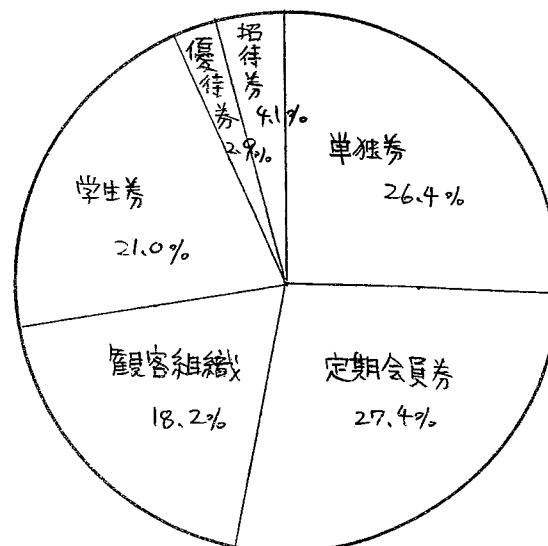


図4-9e 人口5万から50万までの都市の公共劇場の本拠地公演における各種切符種別

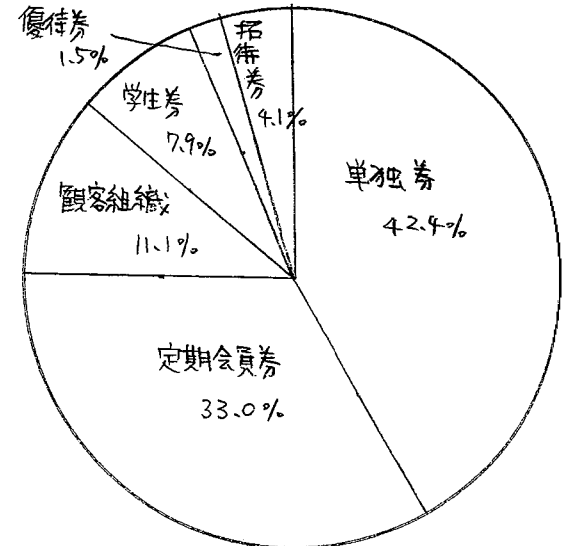


図4-9f 人口2万から5万までの都市の公共劇場の本拠地公演における各種切符種別

都市規模 1978/79年 シーズン	100万人以上	50万 ~ 100万	20万 ~ 50万	10万 ~ 20万	5万 ~ 10万	2万 ~ 5万
1都市あたりの年間 平均観客動員数	1,145,561人	437,375人	269,543人	16,5951人	73,798人	81,383人

表4-3 都市規模別の1都市あたりの平均年間観客動員数(本拠地公演)

表1-3に都市規模別の1都市あたりの平均年間観客動員数を示した。これによると、当然のことであるが大都市ほど年間観客動員数が大きいことが判る。驚くべきことは、人口2万~5万という小さな都市においても、平均8万人という動員力を持っているという点である。図4-3+に見たように人口2万人~5万人の都市における公共劇場の本拠地公演の1都市あたりの平均年間公演数が約200公演であったことを考えると、もし、仮に1都市1ホールの公共劇場があると仮定すると公演ごとに約400人の観客が動員されたことになる。劇場の規模として400人は、それほど大きなものではない。いかに定常的な活動を行うことが、トータルとしての観客動員に大きな力となるかが読み取れよう。

以上で1978/79年のシーズンにおける西ドイツの公共劇場の公演数と観客動員について考察を行った。いかに西ドイツの公共劇場が、都市の生活に大きな影響を与えているかを読みとることができよう。

トについて、大雑把な理解をしておく必要があると思われるので、既存の文献によるドイツの劇場組織の一例を図4-10に示す。この細かい業務内容については本節等2項で詳しく述べるので、ここでは、先に多くの職種が劇場運用には必要であるかを示すのみにしたい。

西ドイツの公共劇場では、先に述べたようにひとつの組織に演劇制作に必要な全ての職種をかかえたクロードなシステムをとっているが、図4-10はその典型的な例である。

さて、ここで、上記の組織構成を頭に置きながら、“Theaterstatistik”による組織の分析を行った。 “Theaterstatistik 1978/79”の職員の統計は1)企画制作文芸指導部 2)オーラ・オペレッタ歌手 3)俳優 4)バレエ 5)ダンス 6)オーケストラ 7)劇場技術者 8)管理事務 9)建物管理の9つの分野に分けられている。この1)企画制作文芸指導部には演出家、指揮者はもとより、文芸員、舞台美術家、衣裳デザイナー、演出助手、コシパティトラー、舞台監督等、劇場の芸術面で指導的な役割を果たす職員が含まれている。

2)オーケストラについては、自前の劇場オーケストラの団員のみを示してある。独立した予算を持ったカルチャーオーケストラが音楽的な作品の上演に共演する形をとる方式の場合は含まれていない。この例にはたとえば“ハンブルク”の州立オペラハウスの場合がこれに該当する。

7)技術者は、舞台美術の制作上演に关わる技術者のことを指し、技術監督もここに含まれる。8)管理事務には支配人、事務員、切符売場窓口係、電話交換手、オーケストラ係り等を含む。9)建物管理にはたとえば、警備員、クローケ係、案内係などが含まれている。

(註1)
110-1914を含む

図4-11は1978/9年のシーズンに西ドイツ公共劇場に働く職員の内訳を示した。直接芸術制作に關わる職員は全体の43.9%を占め、残りは劇場の裏を支える人々であるが、内でも、劇場技術者の比重が大きく、37.3%を占めるのが特徴である。

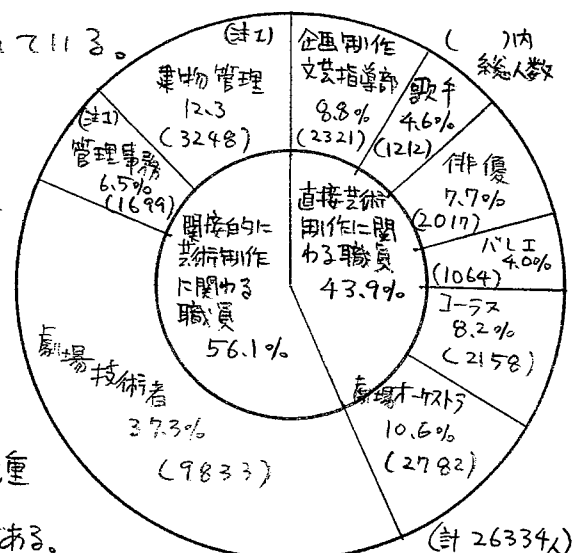


図4-11. 西ドイツ公共劇場に働く職員の内訳

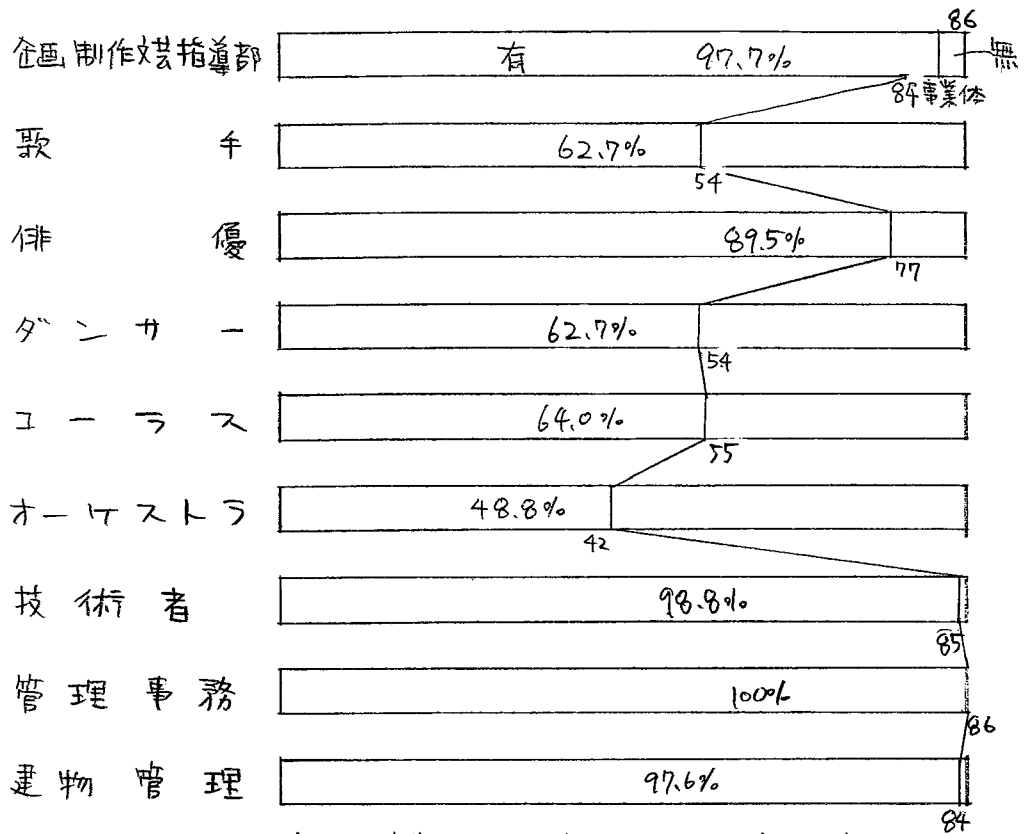


図4-12 西ドイツの公共劇場の事業体86の内の各分野の職員の有無

図4-12に西ドイツの公共劇場の事業体86の内の各分野の職員の有無を示す。これによると、技術者、管理事務、建物管理部門についてはほとんど全ての事業体が持っている。これらは施設の維持管理には最低必要職種であるから当然である。次いで、企画制作文芸指導部も97.7%と高く、これもほとんどの事業体が持っていると考えることが出来る。これも、劇場の芸術面での方向づけを行う意味で重要な部門である。俳優を持つ事業体は全体の89.5%である。歌午・ダンサー、コーラスを持つ事業体は全体の6割強である。オーケストラを持つ事業体は48.8%と低い。歌午・ダンサー、コーラスを持つ事業体がオペラ・バレエを行う事業体とすると、そこにオーケストラを持たない形式のものが存在することを意味しているが、この場合は、オーケストラが別の組織として切り離されていると推測される。この例はたとえば、ハノーファーの州立オペラハウスに見られる。

上記の表と“Theaterstatistik 1978/79”の原表(P40~44)を参考にしながら、西ドイツの公共劇場のタイプを分けると基本的に次の三つのタイプがあることが判る。ただし、企画制作文芸指導部、技術者、管理事務部門、建物管理部門は全ての事業体が共通に持っていること

とする。

1)のタイプ：上記4部門の他に俳優のみをもち主として演劇公演を行う事業体のタイプ

2)のタイプ：上記4部門の他に歌手、ダンサー、コーラス、オーケストラをもち、主としてオペラ・バレエ公演を行う事業体のタイプ。

3)のタイプ：上記4部門の他に俳優、歌手、ダンサー、コーラス、オーケストラをもち、オペラ、バレエ、演劇の全てのジャンルの公演を行う事業体のタイプ

(ただし、2)、3)のタイプの場合、オーケストラが独立した別組織となっている場合もある。)

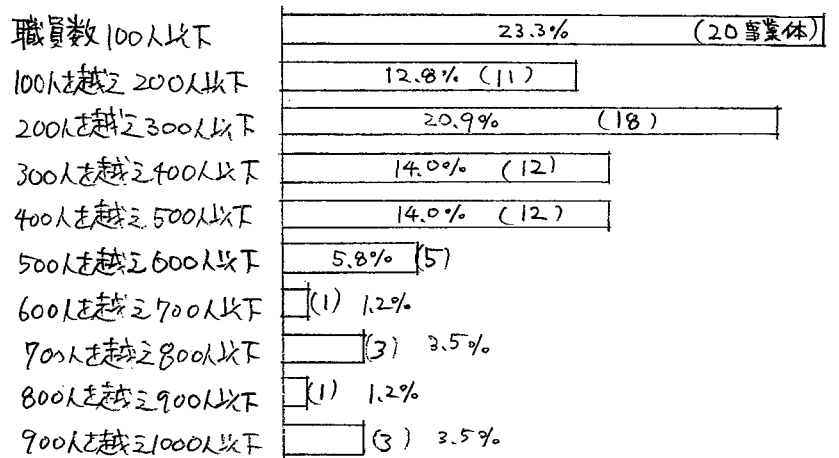


図4-13 西ドイツの公共劇場の事業体の職員の規模(1978/9年)

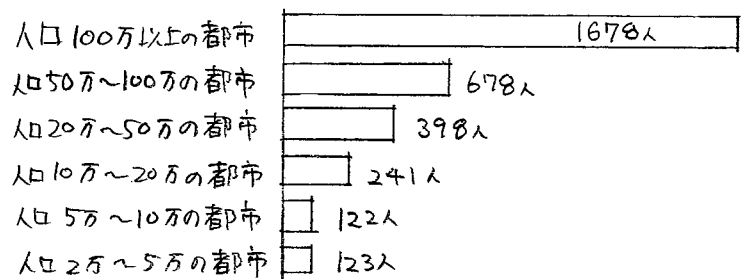


図4-14 1都市あたりの公共劇場の職員数(1978/9年)

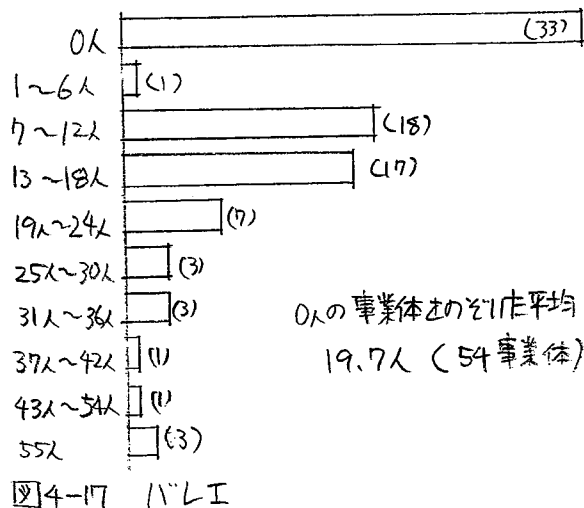
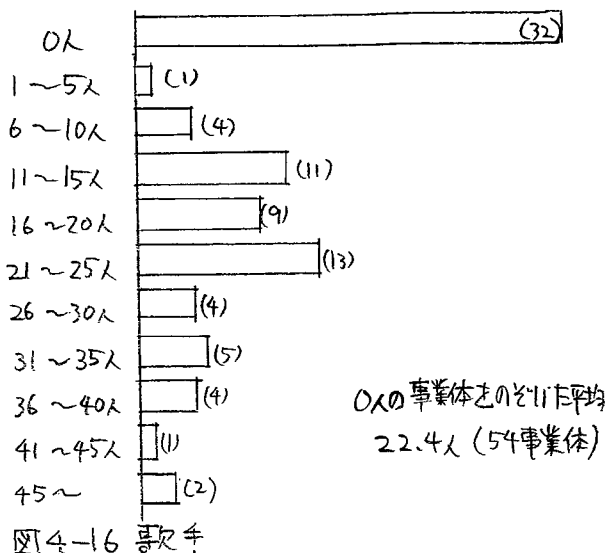
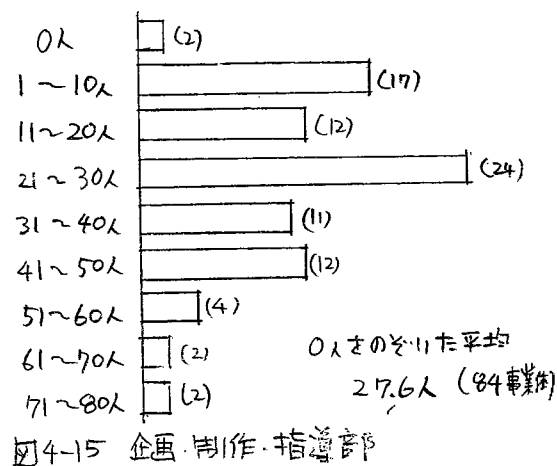
図4-13には、1978/9年のシーズンにおける西ドイツの公共劇場の事業体の職員規模の分布を示した。これによると100人を越える職員を抱える事業体が全体の76.7%もあり、西ドイツの公共劇場の規模がいかに大きいものであるか理解できよう。600人以上の職員を擁する事業体を見ると、デュッセルドルフ市劇場+ライントイソペラ、ハンブルク州立オペラハウス、ケルン市立劇場、ハノーバー州立劇場、フランクフルト市立劇場、ベルリンドイツオペラ、バイエルン州立ミュンヘンオペラ、

シュトゥットガルト州立劇場の8事業体で、世界的に有名なオハラハウス及び、州都あるいは主要商業都市にあるオハラ・バリエ、演劇の公演を行う大規模の三部門劇場であることが判る。このことから理解できるように、オハラ・バリエの公演を行う事業体は演劇のみの公演を行う事業体よりも規模が大きい傾向がある。

図4-14には、1都市あたりの公共劇場の職員数を示した。人口100万人以上のミュンヘン、ハンブルグ、ベルリンの3大都市における職員数が圧倒的に多いことが読みとれる。以下都市の規模が小さくなるに従って、公共劇場の職員数も低下する。しかし、人口2万~10万人の都市においても平均120人を越える職員を擁する劇場を維持していることは驚くべきことである。

さてここで、さらに細かく主要な職種における職員規模を考察する。

図4-15に企画制作指導部の規模の分布を示す。84事業体がこの部門を持ち、その平均は、1事業体につき27.6人の職員規模である。また最も頻度の多い範囲は21人~30人の職員規模を持つものである。



次にオハラ・バリエ関係の出演者の規模について考察する。まず歌

千の規模を図4-16に示す。歌手を雇って11る事業体は54団体あるが、その平均は22.4人である。また最も頻度の高い範囲は21人~25人の規模である。図4-17はバレエの人数を示したものである。やはり54の事業体がバレエを雇って11る。その平均は19.7人である。最も頻度の高い範囲は7~12人、次いで13~18人の規模である。図4-18にはコーラス

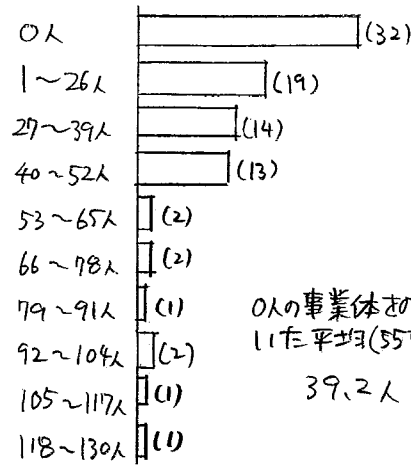


図4-18 コーラス

0人の事業体を含めた平均(55事業体)
39.2人

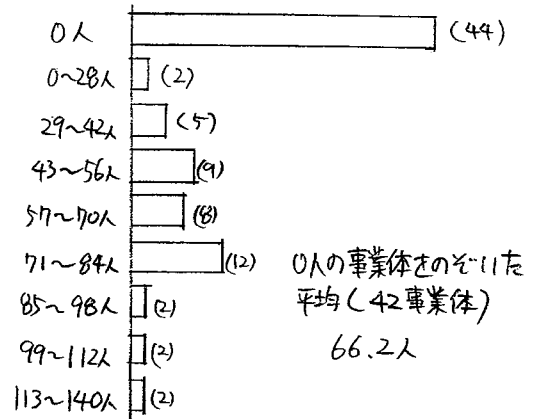


図4-19 オーケストラ

0人の事業体を含めた平均(42事業体)
66.2人

の規模を示した。55の事業体がコーラスを雇い、その平均は39.2人である。大半の事業体が、52人以下のコーラス団を雇って11る。

図4-19にはオーケストラの規模を示す。42の事業体がオーケストラを雇って11るがその平均は66.2人である。最も頻度の高いのは71~84人の団員を抱える事業体である。

次に演劇の出演者である俳優について図4-20に示す。

77の事業体が俳優を雇い、その平均人数は26.2人である。

また、最も頻度の高いのは11人から20人、次いで、21人~30人の俳優を雇って11る事業体である。

以上は直接的に舞台芸術の制作に携わる部門であるが、次に間接的に舞台芸術の制作に携わる部門(非芸術系部門とも呼ばれる)の職員について考察を行う。まず、図4-21に劇場技術者についての状況を

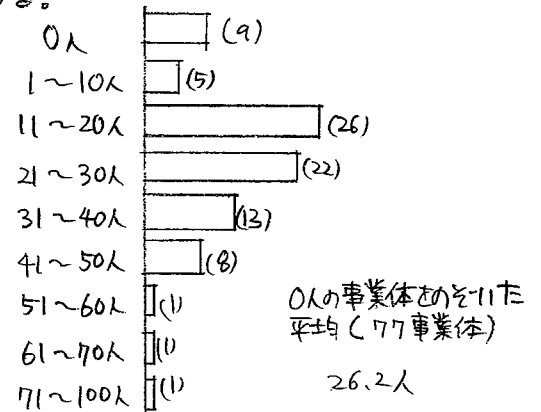


図4-20 俳優

0人の事業体を含めた平均(77事業体)
26.2人

示す。劇場技術者は85の事業体に雇われているが、その平均は115.7人である。最も頻度の高い範囲は1人から41人までの範囲で22事業体が含まれる。しかし、165人から205人の範囲にも小さなピークが見られ、10の事業体がその範囲に入っている。図4-22には管理事務関係の職

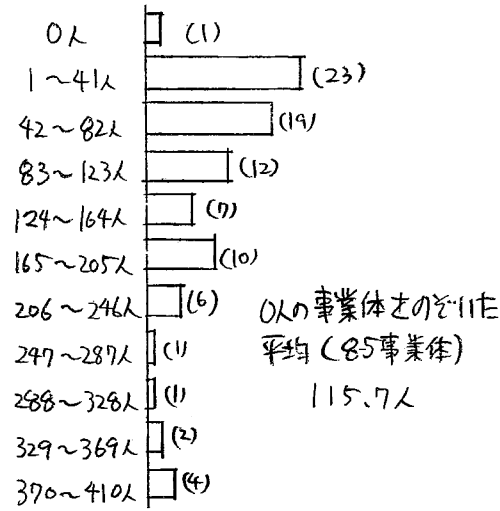


図4-21 劇場技術者

員の規模を示した。この部門は全ての事業体が持っているが、その

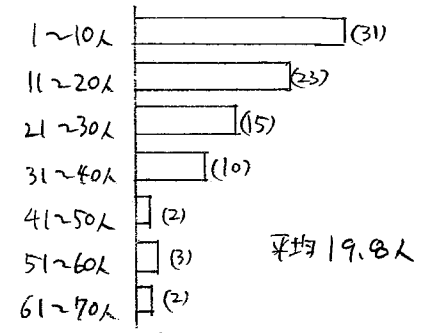


図4-22 管理事務

平均は19.8人である。多くの事業体はほとんど40人以下の職員でこの部門を運用している。

図4-23には、クローカー係、案内係といった建物管理・サービス関係の職員の規模を示す。ここにはパートタイムの職員も含まれている。一事業体あたりの平均は38.7人であり、多くの事業体が56人以下の職員数をとっている。

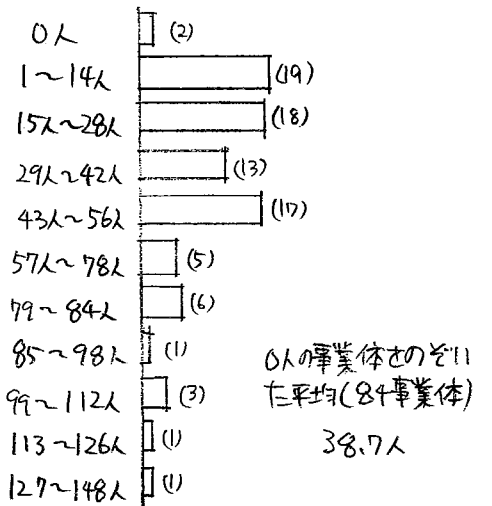


図4-23 建物管理

以上が、西ドイツの公共劇場における職員の構成の概況である。

合 計	企画制作 文芸指導部		技術者	管理事務 (建物管理)		厚生費
	10.1%	出演者・オーケストラ 44.0%		10.8%	1.7%	
人口100万人以上の都市	10.5%	43.3%	33.7%	11.4%	1.2%	
人口50万~100万の都市	8.9%	41.4%	35.1%	12.1%	2.5%	
人口20万~50万の都市	9.9%	44.9%	33.4%	9.6%	2.3%	
人口10万~20万の都市	12.0%	46.5%	30.4%	10.2%	1.0%	
人口5万~10万の都市	11.2%	45.4%	32.7%	9.6%	1.2%	
人口2万~5万の都市	9.5%	49.4%	30.6%	10.3%	0.2%	

図4-25 西ドイツ公共劇場の人員費の内訳 (1978/9年シーズン)

図4-25 に1978/9年のシーズンの西ドイツ公共劇場の人員費の内訳を示す。これを見ると、各職種に対する人員費の配分は、都市あるいは事業体の規模によらずほぼ一定の比率であることが判る。細かく見ると、企画制作の中核となるスタッフに約1割、出演者・オーケストラに4割5分程度、技術者に1/3程度、管理事務・建物管理関係に1割と11%の平均的な値である。図4-26 に1978/9年の物件費の内訳を

合 計	賃借料 管理費		舞台美術	宣伝刊行物	著作権料資料	客席場への 他劇場への 他劇場への 客席場への 他劇場への	他劇場への 客席場への 他劇場への 客席場への	劇場の その他の 費用
	5.6%	5.0%						
人口100万人以上の都市	6.2%	4.4%	19.3%	11.0%	9.7%	6.9%	2.2%	40.4%
人口50万~100万の都市	4.7%	5.3%	18.6%	9.0%	8.5%	7.2%	4.9%	41.9%
人口20万~50万の都市	4.9%	4.5%	17.3%	10.1%	8.3%	3.8%	7.2%	43.8%
人口10万~20万の都市	5.3%	3.8%	19.2%	9.6%	10.1%	5.8%	2.4%	43.8%
人口5万~10万の都市	9.1%	7.7%	15.0%	8.7%	10.0%	5.8%	6.9%	36.8%
人口2万~5万の都市	9.6%	9.7%	16.8%	10.7%	9.4%	7.0%	3.2%	33.6%

図4-26 西ドイツ公共劇場の物件費内訳 (1978/9年シーズン)

示した。ここに示した各項目には下記のような内容が含まれている。

管理費：事務用品，書籍，新聞雑誌，郵便電話，自動車維持費等
著作権料・資料費：著作権，その他の料金，楽譜および台本（購入材料），
資料借入費を含む

その他の劇場運用経費：機材・道具類・備品類の購入・維持費，土地の管理・維持費（建物・部屋を含む），ラジオ・テレビ中継のための費用，コンサート開催費（ソリスト・ホール賃借料，臨時雇用等），制服・作業服の費用，研修養成費，インサルトニク費，裁判費用，およびそれに類する費用，出張旅費，税金，使用料，保険，入場券印刷費，輸送費，旅費，消防隊費用，技術チェック費用，台本，手数料，プレミア料，医者および薬品代金。

さて、図4-26を見ると、人口10万以下の都市で管理費・賃借料の増加及び、それに見合う形で、その他の劇場運用経費の減少が目につく。他は、他の項目については、ほぼ一定の値をとっていることが判る。またるものをあげると、舞台美術費約18%、宣伝・刊行物費及び著作権料・資料費各1割程度、などである。舞台美術費については、都市規模の小さな公共劇場ほど、全体に占める割合が、やや小さくなる傾向も読みとれる。しかし、差は、ごくわずかである。この舞台美術費については、我国のように他社へ発注製作を行っているので、ここで扱われているのは純粋な物品にかかる費用のみであり、その製作にかかる人件費については、人件費の技術者の項に入っていることを断っておきたい。従って、人件費も含めて舞台美術にかかる経費の総体は、これをはるかに上回っていると考えられる。

さて、支出に関する考察の最終として、表1-4に西ドイツの公共劇場の各部門の職員の平均年収を示す。これによると、最も高いのが歌手で、日本円に1DM≒100円と替算して年収約508万円である。次いでオーケストラの614万円と、主要音楽関係の出演者の年収が高いこ

部 門	総支出 (単位1000DM)	総職員数	平均年収 (単位100DM)
企画・制作文芸指導部	117,856	2321	507.8
歌 手	110,728	1212	913.6
俳 優	172,348	2017	557.0
バ シ エ	42,180	1064	396.4
ユ ー ラ ス	74,318	2158	344.4
オ ー ケ ス ト ラ	170,675	2782	613.5
技術者	386,142	9833	392.7
管理事務・建物管理	105,138	4947	212.5

表4-4 西ドイツの公共劇場の各部門の職員の平均年収(1978/9シーズン)

とが判る。ただし、同じ音楽関係でも、ユーラスの年収は約344万円と低い。バシエ団の平均年収も396万円と低い。また、これらの出演者に対して、裏方としての技術者や管理事務、建物管理部門の年収も低い。もっとも、管理事務・建物管理の部門には、切符もぎり、クローク係、案内人といったパートタイムの職が多く含まれているので、その分だけ平均が低下しているとも言える。

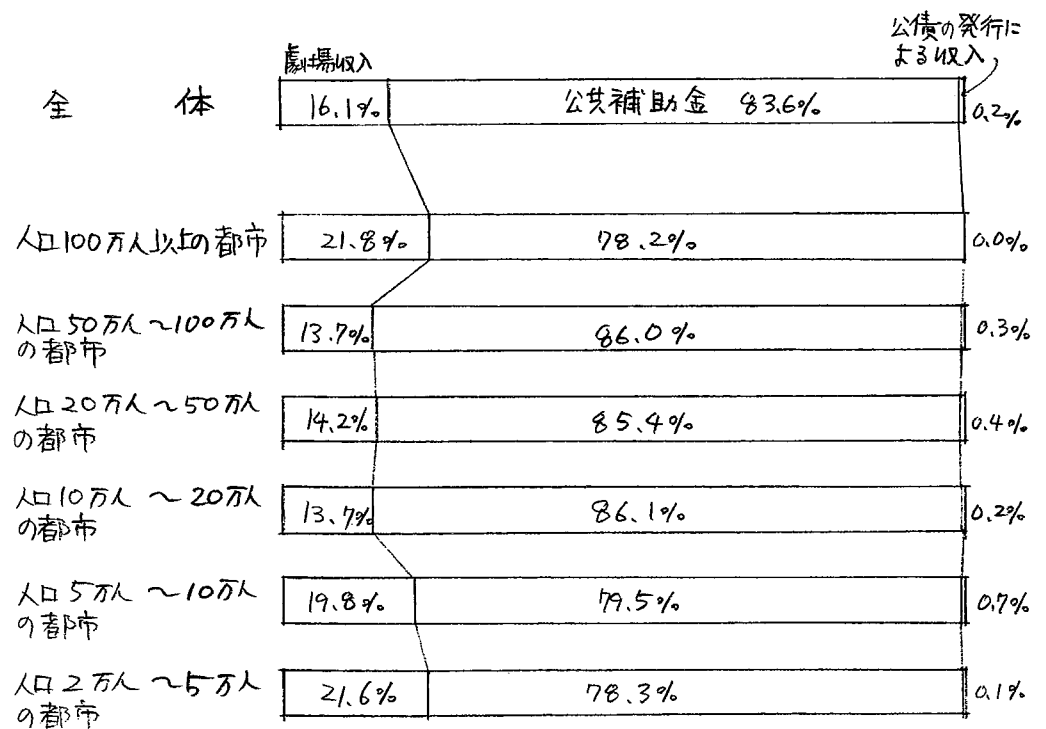


図4-27 西ドイツ公共劇場の収入と補助金(1978/9シーズン)

次に西ドイツ公共劇場の収入について見る。図4-27に、その1978/9

年のシーズンにおける劇場独自の収入とそれを補填する公共補助の割合を示した。これを見ると劇場独自の収入は必要経費の20%にも満たず、8割強を補助金にたよっている状況が見えてくる。特に人口10万人から50万人の都市での自己収入の割合が著しく低い。これは、人口10万人以上の都市では金のかかるオペラ公演を行っている劇場が多いこと。そして、オペラ劇場としての人気は、100万人以上の大都市にある著名劇場に集中し、小さなオペラ劇場では観客を集めるのに苦労していること。さらに、公共劇場として法外な入場料金を取ることが出来ないことなどが影響していると思われる。人口5万人以下の小さな都市での劇場収入が増加しているのは、ここでは、主として金のかからない演劇を中心の活動を行っていること。市の規模が小さいので必然的に大型の補助金が出しにくいことなどによると思われる。

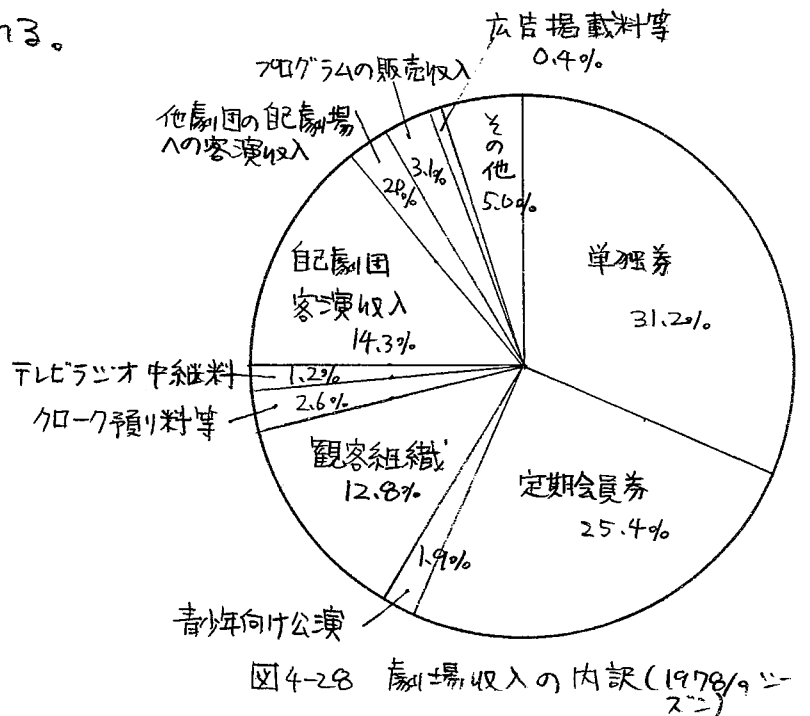


図4-28に西ドイツ全公共劇場の劇場収入における内訳を示した。これによると各種入場券の販売による収入は劇場収入の約71.3%を

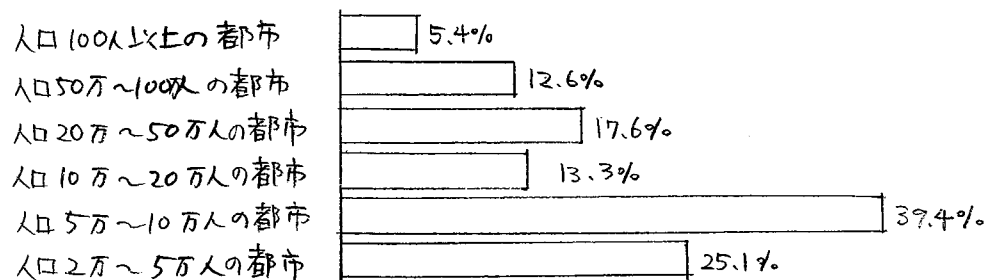


図4-29. 都市規模別に見た劇場収入に占める自己劇団客演収入の占める割合

占めている。そして、その半分以上は、定期会員や観客組織による組織的な票券収入にたよってることが判る。つまり西ドイツでは劇場観客の組織化が強くなりつつあるとこのことが出来る。また自己劇団の他劇場への客演収入も大きな収入源である。つまりある公演を売ることによって得られる収入である。これは全体の約14%を占めている。この他劇場への客演収入について、さらに都市規模別に見たものを表4-29に示す。これによると全体の傾向として、都市規模が小さくなるほど、これに依存する傾向が強くなることわかれる。特に人口5万人以下の都市での依存度が高い。これは、この規模の都市では、1) - b) に示したように、本拠地公演に対し2) 地方公演の割合の高い、ランテスタター形式の事業方式をとる事業体が多いことに対応していると考えられる。

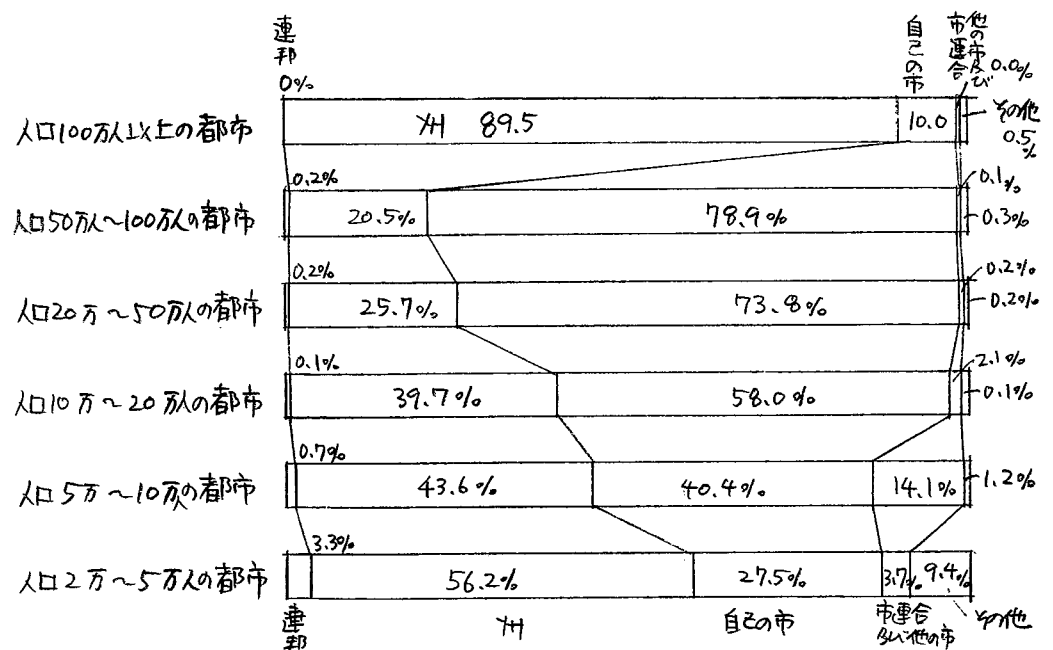


図4-30 補助金の内訳 (1978/9年のシーズン)

図4-30には、都市の規模別に見た補助金の内訳を示す。これによると、劇場の補助は州あるいは市が主体になって行っていることが判る。大都市の大劇場は主として州の補助金によって運用され、人口20万~100万の都市では主として市の補助金によって劇場が運用されていることができる。また、自己の市のみで赤字が補填できないような小さな市ほど州の補助金が増える傾向にある。特徴的なのは、人口5万から10万人の規模の都市で、ひとつの事業体に11つもの都市が連合

して経費を補填していることで、これも、小さな都市の劇場維持の工夫のひとつと承えて良いであろう。

以上で、西ドイツの公共劇場の運用経費・収入・補助金について考察を行った。充実した内容を誇る西ドイツの公共劇場は、やはり、それなりに、大きな予算を必要としていること。そして、その予算は劇場独自の収入では、とても支え切れないものであること。そのために州あるいは市から高額な補助金を支給されていることが理解された。西ドイツにおける公共の傘による舞台芸術振興の意気込みが感じられる。

17- e) 入場料金

*2) 前出. P66~75

ここでは、引き続き^{*1)} "Theaterstatistik 1978/79" をもとに西ドイツの公共劇場における入場料金について考察を行う。

	オペラ ^(オペラ・ハウス)		演劇		学生割引券	
	最高料金	最低料金	最高料金	最低料金	最低料金の提示シートの	その他一般券の50%引きとする専業体39件、30%引き1件、33.3%引き1件、40%引き2件、25%引き1件
提示のあった専業体数	64	64	80	80	43	
平均 (DM)	24.0	6.3	16.8	5.1	4.5	
標準偏差	13.7	2.5	5.8	1.7	1.3	

表4-5 西ドイツ公共劇場の入場料金の概要 (1978/79年シーズン)

表4-5に西ドイツ公共劇場の入場料金の概要を示す。最も経費のかかるオペラ公演における最高料金の平均は1DM≒100円と推算して2400円、最低料金は630円である。演劇公演の場合は最高料金の平均が1680円、最低料金が510円である。これに見るように西ドイツの公共劇場は、多額の補助をあおぎながらも、その料金は市民が気軽に買い求めることが出来る料金にあえて低くおさえてあることが読み取れる。特に最低料金については500円、600円と1100円、非常に安い料金に設定してある。またさらに学生料金については、最低料金を設定してある場合は450円程度、あるいは、一般料金の50%引きという厚い待遇が示され、青少年の情操教育の一環として機能させようとする姿勢が見られる。このような低い入場料金の設定は、とつち民間の劇場でできるものではないが、西ドイツの公共劇場は、「営利を追求する民間の劇場では質の高い舞台芸術は作り得ない、従って公共劇場が必要なのだ」という強い信念に支えられて11るため、こうした料金体系を意識的にとっていると言ふことが出来る。

2) 西ドイツ公共劇場の組織・運用

2) - a) 組織構成

前項リ - c) 「職員」の図4-10にドイツの劇場組織の一例を因示した。ここでは、それをさらに細かく業務内容も含めて考察を行う。演劇劇場とオペラハウスでは、その組織構成が異なるが、ここでは複雑なオペラハウスの構成を中心に考察する。演劇劇場は、その出演者関係部門を中心として、より簡略化された形態をとると考えて良い。

西ドイツの公共劇場は、基本的に4つの部門によって構成される。

1. 企画・制作・文芸指導部門

芸術総監督を頭に、音楽総監督、制作部、文芸部、広報部、舞台美術スタッフ、稽古・トレーニングスタッフ等により構成され、演劇物の企画を立て、構想を練り、稽古を指揮し、舞台美術等のプランニングを行う部門。

2. 出演者に関する部門

歌手、俳優、コーラス、バレエ、オーケストラ等の出演者・演奏者の所属する部門

3. 舞台技術に関する部門。

技術監督を頭に、舞台機構・照明・音響設備の操作や作業を行う係、大道具・小道具・衣裳の製作や管理を行う係等、いわゆる劇場特有の技術的な分野を扱う部門。

4. 経営・管理に関する部門

総務部長(支那人)を頭に、総務・経理、人事などの事務業務や建物管理を行う部門。

ここで、以上4つの部門に所属するそれぞれの職種についてその主たる業務内容を記す。この作成にあたっては、Walter Umruh 著の "Theatertechnik" ^{*1} 及び "Bühnentechnische Rundschau" ^{*2} の 1980年 特別号を参照し、かつ、筆者の西ドイツのガルムシュタット州立劇場及び「シユニオンオペラハウスの各々一ヶ月にわたる滞在調査の結果による補足を行った。

^{*1} "Theatertechnik",
Walter Umruh,
Verlag KLASING & Co,
1969
^{*2} "Bühnentechnische
Rundschau",
Friedrich Verlag.

<企画制作文芸指導部門>

芸術総監督：劇場を代表する顔となる最も重要な地位。劇場の企画運営、職員の雇用・解雇その他一切の業務に関する最高責任者。劇場の経営についても最終的な権限と責任を持つ。基本的には、経営能力に勝れ、舞台芸術に深い理解があれば誰でもなれる役職であるが、現実的には、オペラや演劇の演出家として活躍した人がこの役職に就くことが多い。この場合には、自らも精力的に演出を続けてゆくタイプと、ほとんど自身の演出を行わず、特徴のある演出家を招いて演出をさせ、自らは全体的な企画力により劇場の特徴を打ち出してゆくタイプとが見られる。

音楽総監督：GMDとも略され、芸術総監督に並ぶオペラハウスにおける音楽上の最高責任者。芸術総監督と共に芸術上の総指揮を行い、演目の決定、キャスティング、座員の雇用、解雇等の決定に参加し、稽古の総合的な指示を与える。基本的には指揮者の最高位者であり自ら指揮も行う。

制作部：舞台芸術企画制作部門の要。主として出演者の人事管理を行う。芸術総監督・音楽総監督、演出家等とキャスティング会議を開き出演予定者を決定し、その契約交渉を行う。オペラハウスの場合、この事務所には劇場で上演中のレポートリーの歌える世界中の歌手のリストが備えられ、その主な者のスケジュールと連絡先は常時把握されている。なんらかの事故で公演直前に出演予定のつがなくなった歌手の穴をいかにいように即座に代役の交渉をまとめるのもこの部門の重要な役目である。公演および稽古スケジュールの計画・調整も、ここが行う。

文芸・広報部：明確に限定された範囲はもたないが、劇場の企画・制作上の多様な要求に対応した働きが求められる。基本的な業務にはつぎのものがある。

(1)上演しようとする演目の資料を集め、パンフレットを作成し、観客のサービスに供する。

(2)演出家や指揮者の補佐として訳本や版の選定のための基礎資料を

作成する

(3) 舞台装置家や演出家等のスタッフを決定するための基礎資料を作成する。

(4) 公演予定表や各種劇場インフォメーションの発行

(5) 講演会や展示会の企画

指揮者：通常オペラハウスには数人の常任指揮者がおり、音楽総監督に統括されている。

コレオディトール：立稽古に入る前までに、歌手に一人一人、歌詞や歌いまわしをあらかじめ習熟させる役割をする。これはソリスト練習室を用いて行われる。またコーラスには、コーラス・コレオディトールまたはコーラス指揮者が稽古をつける。この下稽古期間がほぼ終了に近づく頃に音楽アンサンブル稽古が始まるが、これはコレオディトールまたは担当の指揮者が指導する。

コーラス指揮者：コーラスの指導・指揮を行う。

バレエ指導部：振付師、バレエ教師、トレーナー等により構成され、振付、日常のトレーニングの監督、身体管理を行う。

演出家、演出助手、公演監督：演劇ばかりでなく、オペラにあっても、作品の構想の総合的な方向づけを行い、演技の指導、舞台空間の統合など作品の完成に対する総合的な責任を担う。大・中規模の劇場では専属の演出家の他に上演作品に適した演出家を契約する場合が多い。このような場合には専属の演出家は専ら公演監督の役を果たす。演出家の主たる任務が初日に向けて作品をつくり上げる作業とするならば、公演監督の主たる任務は、初日後の作品が演出意図とおり再演されているかどうかを指揮監督することにある。公演監督は上演中、客席背後の監督室で進行を監督し、演技上の誤りをチェックし、必要とあれば、適切な指示を舞台監督に与える。演出助手はこれらの仕事の補佐をする。

舞台監督：上演中の一切の指令をまとめる最高責任者。上演を組織的に正確に進行させる任務である。舞台の神にある舞台監督卓にて譜面あるいは台本、指揮者等を見ながら出演者や裏方に必要な合図

(きっかけ)を与える。

プロンプター：公演中に出演者がセリふや歌を間違えぬよう、あるいは適切な位置に立つよう舞台前面中央のプロンプターボックスの中継から指示を与える役割。公演ばかりでなく稽古にも立ち合う。

端役指導者：エキストラ(黙役)の演技指導に当たる。

舞台美術家・舞台美術アトリエ：舞台美術家は、舞台の空間的な構成を創造する。大きく、舞台装置のデザインと衣裳のデザインがある。この二部門は、同一の美術家が担当する場合と、異なる者が担当する場合とがある。舞台美術アトリエは、舞台美術家とそのアシスタントから成る。小規模の劇場では専属の舞台美術家からの劇場で上演する作品のデザインの大半を手がけるが、大・中規模の劇場になると専属の舞台美術家は1人程度であとは作品ごとに最適な美術家と契約するのが一般的である。この場合、契約を受ける美術家は劇場の舞台機構や制作場の様子に精通していなければならないのが普通であるから、劇場側の舞台美術家及びそのアトリエが、技術総監督や制作場との橋渡しを行う。従って、このアトリエは、舞台美術家の描いたスケッチを製作用の施工図面に引き直すこと、舞台模型等を用いて、舞台転換などの際に技術的な問題が生じないか等のチェックをすることなどが主たる業務となる。

<出演者に関する部門>

ソロ歌手：主役・準主役級のソロのパートを歌う歌手。能力や知名度により幾つかのランクがある。

コーラス：合唱部分を担う人々。ソロ歌手とは、まったく独立した部門を構成している。コーラスはもちろん合唱ばかりでなく演技を支える重要な役割を担うので、演技面にも習熟していなければならない。

バレエ：ソロを踊るバレエソリストと群舞を行うコオールド・バレエに区別される。

オーケストラ：公演の伴奏を行う。劇場により、規模が異なり、非経営が独立している場合もある。

俳優：演劇役者。その人数や構成は劇場によりさまざまである。

<舞台技術に関する部門>

技術監督室：技術監督は劇場の技術面の一切の最高責任者である。非常に高度な技術が駆使される現代の劇場では極めて重要な存在である。この傘下には、舞台機構の操作・管理部門、大道具部門、小道具部門、舞台照明部門、音響効果部門、道具類の輸送部門、倉庫管理部門、道具製作場、衣裳製作場、メイクアップ部門などが含まれる。ただし、メイクアップ部門、衣裳部門は、その業務上、出演者との係わりが強いので、技術部門の中では独立性の高いやや特殊な位置づけにある。技術監督にはアシスタント、トラフトマン等が付き技術監督室を構成する。その主な仕事を挙げると次のようになる。

- ① 舞台作業や稽古・上演に際しての技術安全管理。

- ② 舞台技術者の人事管理

- ③ 舞台備品や資材の調達・管理

- ④ 技術面からの適切な制作・上演スケジュールの設定・管理

- ⑤ 作品の制作・演出・上演に係わる技術的補佐

- ⑥ 各種製作場における作業のコーディネート。ただし大規模の製作場を持つ劇場では、これは主として製作場長の仕事となる。

舞台部長：技術監督に次ぐ要職。その業務は次のとおりである。

- ① 吊物主任・吊物係を指示して上部舞台機構(吊物)の操作の監督を行う。

- ② 舞台機構係を指示して舞台床機構(迫り、回り舞台、ワゴン等)の操作を監督する。

- ③ 大道具操作主任または舞台そと主任、大道具係を指示して大道具の転換、組立解体、搬出入を監督する。

- ④ 公演や稽古が支障なく行なえるための舞台ごの技術スケジュールの管理

- ⑤ 舞台における安全管理

- ⑥ 舞台作業員の労務管理

⑦ 舞台備品の統括管理

(8) 小規模の劇場では製作場のスケジュールや人事管理、資材の購入、在庫管理も行う(製作場長兼務)

吊物主任：舞台部長の指示を受けて吊物装置に係わる全ての業務を統括する。彼のもとには数名の吊物係が所属する。主たる業務は①公演・稽古・仕込み等における吊物機構の操作一切、②吊物操作時における作業監督、安全性の確認、③吊物機構の保守、点検等である。

舞台機構主任：舞台機構主任は舞台部長の指示を受け、主として舞台床機構に係わる業務を統括する。彼のもとには数名の舞台機構係が所属する。劇場によっては吊物主任がいないこともあるが、この場合には舞台機構主任が吊物装置の業務も統括する。また吊物主任がいる場合にも、吊物機構も含めた舞台機構全体の統括責任は舞台機構主任にある場合が多い。舞台機構主任および舞台機構係の業務は次のとおりである。

- ① 公演・稽古・仕込みにおける舞台機構(特に床機構)の操作
- ② 舞台機構操作時の監督、安全確認
- ③ 舞台機構の保守、点検

舞台そと主任：舞台そと主任は舞台部長の指示を受けて、大道具係を統括し、舞台装置の転換、組立解体の直接指揮を行う。原則として上午、下午におのおの一人ずつ舞台そと主任が配備される。公演中に舞台そとに配備される大道具係の数は各そとごと小規模な劇場では数人、ミュンヘンオパラのよう到大規模な劇場では10数人ともなる。舞台の作業は早朝から深夜まで続くので、大道具係は舞台そと主任と4〜6を組み、2〜3交替制を取って稽古や公演のスケジュールを消化する。従って、仕事が多忙な時間帯に追加される予備要員の数も算入すると小規模の劇場でも20〜30人、大規模の劇場では100人に近い大道具係が常時雇用されている。

倉庫主任：主として大道具の倉庫管理を行う。毎日演目の替わるリポートリー制を取る西ドイツの劇場では重要な役割である。

小道具係：小道具の範囲は非常に広い。役者が身につける時計や財布といった小物からカバンやハンドバッグ、傘などの持物、そして食器や壁時計や花飾りのような室内装飾品、イスや机などの家具、馬車やリヤカーなどの大型のものも時によつては小道具として扱われる。さらには舞台上で食べられる料理や飲物も小道具である。小道具係は、これら種々雑多な内容を留意しなければならぬ。また、セストルで撃たれたり、刀で切られた時に血の出るような特殊な舞台効果を演出する仕掛けを工夫するのも小道具係の役割である。

武具係：武具の製作及び管理を行う係。

照明部門：照明部門の業務はプランニングとオペレート、技術管理に大別される。照明プランナーの地位が確立して舞台美術家と同じ扱いを受ける国では照明プランナーは、技術部門というよりはむしろ、企画制作部門に所属し、作品ごとに契約する形態となる。従つて劇場付きの照明部門では主としてオペレート、技術管理を行う。ドイツの場合は照明プランナーの地位は確立しておらず、従つてこの作業は照明部門の総括者である照明主任の役割となる。照明主任のこの他の業務には、照明の仕込みの指示監督、照明操作卓の操作、照明係の労務管理、照明器材の購入・管理などがある。照明主任の下には10数名から20数名の照明係が配属され、仕込みや稽古、公演における照明器具の調整やスポットライトの操作などを行う。

音響部門：電気音響設備を管理・操作する部門。その主たる業務は音響調整卓の操作、音響器材の設置・調整・修理、効果音のプランニング・録音等が挙げられる。

大道具製作場：レポートリー制をとる劇場には普通専用の大道具製作所が付属し、製作場長がこれを統括する。大道具製作場には、扱う素材により、それぞれ、画工場、木工場、金工場、立体成形・彫塑工場等の種別がある。近年では従来の木枠にキャンバス布を張る張物の使用ばかりでなく発泡スチロール製や金属製の立体的な大道具(まるもの)などの使用量が増大する傾向にあり、彫塑工場あるいは金工場の存在がますます重要になりつつある。

画工場：大道具製作場の要となる部門。画工場には背景画家、画家助手、絵具調合係、アッポリケ係が所属する。背景画家は舞台美術家のデザインに合わせて舞台装置の絵付けを行い、アッポリケ係は背景幕などを縫い合わせたり、装飾物を縫い付けたりする。従って、こうした作業の為画工場の周辺には縫製用の広間や縫師場が隣接されることが多い。画工場部門は画工場主任が統括する。

木工場：舞台装置の枠組の主体となる木材を加工して組み立てる工場。数名から10数名の木工職人によって構成される。

金工場：木製の舞台装置を補強する構造用金物から鉄骨製の舞台装置に至るまで、金属を使用する仕事の一切をここで引き受ける。数名程度の金工職人によって構成される。場合によっては管轄業務も行う。

立体成形・彫塑工場：この工房での仕事は雛形を用いた成形工作と彫塑造による工作とのふたつに大別される。前者は複製を多く必要とする場合に利用され、素材としてはゴム、石膏等が用いられる。真空吸引機による真空成形も、最近では常識的に用いられる。調型材料としてはもっぱら発泡スチロールが主体である。ここに傷つく職人は彫刻家など芸術家気質の職人である。ここでつくられる立体物には布や毛を張りつける場合が多いので縫師職人も必要である。

衣裳製作・管理部門：衣裳製作、管理部門は大別すると①衣裳技術監督室、②衣裳製作場、③楽屋及び衣裳倉庫の管理部門の三つに分かれる。

衣裳技術監督室：衣裳部門の最高責任者である衣裳部長および秘書、アシスタント、事務係等によって構成され、衣裳部門全体の統括を司る事務所である。衣裳デザイナーにより作成された図面をもとに、それとどのように製作、監理するかがここで計画される。素材の購入、在庫管理もこの事務所で行う。

衣裳製作部門：衣裳製作部門に係わる職種は実に多様である。その主なものには衣裳の裁断縫製師、製靴職、モーティスト（頭飾りを製作する係）、小物細工師等がある。西ドイツの劇場では使用す

る全ての衣裳を独自の工場で生素材から加工製作するので、それに必要な全製作工程に対応した工房が設けられている。

楽屋および衣裳の管理部門：衣裳製作部門で製作された衣裳はすべて登録され倉庫に保管される。これを管理するのが衣裳管理係の仕事である。楽屋管理係は公演のための衣裳の仕分け、楽屋での衣裳の着付け手伝いなどの仕事を行う。楽屋施設の管理もこの業務である。

マイクアップ部門：マイクアップ師の所属する部門である。マイクアップ師の仕事には大別して、①かつらや付けの製作及び管理②公演時における出演者のマイクアップのふたつがある。公演は夜に行われるので、彼らの日程は昼間はかつらの製作、夜は公演のマイクアップと大変きびしい労働条件となる。

<劇場の経営、管理に関する部門>

劇場総務部門：総務部長(支配人)を最高責任者として、主に総務、経理、一般人事などの事務業務を行う部門。主として金銭上の管理を行い、芸術上の運営には一切干渉を行わないのが原則である。切符の販売、予約を行う票券部門もここに含まれる。

建物管理、営繕部門：主として建物一般管理業務を行う。この部門にはクローク、案内係をはじめとして守衛、夜警、郵便係、電話交換手、設備管理技師、清掃員等が含まれる。

2) - b) 公演スケジュール

*2)
正確にはフランス語
読みで「シヤトル
システムと呼び、イキ
リス式のシヤトル
という言葉と区別し
ているが、我が国ではシヤ
トルシステムと呼
びなわけているの
で、ここでは、それを
用いる。

*1)
"Der Spielplan"
P.A. Schmücking
(住所)
(33 Braunschweig)
(kastanienallee2a)

西ドイツの公共劇場では、11くつもの完成された作品を持ち、それ
を日替りで上演する「シヤトルシステム」*1 をとっている。これが
具体的にどのようなものであるかを1978/9年のシーズンの中から
11くつかの劇場のプログラムを選んで、そこでの作品の上演状況を
図4-31から図4-36に示した。それぞれ縦軸に演目、横軸に月・日と
してある。なお、この表は、このシーズンの「Der Spielplan」*2 と呼
ばれる、西ドイツの公共劇場の全この公演予定表を掲載した月刊雑誌
をもとに作成したもので、現実に上演されたものとは、若干の変更が見
られるところがあることが予想される。

さて、本節一項で、西ドイツの劇場統計によつて示したとおり、各劇
場の規模は設置される都市の規模に対応して大小の差が見られる。

特に人口100万人以上の大都市に建設されているオペラハウスの規
模は非常に大きい。まず、それからなかめて見た。図4-31に、ミ
ュンヘンオペラの年間上演状況を示す。42本のオペラ、10本以上の

バリエの作品が毎日演目を替えて上演されている状況がよく判る。

また、歌曲のタバココンサートなども、月1回程度の割合で開催され
ている。1978年10月には『魔笛』、同12月には『カバリエル・スチカ
ンガ』の4つの演目が新演出されている。さらに2本のバリエの新

演出も行われている。図4-32は、ハンブルク州立オペラの年間上
演スケジュールである。1年間に34本のオペラ(ミュージカルも含む)が上

演され、また20本近いバリエの作品、その他月1回程度のコンサート
などが催されている。新演出としては1978年10月に『グラン・マカ

ブラ』、11月に『陰謀と愛』、12月に『ウェストサイドストーリー』、
そして、やや間を置いて3月にバリエ『じゃじゃ馬ならし』、4月に『

ル・ツット』(演奏会形式)、6月に『ルキア』、7月にバリエ『夢見る人』
が行われている。約1ヶ月おきに新演出が重ねられることが多い。

図4-33は、ハノーファー州立オペラハウスの1978/9シーズンの年間上
演スケジュールである。1年間に34本のオペラ(ミュージカルも含む)が上

演され、また20本近いバリエの作品、その他月1回程度のコンサート
などが催されている。新演出としては1978年10月に『グラン・マカ

演スケジュールである。これは、先のミュンヘンオプラ、あるいはハンブルクの州立オプラハウスのようにオプラ部門のみ独立した事業体ではなく、オプラと演劇両方をひとつの事業体で行う、中都市型の規模を持つのが特徴である。ただし、オプラハウスと演劇劇場とは建物としては独立している。ここでは、そのオプラハウス部門のスケジュールのみを示す。ミュンヘンやハンブルクに比べて、上演演目の数がやや減少しているのが特徴である。しかし、やはり新演出について見ると、1978年9月に『ローエングリン』、10月に『ファイアヴェルク(花火)』、11月にバシエ『ロメオとジュリエット』、1月に『マクラフロス事件』、2月に『刀かじ』、4月に『ハムレットとメリガン』、5月に『ラ・ホエー4』、6月に『アルジェリアのイタリア人』とほぼ1ヶ月ごとに新しい演し物がかけられていくことが判る。

図4-34は、規模としてはハイバー州立オプラハウスに類似しているケルン市立劇場オプラハウスの年間公演スケジュールである。

これと、ハイバー州立オプラハウスのスケジュールと比較して見るとケルン市立劇場オプラハウスはハイバーのそれに比べて、あるひとつの作品を、1期間内に集中させて上演する傾向が見られる。この傾向は、ハンブルク州立オプラハウスにも見られる。このように、

ひとつの作品の上演を1期間に集中させると、歌手との契約や、道具の収納などの関係で劇場の労務が楽になるといわれ、こうした集中式の公演形態をとる傾向が強まっている。しかし、反面、これは、後述するレポートリー側の良さを減らすものであるため、その限界についても議論がなされている。

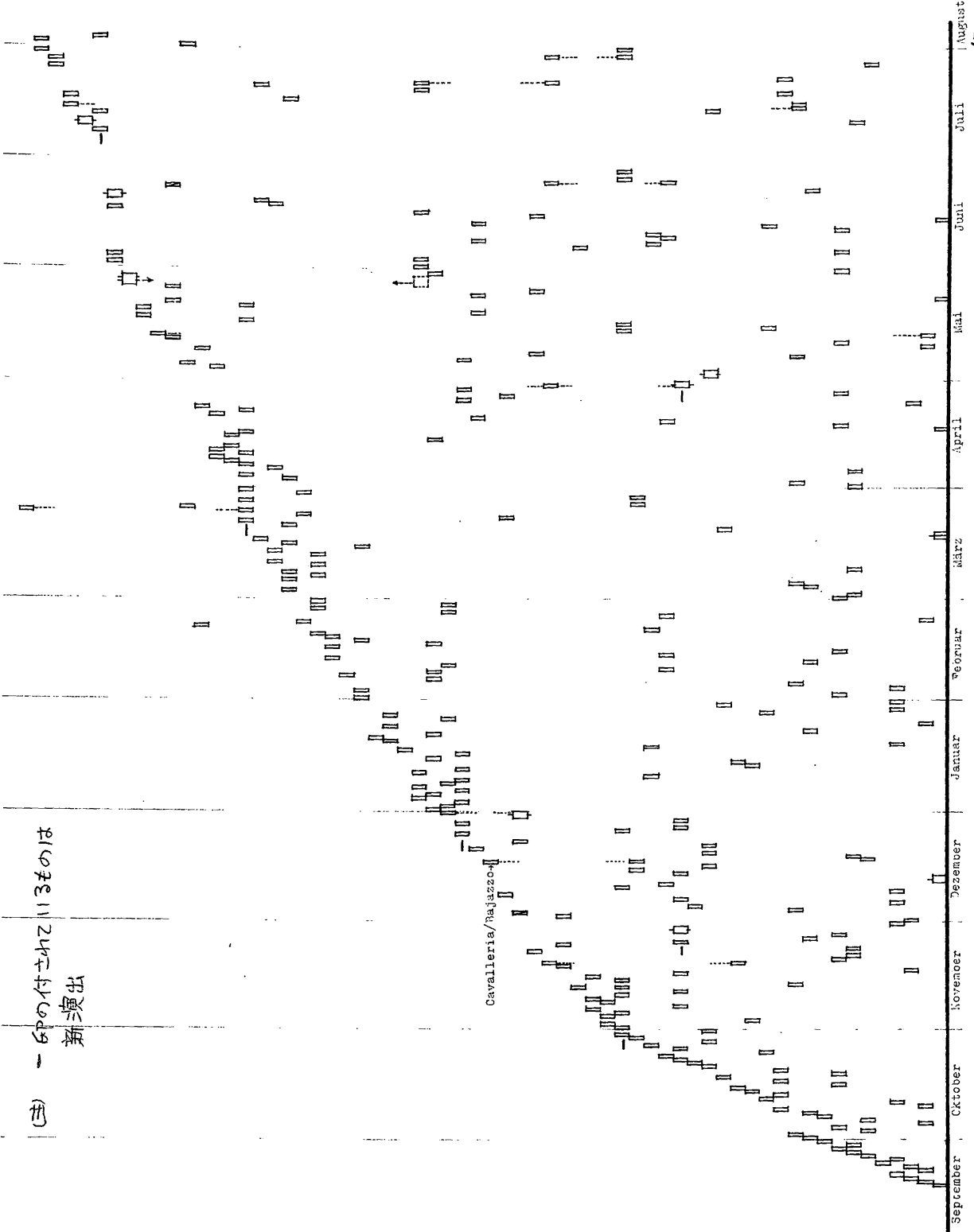
図4-35は、カールスルーエ州立劇場、図4-36はタルクツェタット州立劇場の年間公演スケジュールである。

このふたつの劇場は、規模としては、中規模クラスであるが、劇場としては、最も新しく建設されたもので、非常に合理的な設計がなされているものである。また、両者とも、ひとつの事業体でオプラ、演劇を行うが、それぞれの上演施設を全て、一箇所にとめてつくっている。基本的には、大劇場をオプラ、バシエに、小劇場を演劇に使用しているが、大劇場を演劇に使用することもある。

- 64 Ballett-Vorshow-Matinee
- 63 "Fellens et Mellisande"
- 62 "Konzertante Auff. "Maria Stuarda"
- 61 "Fertner"
- 60 "Jastspiel" "Paradise Lost" (Jugendart)
- 59 "Die Weistensinger von Nurnberg"
- 58 Ballett-Darbietungen
- 57 "Wahlversammlung" "Der Rosenkavalier" (beschl.)
- 56 Ballett: Karmouville-Opern
- 55 "Matihee: Rind am die Oper"
- 54 Ballett: La fille au Garice
- 53 "Lal - Wood: Ballett"
- 52 "Der Giovanni"
- 51 "Cherim (Ballett)"
- 50 "Parsifal"
- 49 "Aida"
- 48 "Salome"
- 47 "Pascy"
- 46 Ballett: "Der Nuckackker"
- 45 Ballett: "Der Dienerspenstern Hummwig"
- 44 "Klemerne"
- 43 "Joris Polinow"
- 42 "Die Entführung aus dem Serail"
- 41 Ballett: "Strawinsky"
- 40 "Kosterdämmerung"
- 39 "Cello"
- 38 "Die Fatale"
- 37 "Der Rosenkavalier"
- 36 Ballett: "Ciselle"
- 35 "Die Piedermaus"
- 34 "Cavalleria/Rajazzo"
- 33 "Die Hochzeit des Figaro"
- 32 "Mitarbeitergespräche"
- 31 "Elektra"
- 30 "Hänsel und Gretel"
- 29 "Ein Waschenputz"
- 28 "Kleider-Matihee"
- 27 Ballett: "Schwabenstübchen"
- 26 "Kendert"
- 25 "Arabella"
- 24 "Die verkaufte Braut"
- 23 "Die Zauberflöte"
- 22 "Dappne Waterfly"
- 21 "Antene Waterfly"
- 20 "Der Trommler"
- 19 "Ballett-Show"
- 18 "Rundwieser"
- 17 "Ballett: "Donna Anna Julia"
- 16 "Der Diebente Heiliger"
- 15 "Die Kalandre"
- 14 "Das Rheingold"
- 13 "Wolfgang auf Maxes"
- 12 "Lehr"
- 11 "Akademie-Konzert"
- 10 "Königin"
- 9 "Die Frau ohne Schatten"
- 8 "Cosi fan tutte"
- 7 "Mielio"
- 6 "Der Barbier von Sevilla"
- 5 "Die Walküre"
- 4 "Eugen Onegin"
- 3 "Rigoletto"
- 2 "Don Carlos"
- 1 "La Boheme"

(西) 一 67の付されて いるものは
新演出

Cavalleria/Rajazzo



September Oktober November Dezember Januar Februar März April Mai Juni Juli August
(日)

図4-31 ミュンヘンオパラの1978/9シーズンの演目上演状況

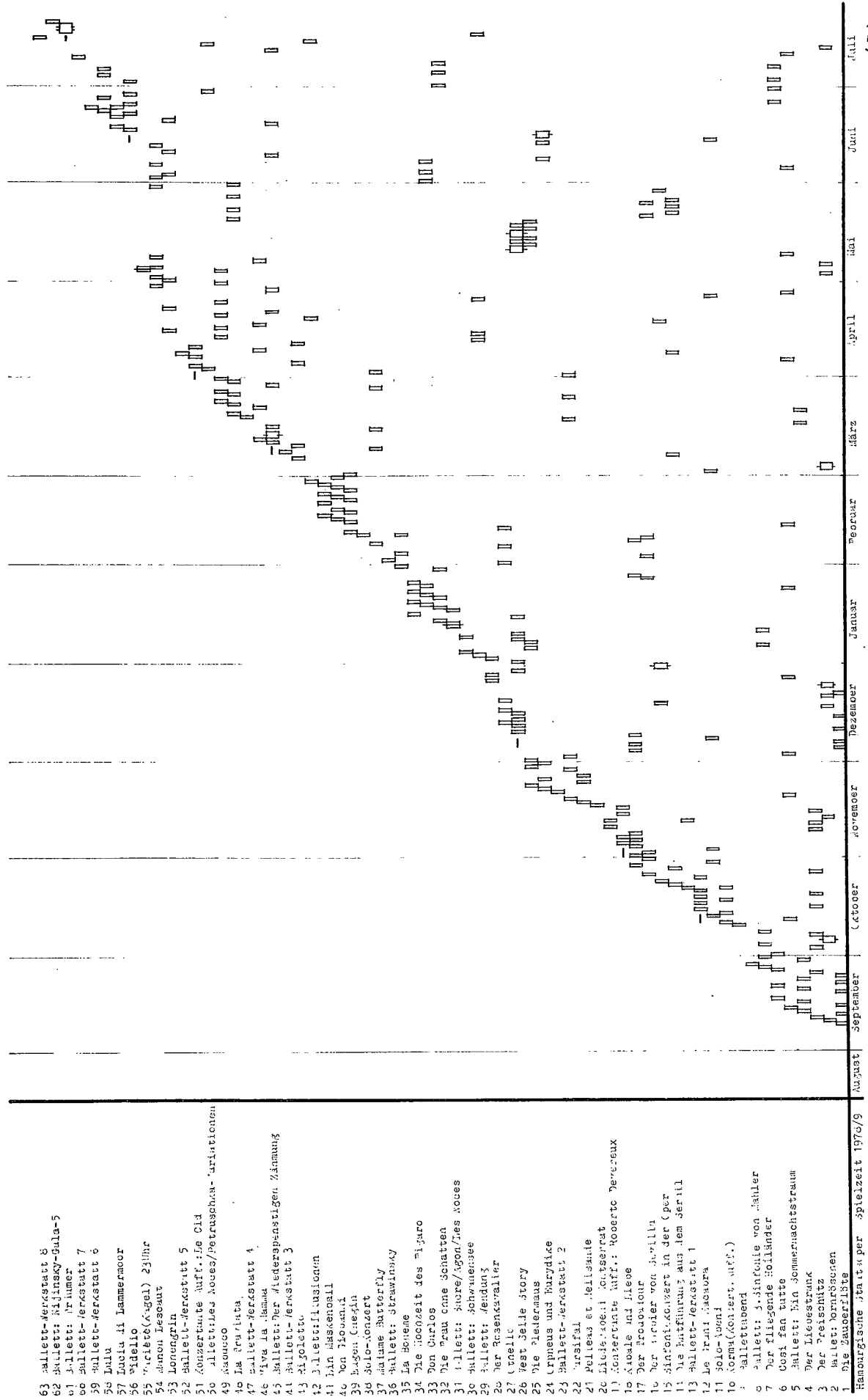
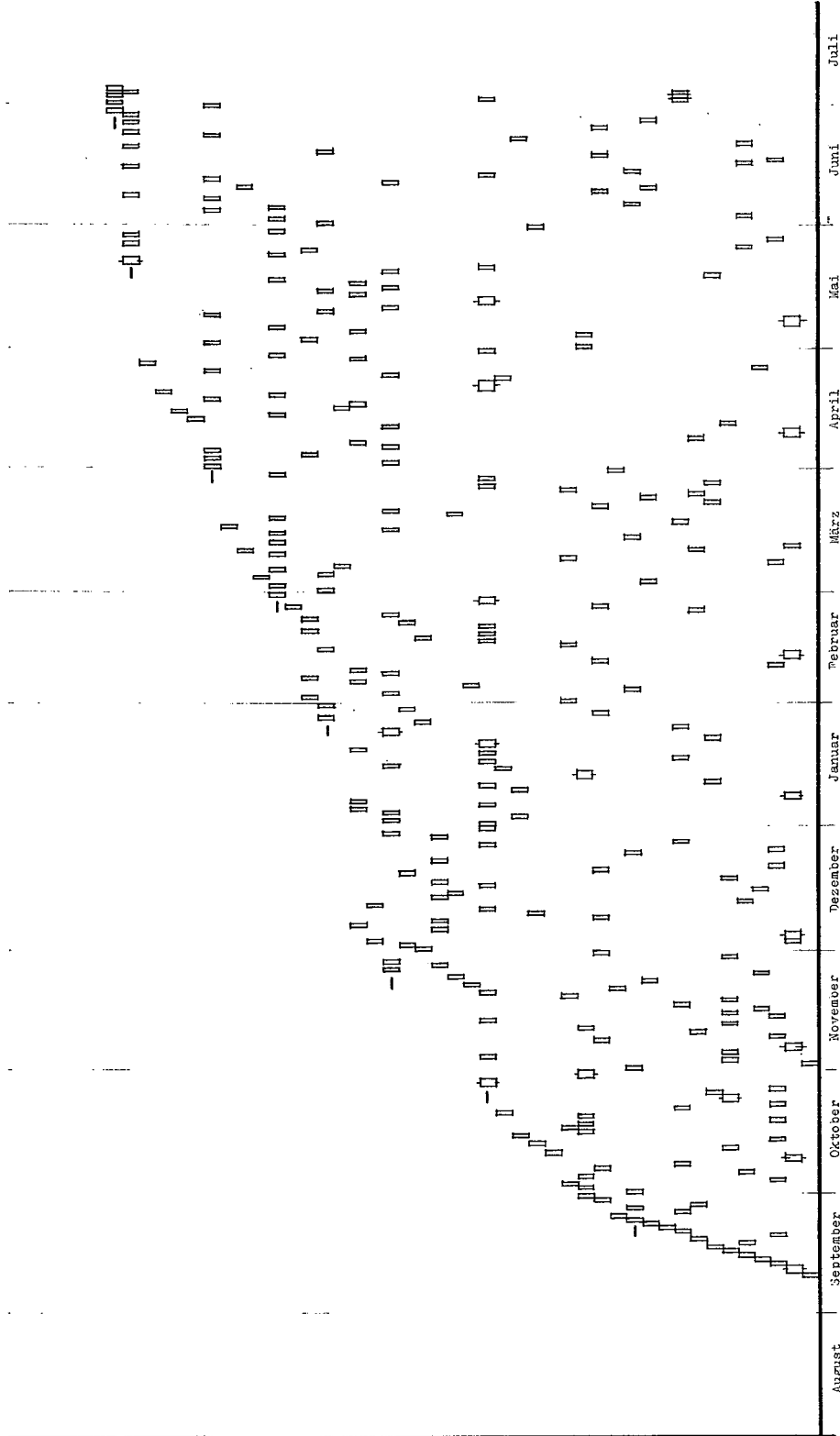


図4-32 ハンブルク州オペラの1978/79シーズンの演目上漢林況

(B)

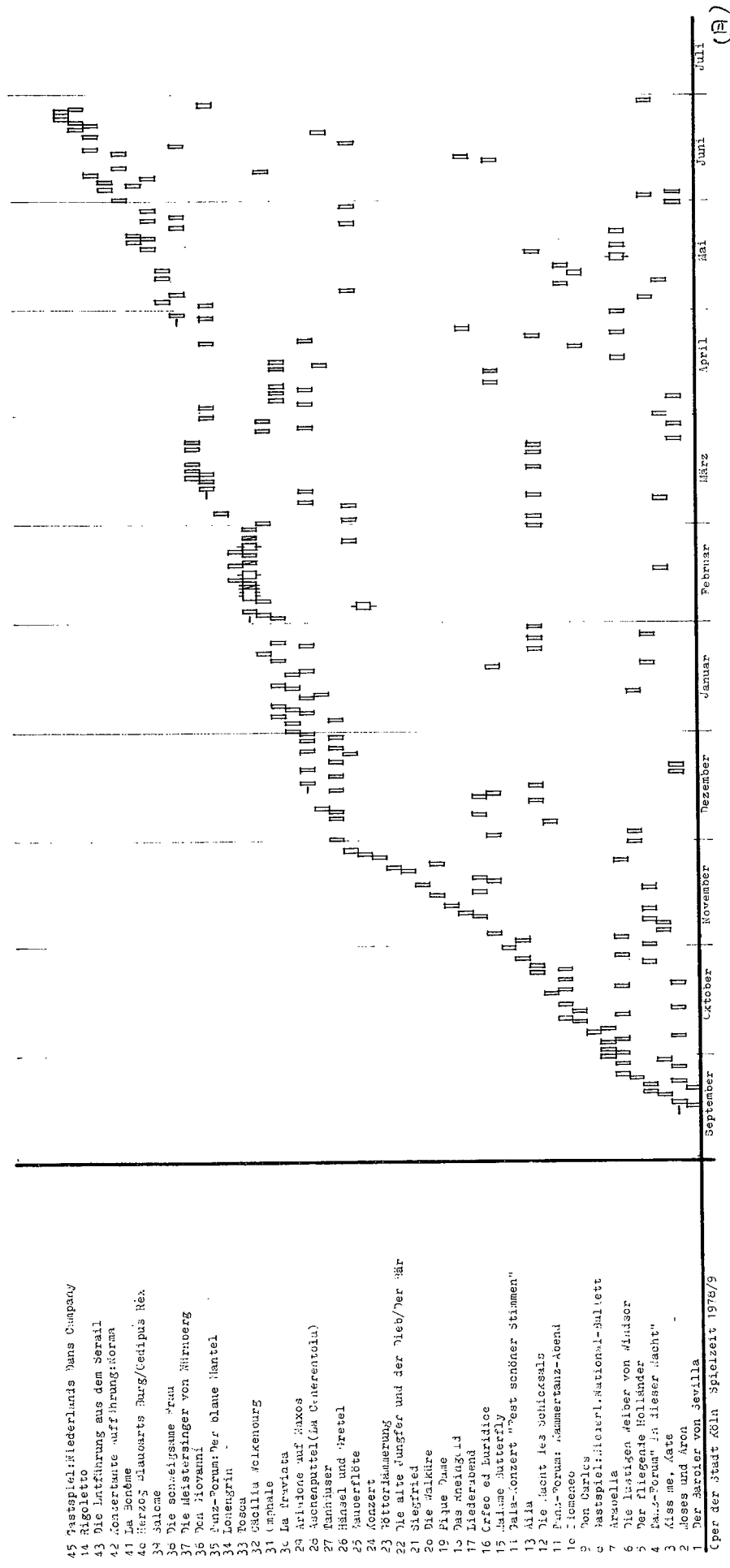
- 44 Die Italienerin in Algier
- 43 La Bohème
- 42 Störckammerung
- 41 Siegfried
- 40 Die Walküre
- 39 Das Rheingold
- 38 Pelleas und Melisande
- 37 Der Zigeunerbaron
- 36 Studio-Oper
- 35 Tristan und Isolde
- 34 Der Waffenschmied
- 33 Experimentelle Inszenen
- 32 In Maskenball
- 31 Die Sache Makropulos
- 30 Der Bettelstudent
- 29 Lucia di Lammermoor
- 28 Der Freischütz
- 27 Romeo und Julia
- 26 Dornröschen
- 25 Tosca
- 24 Hansel und Gretel
- 23 Der Troubadour
- 22 Rigoletto
- 21 Feuerwerk
- 20 Mielio
- 19 Hoffmanns Erzählungen
- 18 Die Meistersinger von Nürnberg
- 17 Don Pasquale
- 16 Salome
- 15 My Fair Lady
- 14 Das Land des Lächelns
- 13 Die Entführung aus dem Serail
- 12 Lotengrin
- 11 Der Barbiere von Sevilla
- 10 Der Vogelhändler
- 9 Herzog Blaubarts Burg/ Die Kluge
- 8 Così fan tutte
- 7 Die verkaufte Braut
- 6 Der Wälschler
- 5 Ballettaend
- 4 La Traviata
- 3 Die Hochzeit des Figaro
- 2 Konzert
- 1 Die Zauberflöte

(Gartenhaus Hannover Spielzeit 1970/71)



(A)

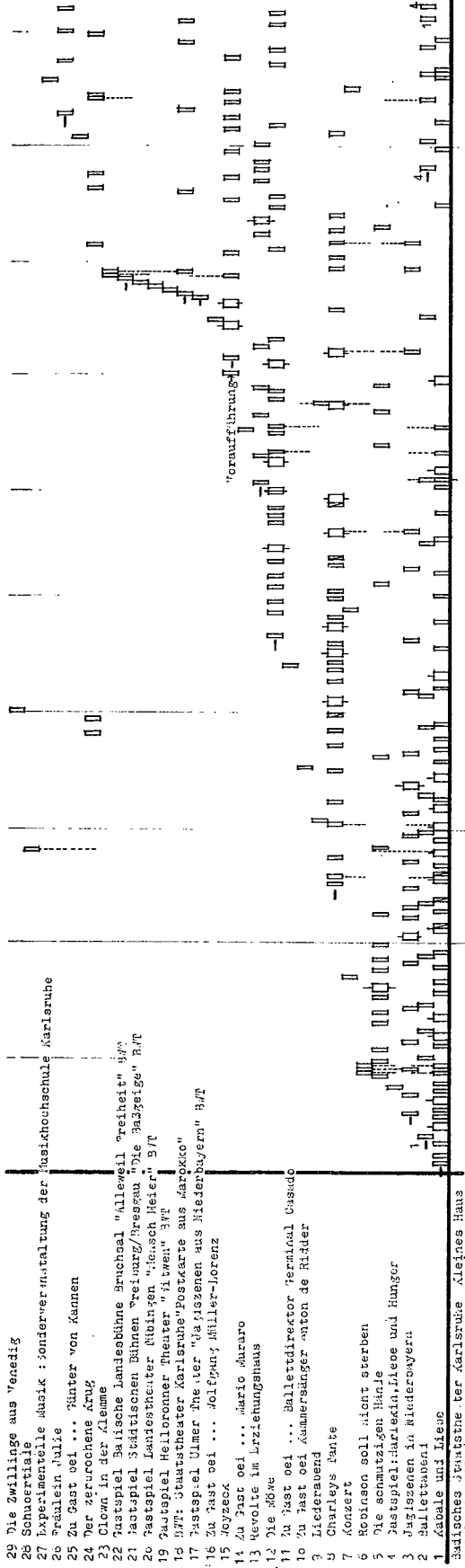
図4-23 ハーバー州立オペラハウスの1978/79シーズンの演目上演的状況



- 45 Fastspiel: Niederlands Hans Company
- 14 Rigoleto
- 43 Die Entführung aus dem Serail
- 42 Konzertante Aufführung: Norma
- 41 La Bohème
- 40 Herzog: Maucourts Burg/Geipus Rex
- 39 Salome
- 38 Die Schneekönigin Frau
- 37 Die Meistersinger von Nürnberg
- 36 Don Giovanni
- 35 Prinz-Fortuna: Der blaue Mantel
- 34 Lohengrin
- 33 Tosca
- 32 Cecilia Weikenbourg
- 31 Inphale
- 30 La Traviata
- 29 Ariadne auf Naxos
- 28 Aachenputel (La Cenerentola)
- 27 Fannhäuser
- 26 Hänsel und Gretel
- 25 Zauberflöte
- 24 Konzert
- 23 Rötterkammerung
- 22 Die alte Jungfer und der Lieb/der Hår
- 21 Siegfried
- 20 Die Walküre
- 19 Figue Dame
- 18 Das Rheingold
- 17 Liederabend
- 16 Creso ed Euridice
- 15 Madame Butterfly
- 14 Gala-Konzert "Vest schöner Stimmen"
- 13 Alla
- 12 Die Nacht des Schicksals
- 11 Fünf-Türme: Kammerkonzert-Abend
- 10 Tomeneo
- 9 Don Carlos
- 8 Fastspiel: Internat. National-Ballett
- 7 Arsabella
- 6 Die lustigen Weiber von Windsor
- 5 Der fliegende Holländer
- 4 Fünf-Türme: "In dieser Nacht"
- 3 Kiss me, Kate
- 2 Moses und Aaron
- 1 Der Zarator von Sevilla

Oper der Stadt Köln Spielzeit 1978/9

図4-34 テルン市立劇場ホラハウスの1978/9シーズンの演目上渡林流

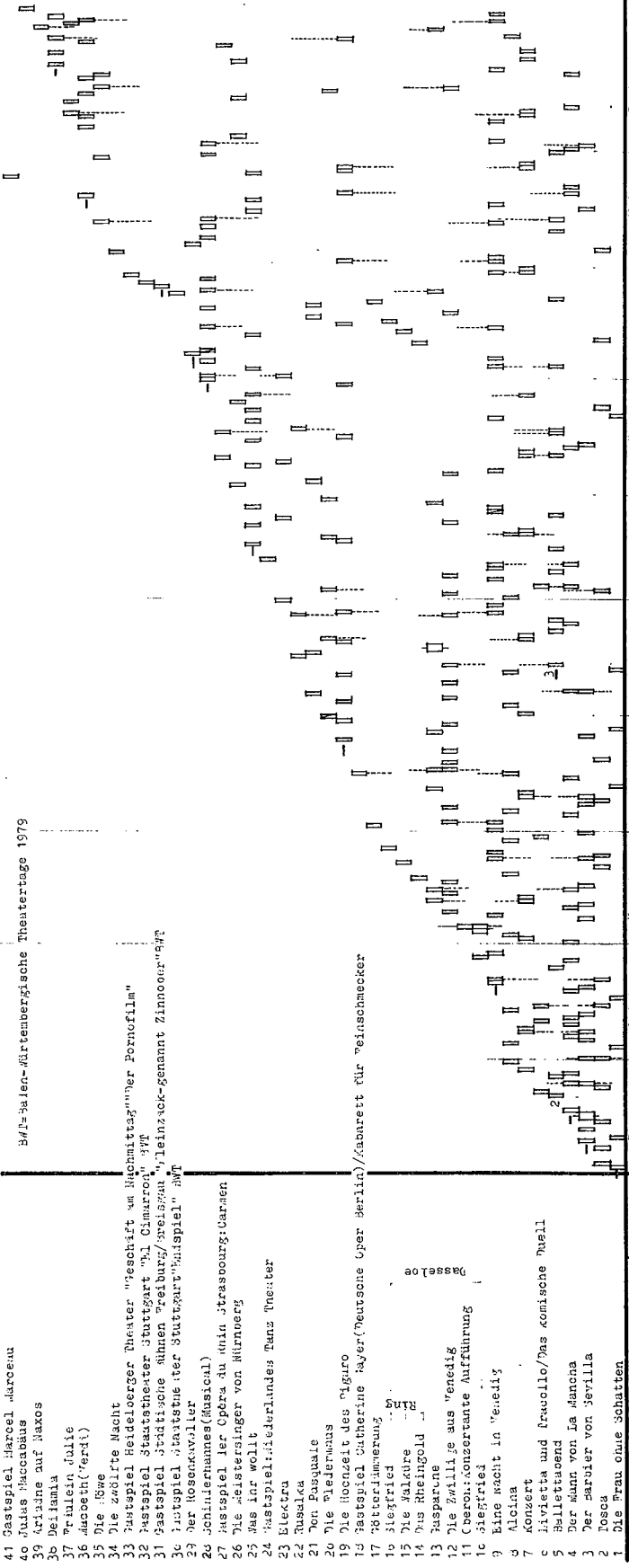


(A)

- 29 Die Zwillinge aus Venedig
- 28 Scherzstücke
- 27 Experimentelle Musik: Sonderveranstaltung der Hochschule Karlsruhe
- 26 Pauline Julie
- 25 Zu Gast bei... Hinter von Können
- 24 Der zerbrochene Krug
- 23 Clown in der Klemme
- 22 Fastspiel Ballische Landesbühne Bruchsal "Allewelt 'reinet'" B/T
- 21 Fastspiel Städtisches Bühnen "Freiwig/Bressan "Die halbzarte" B/T
- 20 Fastspiel Landesbühnen "Hansch Meier" B/T
- 19 Fastspiel Heilbronner Theater "Hilwen" B/T
- 18 B/T: Staatstheater Karlsruhe Postkarte aus Marokko
- 17 Fastspiel Ulmer Theater "Das Szenen aus Niederbayern" B/T
- 16 Zu Gast bei... Joffman, Müller-Lorenz
- 15 Joycecek
- 14 Zu Gast bei... Mario Marano
- 13 Revolte im Erziehungsraum
- 12 Die 68er
- 11 Zu Gast bei... Ballettdirektor Terminal Casado
- 10 Zu Gast bei Kammerbänger Anton de Räder
- 9 Niederabend
- 8 Charleys Fante
- 7 Konzert
- 6 Robinson soll nicht sterben
- 5 Die schmutzigen Hände
- 4 Fastspiel: Harlequin, Fikoe und Hunger
- 3 Jagdszenen in Niederbayern
- 2 Ballettabend
- 1 Kabale und Liebe

Städtisches Staatstheater Karlsruhe Kleines Haus
Spielzeit 1979/80

B/T=Baden-Württembergische Theaterstage 1979



- 41 Fastspiel Marcel Marceau
- 40 Neues Puppentheater
- 39 Kitzine mit Naxos
- 38 Delilana
- 37 Pauline Julie
- 36 Macbeth (Verst.)
- 35 Die 68er
- 34 Die zweite Nacht
- 33 Fastspiel Heidelberger Theater "Festschrift am Nachmittags" über Pornofilm
- 32 Fastspiel Staatstheater Stuttgart "El Cimarron" B/T
- 31 Fastspiel Städtische Bühnen "Weiburg/Weisgan" "Leinack-Genannt Zinnkopf" B/T
- 30 Fastspiel Staatstheater Stuttgart "Halspiel" B/T
- 29 Der Kesselschaller
- 28 Johnnie Walker (Musical)
- 27 Fastspiel der Opera du Min. Strasbourg/Carmen
- 26 Die Kaiserbühnen von Nürnberg
- 25 Was ihr wollt
- 24 Fastspiel: Niederlandes Tanz Theater
- 23 Elektra
- 22 Rusalka
- 21 Von Pasquale
- 20 Die Maiermaus
- 19 Die Hochzeit des Figaro
- 18 Fastspiel Katharine Bayer/Neutsche Oper Berlin/Kabarett für Weinischmecker
- 17 Roterhammerung
- 16 Siegfried
- 15 Die Jahre
- 14 Das Rheingold
- 13 Pasquale
- 12 Die Zwillinge aus Venedig
- 11 Opernkonzernte auführung
- 10 Siegfried
- 9 Eine Nacht in Venedig
- 8 Alcina
- 7 Konzert
- 6 Livietta und Tracollo/Das komische Spiel
- 5 Ballettabend
- 4 Der Mann von La Mancha
- 3 Der Baroliere von Sevilla
- 2 Tosca
- 1 Die Frau ohne Schatten

Städtisches Staatstheater Karlsruhe Großes Haus
Spielzeit 1979/80

図 4-35 カールスルエ州立劇場の1978/9のシーズンの演目上演状況

(A)

	September	Oktober	November	Dezember	Januar	Februar	März	April	Mai	Juni	Juli
16 Der Protagonist											
15 Änderungen der dramatischen Literatur											
14 Wilhelm-Busch-Abend											
13 Zella											
12 Matinee											
11 Der Schöne Hahn											
10 Oper und Tanz											
9 Pioniere in Ingolstadt											
8 Blustband											
7 Paestrina											
6 Emanuel Kant											
5 Diskussion über "Cyrano von Bergerac"											
4 Der hat Angst vor Virginia Woolf...?											
3 Freitagsabend um 9											
2 Karl ...											
1 Der Hofmeister											
Staatstheater Darmstadt Werkstattbühne Spielzeit 1978/9 (H-K) 30 1700 (A)											

	September	Oktober	November	Dezember	Januar	Februar	März	April	Mai	Juni	Juli
22 Das heiße Herz (Austausungsspiel Staatstheater Wiesbaden)											
21 Die Katzen											
20 Der Wald											
19 Theaterball 1979											
18 Altemnachmittag mit Peter Kreuder											
17 Gastspiel: Schön war die Zeit (Peter Kreuder)											
16 Die Räuber											
15 Matinee: Zum Jahr des Anders											
14 Pioniere in Ingolstadt											
13 Emanuel Kant											
12 Gastspiel: Kabarett Hans-Dieter Hüsch											
11 Ein Florentinerhat											
10 Cyrano von Bergerac											
9 Konzert											
8 Gastspiel: Lotte Goslar's Pantomime Circus											
7 Der Vater (Staatstheater Wiesbaden)											
6 Tanz auf dem Vulkan											
5 Antigone											
4 Der Hofmeister											
3 Mysterien											
2 Der Fröhliche Weinberg											
1 Herr Pantale und sein Knecht Hensli											
Staatstheater Darmstadt Kleines Haus Spielzeit 1978/9 (A)											

	September	Oktober	November	Dezember	Januar	Februar	März	April	Mai	Juni	Juli
22 Graf Ingrida											
21 Die lustigen Weiber von Windsor											
20 Theaterball 1979											
19 Der Schöne Hahn											
18 Gastspiel: "Das Kom(m)ischen"											
17 C. Valerius Rusticus/ Der Bajazzo											
16 Ballettproduktion: Städtischer Musikverein											
15 Paestrina											
14 Gastspiel: Niederländisches Theater											
13 Bierland											
12 Die Weiermaas											
11 Klettermaas und die anderen Tiere im Mackevackewald											
10 Der Fröhliche Weinberg											
9 Karl ...											
8 Hänsel und Gretel											
7 Ballett: Peer Gynt : Staatstheater Wiesbaden											
6 Lieberbund											
5 Die lustige Witwe											
4 La Praviata											
3 Konzert											
2 Beiszar											
1 Von Hiccup											
Staatstheater Darmstadt Großes Haus Spielzeit 1978/9 (A)											

3-36 大劇場の1978/9シーズンの演目上演状況

たとえば、カールスルーエ州立劇場では『かもめ』などは大・小両劇場で上演されているし、『十二夜』『お気に召すまま』などの演劇は大劇場で行われている。カールスルーエ州立劇場の大劇場はプロセニアムスタイル形式、小劇場はオープンステージ形式と、劇場のタイプも異なっているが、複数の劇場を組み合わせたこのような施設のあり方は、企画に融通性をもたせることが出来るため、面白い方式であると考へる。ダルムシュタット州立劇場のほうはカールスルーエ州立劇場の場合よりも、大劇場をオーラ・パリエに小劇場を演劇に分けて使用する傾向が強いが、それでもやはり、『楽しきぶどう畑』などは両劇場で上演されている。さらにここには、稽古場を改造した小さなスタジアム舞台が設けられ、あらゆるジャンルの実験的な試みが行われている。

以上のように規模の大小等細かな違いはあるが、西ドイツの公共劇場は基本的に、毎日演目を入れかえて上演するレポートリー制をとっていること、そしてそれが具体的にどのようなようになっていくかを見る事が出来た。これは、レポートリー制は何かある理由によって必要とされているのであろうか。その主たる理由を見るとつぎのようになる。

(1) 歌手・俳優などの出演者のコンディション調整のため。

たとえば、ソロ歌手は、1日歌った後は、次の日は休養をとることが原則とされている。声を守るためには、そうした調整が必要となる。従って同じ役をダブルキャストとしないう限り、連日、同演目を長期間にわたって上演することは困難となる。この点レポートリー制は都合が良い。

(2) できる限り長く作品上演を続け、評価を定着させるため。

演劇やオペラの作品は、作品を多く再演したほうが、その制作費は割安となる。しかし、観客動員とのからみもあって、長期間の公演はむづかしい。もし、20回の公演しか出来ないとする、20回まとめて公演するよりは20回を1年かけて公演するほうが、一般の人に評価され得る期間が長くなり、出演者も、その間に色々と研究が出来、長期的な演技力の向上がはかれる。また幾度も作品

を見た人にとっても、時間をおいて見に行くことが出来る都合が
良い。

(3) 色々な定期会員用のプログラムを組むことができる。

西ドイツの公共劇場では定期会員や観客組織の会員の比重が大き
いことを本節1項で示したが、これらの人々は、色々な希望をも
っている。たとえば、モーツァルトのオペラだけを見た人もあ
れば、ドイツ語によるオペラだけを見たくてイタリア語のは見たく
ない人もある。演劇やオペラやコンサートを適当に混ぜたプロゲ
ラムを見た人もある。こうした各種の要求にうまく合わせるの
には、単一演目の連続公演よりはレポートリー制のほうが適して
いる。

(4) 短期間に都市に滞在する観光客、旅行者に対して毎日違ったもの
を見せることが出来る、都市のイメージの向上が図れる。

これは特にミュンヘン、ハンブルク、ベルリンのような一流とこ
ろの劇場にとって重要な意味をもつ。これらの都市では、観劇を
主目的に來る旅行者もかなりの量にのぼると見られ、劇場維持の
ための貴重な収入源となっている。従ってレポートリー制はこ
うした人々のためのサービスの意味も含まれている。

以上がレポートリー制の利点であるが欠点も見られる。

- (1) 毎日演目を入れ替えるための準備作業が大変で劇場維持に莫
大な経費がかかる。
- (2) 一つの作品が日を置いて上演されるため、出演者が劇場に拘束
される期間が長い。従って、短期間に集中させる公演方式に比
して、出演料などが割高になる。
- (3) あまり長い間公演を行うため、マネリ化の危険性があり、初
期の作品の緊張感を維持することがむずかしい。

このようにレポートリー制は短所もあり、その維持には非常な努力
と組織が必要とする。これが、西ドイツの公共劇場のクローズド
な運用体制をとらせている要因のひとつとなっているといえる。

2-1) 1日の劇場運用スケジュール

レポートリー制をとる西ドイツの公共劇場の1日のスケジュールはどのようになっているであろうか。まず、筆者が1ヶ月にわたって滞在調査したダルムシュタット州立劇場の場合をながめて見たい。劇場の中心は何といっても舞台である。従って、その運用スケジュールは舞台の利用形態を基本として決定される。また劇場の業務は創造(制作)と再生(上演)というまったく異なるプロセスが含まれている。この二つの性格の異なるプロセスを1日の作業スケジュールの中によく調整して組み込まねばならない。特にレポートリー制をとる劇場では、この二つのプロセスが幾つも同時に進行することになり、その調整は、かなり面倒である。基本的には、西ドイツの公共劇場では舞台は午前中の舞台稽古(創造プロセス)と夜の公演(再生プロセス)の2回使用され、その前後に舞台装置の組み立て、解体などの準備-後片づけの作業が行われる。ダルムシュタット州立劇場の場合、具体的には次に挙げるようなスケジュールで舞台上での仕事が行われる。他の劇場でも、これとほぼ同じスケジュールを取っていると考えて良いであろう。

- 8:00 舞台に裏方が集合し、前夜の公演の舞台装置を解体し、当日の稽古用の装置をセットする。
- 10:00 出演者、制作スタッフ等が舞台上に集合し舞台稽古が始まる。
- 14:00頃 稽古終了
- 15:00頃 裏方が再び舞台上に集合し、稽古用の舞台を片付け、夜の公演のための飾り付けを始める。
- 17:00頃 ほぼ舞台装置の飾り付けが完了し、照明器具のセッティング、および調光準備作業が始まる。
- 18:00 舞台の準備が全て完了する。舞台監督に舞台運用の統帥権が移り、各部門に公演のための指示が開始される。
- 18:30 出演者がメイクアップを始める。
- 19:00 開場
574

19:30 公演開始
 22:30頃 公演終了。後片付は翌日に残す。
 23:00頃 閉館

このように劇場は毎日約15~16時間という長時間にわたって稼働している。この間、各職種はそれぞれの作業プロセスに合わせて労働時間帯を割り振っている。制作部、文芸部、演出家、舞台装置家等の芸術上の企画や制作を行う人々の作業時間は一応昼間の作業を原則としているが極めて不規則であり捉えどころがない。ほとんど朝から夜まで何らかの仕事に係わり合っていると考えたほうがよさそうである。出演者もまた不規則な時間帯で仕事をする。稽古の種類や段階によって劇場に拘束される時間はまったく異なるし、また役の大小、あるいは公演スケジュールによっても左右される。場合によっては朝から深夜まで劇場に拘束される場合もあるし、また劇場には出勤する必要はないが、万一の場合のため自宅待機を命ぜられることもある。彼らが専ら滞在する空間は舞台の他は、稽古場と楽屋である。基本的には出演者は、午前中10:00から14:00過ぎまでの稽古、そして夜の公演という1日2回をこなす。夜に公演のない時は稽古が入りこともある。たとえば、ハノーファー州立劇場の1979年の3月24日の稽古スケジュールを見ると次のようである。^{*1}

^{*1)}
 ハノーファーの稽古
 予定表から引用

<演劇部門>

- ① 演劇劇場舞台: 11:00 ~ "GANZ UNTER UNS"の初日を翌日に控えたリハーサル。
- 20:00 ~ "Wie Immer am Donnerstag" 公演
- ② 第1稽古場(オハラハウス内): 11:00 ~ "Hurra Wir Sterben" (4月11日 初日予定の演劇の幕稽古) 15:00程度
- ③ 演劇劇場稽古場: 20:00 ~ "Hurra Wir Sterben"の音楽家のための音楽稽古 23:00

<オハラ・ハレ工部門>

- ④ オハラハウス舞台: 10:00~15:00 4月3日初日のオハラ「ハレヤスとメリガント」のロパ1による舞台稽古(舞台装置付)

19:30~ 『セビリアの理髪師』の公演
22:15

- ① 第2稽古場(カラ: 10:00 ~
ハウス内) 舞台装置のマークによる『ツッ・アマン・
トウツェ』の稽古
- ② コーラスリハーサル: 9:30~ トランポットの練習
室 11:45~ 『サロメ』のためのソリストの練習
12:00~ 『アレアスとメリザンド』のためのコー
ラスの録音
- ③ バレエリハーサル: 10:00~ トレーニング
室 11:15~ 『アンデル』の稽古(全員)
12:15~ ソリストの稽古(2人)
- ④ ソリスト練習室: 9:30~ 各ソリストの音楽稽古
Ⅱ~Ⅵまで ~昼過ぎまで
6室

もちろん、上記の例は、一部の例であり、毎日このような使い方がさ
れているとは限らない。演目の稽古の進み具合によって当然異な
ってくる。しかし、その稽古の時間帯の雰囲気は判ると思う。これはハ
ーバ州立劇場のものであるが、西ドイツの場合、劇場間での協定
があるので、他の劇場での稽古のスタイルもこれとほぼ同じと考
えて良い。

さて、今度は、技術系部門の一日のスケジュールである。もう一度
ダルムシュタット州立劇場の例にもとって考察をする。図4-37に
ダルムシュタット州立劇場の技術部門の1979年12月21日~22日にか
けての作業員1人1人の労働状況を示した。これを選擇した理由は、
私の当劇場滞在期間の直前で資料が揃い易く、かつ23日にバル
ディのオペラ『トラバトーレ』の初日が控え、さらに翌週29日に
は喜劇『私の友人ハルベイ』の初日が予定されるという最も
多忙な時期にあたり、劇場の作業の特徴が最も顕著に現われる時期
であったことによる。21日午前は、大劇場舞台において『トラバト
ーレ』の通し稽古(H.P)、小劇場では『ハルベイ』の舞台稽古、夜は
それぞれ、『アンセルとグリーテル』及び『真の英雄』の公演が行
われていく。22日午前は大劇場にて『トラバトーレ』の最終総稽古

(「GENERAL FLOOR」, G.P), 小劇場では『ハルベイ』の稽古が, そして夜はそれぞれ『マリツァ 女王』, 『ガリシオの一夜』が上演されて

れている。この稽古・公演スケジュールを円滑に遂行する為に、技術部門の労働形態は基本的に1日2交替制をとっている。衣裳部門は衣裳の製作と楽屋の管理を行う部門であるが、その職員は製作のみに従事してお針子さんのグループと着付け・楽屋及び衣裳の管理を行うグループのふたつに分かれているのが判る。後者のグループのみが担当の演目に従って夜の公演に付き、前者は一般の勤労者と同じ、昼間の作業のみを行う。公演に付き係員の数は演し物によっても異なるが、中型のオペラの再演で、ダルクシュタット州立劇場では男女各3人程度、演劇で各1~2人程度である。小道具係も昼は製作、夜は公演管理と多岐な働きをする。各上演に対して少くとも1~2人は必ず付き添う。メイクアップ係は髪

部門	1979 12-21(金)				12-22(土)			
	7時	12	6	12	7時	12	6	12
衣裳係 指導部 (3人)								
女性衣裳 (16人)	■	■	■	■	■	■	■	■
男性衣裳 (16人)	■	■	■	■	■	■	■	■
小道具係 (7人)	■	■	■	■	■	■	■	■
音響 オペラ (4人)	■	■	■	■	■	■	■	■
演劇	■	■	■	■	■	■	■	■
メイクアップ 部長 (12人)	■	■	■	■	■	■	■	■
演劇劇場舞台主任 (3人)	■	■	■	■	■	■	■	■
オペラハウス舞台主任 (3人)	■	■	■	■	■	■	■	■
演劇劇場大道具方 (20人)	■	■	■	■	■	■	■	■
オペラハウス大道具方 (32人)	■	■	■	■	■	■	■	■
舞台機橋点検係	■	■	■	■	■	■	■	■
大劇場 稽古	■	■	■	■	■	■	■	■
小劇場 稽古	■	■	■	■	■	■	■	■
稽古場 弁	■	■	■	■	■	■	■	■

図4-37 ダルクシュタット州立劇場の技術部門の一日。

髪は髪製作係も兼ねている。従ってその作業はやはり昼の製作、夜のメイクアップと昼夜にわたる性質のものとなる。次に舞台部門である。ダルクシュタットでは舞台

部門は各劇場、各々3人の舞台主任と大劇場32人、小劇場20人の大道具係からなっている。舞台主任は本節2-1の組織構成の説明で舞台部長から舞台そご主任までの業務にあたる。舞台部門には早番と遅番があり、原則として週休2日制で一週間に2日ほどの遅番がある。早番は午前の舞台稽古、遅番は夜の公演を担当する。舞台主任は3人交替で大道具係の統率にあたる。照明係については残念ながら勤務状態を判断できるデータを入手できなかったため、ここでは詳しくは記述できぬが、当劇場には3人の主任と17名の作業員がいる。主任は照明プランナー及びオペレーターの役割を行う。公演時には調光卓にて照明のきかけを与える。作業員は通常5~6人程度が公演時にフォロースポット等の操作員として作業に従事する。音響係は両劇場に各々2名ずつ配属され、午後の休憩とはさんで舞台稽古及び公演の作業をカバーしている。画工、木工、金工、立体成形等の大道具製作部門については、本図には示していないが、夜の公演とは無関係に毎日8時間づつ定常的な仕事をしている。週休時間土日休みの週休2日制が原則である。当劇場では画工、木工、金工等合わせて32名の作業員がいる。以上が、技術部門の1日の作業スケジュールである。

これらのことから言えることはレポートリー用をしく西ドイツの1日の作業量が1かにか多く、その為に、職員は1かなる職種においてかなりまびしい労働条件となっていることである。この為、現在、特に技術部門においては、舞台機構をコンピュータによる制御とする等、省力化が図られている。

2) 作品の出来るまでのスケジュール

ここでは西ドイツ公共劇場における作品の企画立案から上演に至るまでのプロセスを見る。これは、演目の種類や公演の内容、劇場の規模などによって変化し、一概には言えないものであるが、ここでは、最も複雑で、かつ最も充実した制作プロセスをとる、ミュンヘンのオペラハウスの例を参照にしながら論を進める。

筆者は1980年5月から6月にかけて約5週間ミュンヘンオペラハウス技術監督室に籍を置き、オペラハウスの運用を調査した。その間技術アシスタントのヨゼフスキー氏と何度かの対談を行い、そこにおける舞台美術製作の標準スケジュールはどのようになっているかを知った。その結果にもとづいて作成したのが図4-38である。まずこれを順を追って説明する。

ミュンヘンオペラハウスのような世界的に一流のオペラハウスでは、その出演者や演出家、指揮者、舞台美術家等のコアスタッフは超一流の人々を集めなければならない。従って、そこで上演される作品の大まかな計画及び配役は、少なくとも初日の2~3年前までには決定される。この決定を行うのが、演目スケジュール決定会議である。この会議には芸術総監督、音楽総監督、制作部長、支配人、技術監督が出席する。ここで、作品を担当する演出家が決定される。演出家は、芸術総監督と打合せを行いながら担当の舞台美術家を決定する。そして舞台美術家は、演出家と協同しながら舞台の基本的なイメージを創り出し、スケッチを提出する。この全体的なイメージがあまり程度固まった段階で、芸術総監督、演出家、舞台美術家、技術監督が出席して作品の具体的な制作に入る前打合せを行う。これが、初日のほぼ1年前である。その後、舞台美術家は、演出家や技術監督の立合いのもとに、舞台にて古材を使用して、セットを仮に組立ててみて、イメージの固定化をはかるとともに、生ずるであろう技術的問題を抽出し、それが解決できるものであるかどうか検証する。これに目鼻がつくと、美術家は設計基本図面の作成に入る。この間、舞台美術家、技術監督、美術アトリエ主任、照明主任は、何度も技術

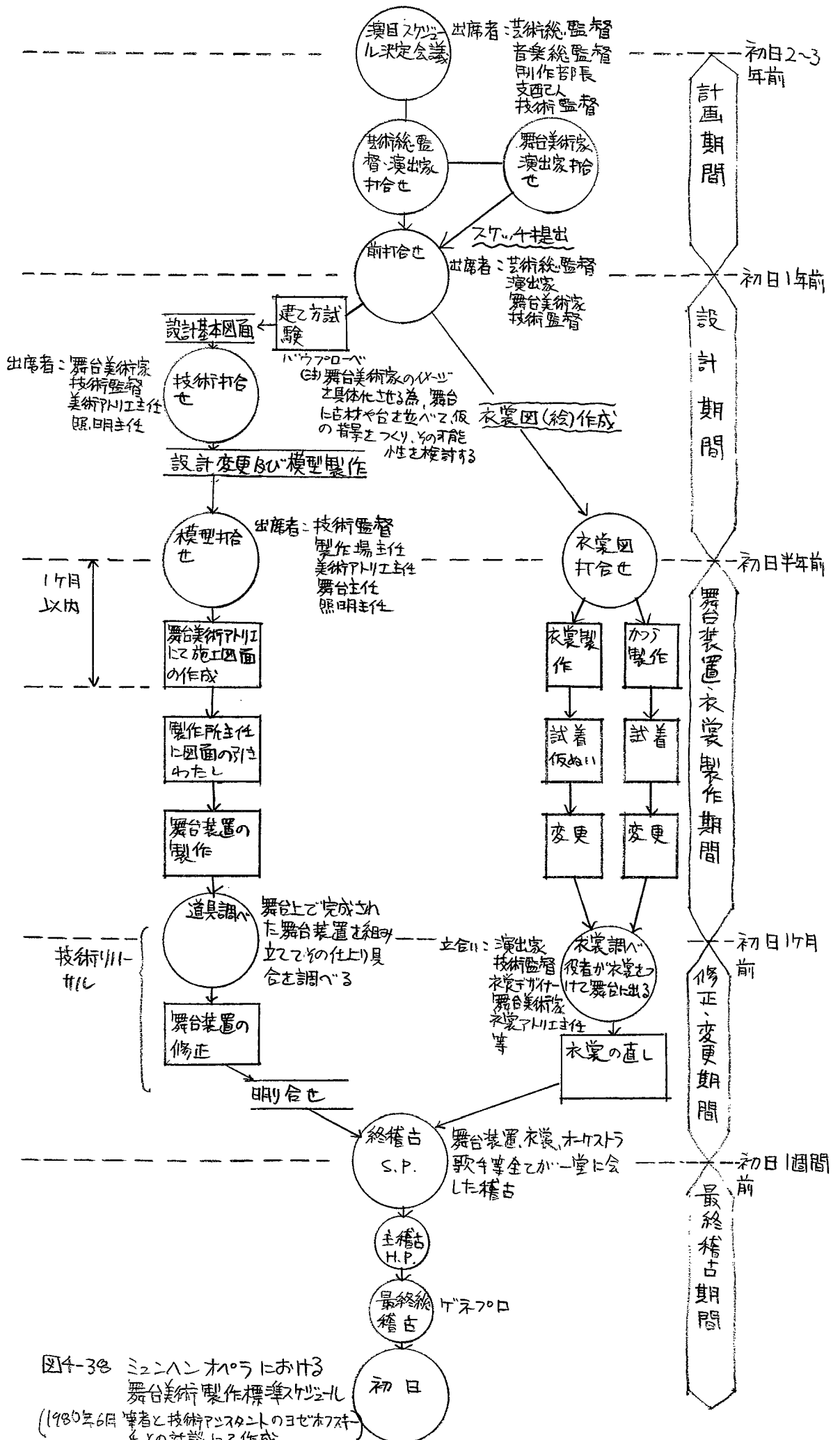


図4-38 ミュンヘンオラウにおける
舞台美術製作標準スケジュール
(1980年6月 筆者と技術アシスタントのヨセホフ氏
氏との対談にて作成)

上の問題を検討し、設計変更すべきところは修正する。また、この間に舞台模型も製作する。また、衣裳についても、衣裳図(絵)を作成する。設計基本図面、舞台模型、衣裳図が出来上がるのが初日の約半年前である。これら全てが揃った段階で、模型打合せ、衣裳図打合せが行われる。模型打合せでは技術監督、製作場主任、美術アトリエ主任、舞台主任、照明主任が参加し、舞台美術家の作成した図面と模型をともに、道具の製作に入る打合せを行う。まず、1ヶ月以内に施工図面が、美術アトリエにて完成し、製作場工場長に引き渡される。そして、この図面に基ついで道具類が製作される。衣裳についても同様、この期間に製作、仮縫いが行われる。衣裳及び道具類がひととおり完成した姿を見せはじめるのが、初日の1ヶ月前を過ぎたあたりである。ここで、舞台上に実際に道具を組み立て、その仕上り具合を調べる道具調べ、役者が衣裳を着て舞台に出る衣裳調べが行われ、悪いところを指摘し修正を行う。また、同時に、照明をどうあてるかを計画する明り合せが進行する。これら全ての技術的準備が完了するのが、初日の1週間前を過ぎたあたりである。そして、この完成された装置、衣裳を使用して舞台における終稽古、主稽古、そして最終総稽古と進み、初日を迎える。以上がミュンヘンオペラにおける舞台美術制作標準スケジュールである。もっとも、これは事が極めて順調に進行した状態であり、いわば理想スケジュールと言ふべきものである。実際には、これより遅れて進行することが多いようである。

さて、以上は、技術面でのスケジュールであるが、稽古のスケジュールはこれにどのように対応しているのだろうか。残念ながら、筆者の所属していた部門が技術部門であったため、稽古スケジュールのプロセスについて詳しい検討は出来なかった。そこで、ここでは別の角度から検討を加える。W. Unruh 著による "Theatertechnik"^{*1} にドイツのオペラハウスにおける公演のプロセスの図が掲載されている。そして、この日本語訳が、日本建築学会編『建築設計資料集成』第7巻 P177に掲載されている。これに、先ほど見た、ミュンヘンオペラ

*1
"Theatertechnik"
W. Unruh,
P169 (1969)

における舞台美術製作スケジュールを重ね、期間を記入したものが図4-39である。

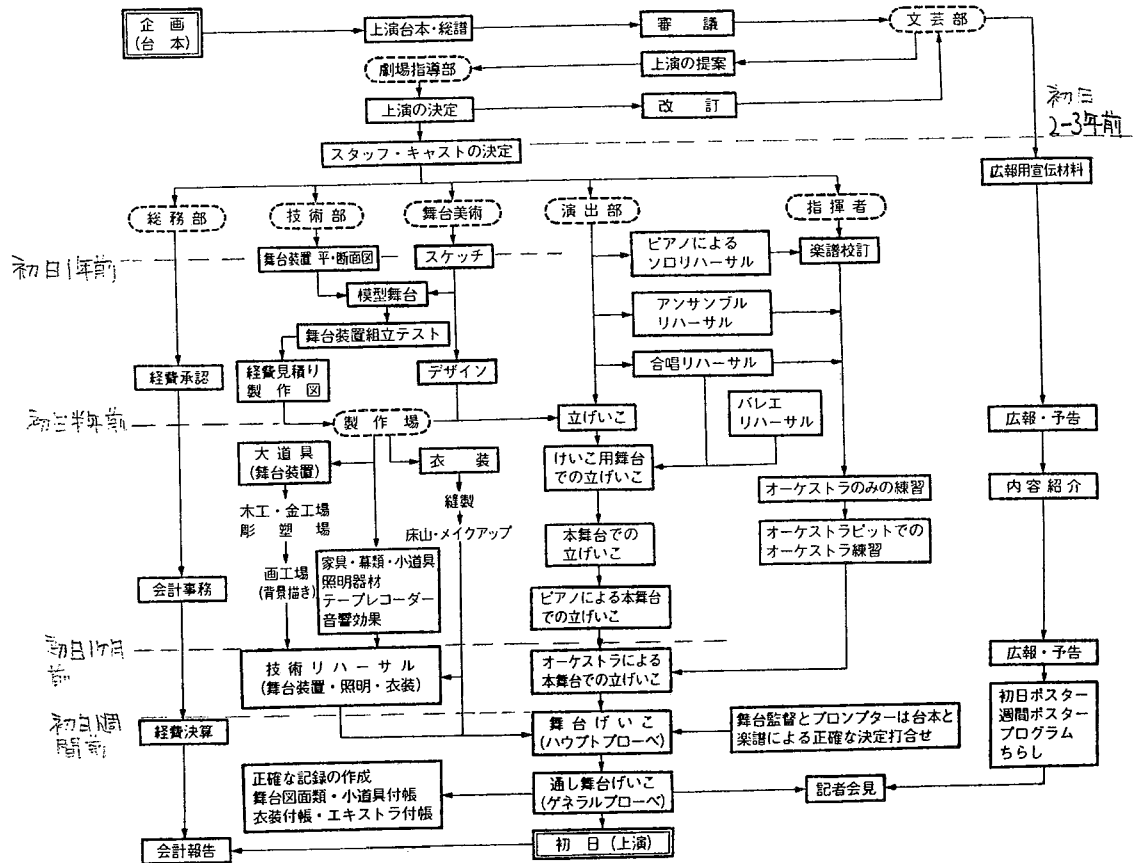


図4-39 ドイツのオハラハウスの公演のプロセス
(日本建築学会編『建築設計資料集成』P177に加筆)

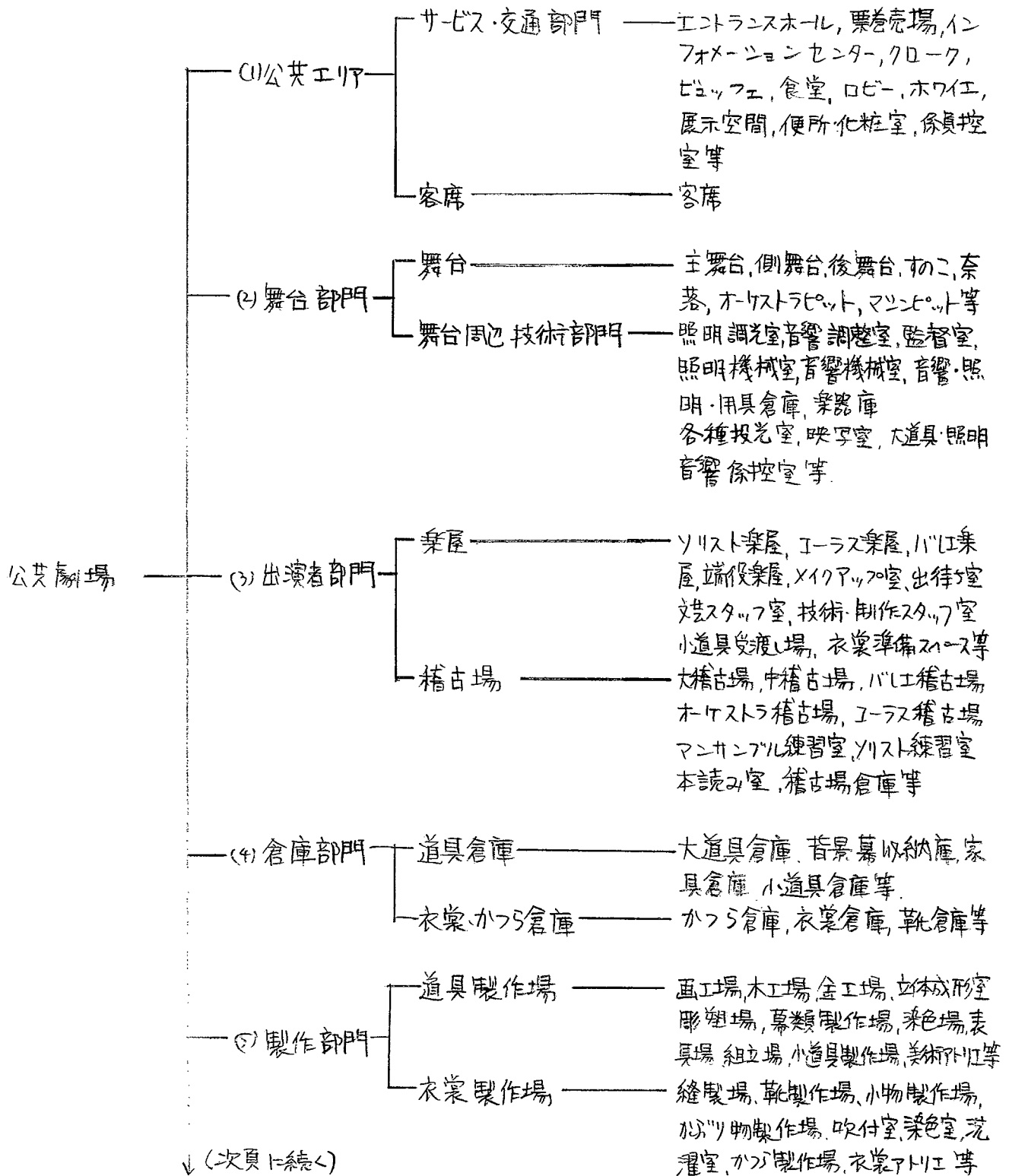
これによると、舞台美術の設計期間は、ソリストや合唱やバレエの基礎的な稽古の期間に対処している。舞台美術の製作期間には大型稽古場での動きをつけた立稽古が行われている。そして、初日1ヶ月前程度になると、少しずつ出来上がった舞台装置の一部を利用したソリした舞台を使用した稽古が増える。そして、初日1週間前からは、舞台を利用した総合的な終稽古に到っている。

以上が西ドイツのオハラハウスにおける作品の出来るまでのスケジュールである。極めて時間をかけた体系的な制作スケジュールが組まれていることが判る。

4) 西ドイツ公共劇場の施設構成

4) - a) 施設構成の概要

西ドイツの公共劇場はクローズドシステムによる制作形態をとっていること、そしてその為に必要な施設は全て自己で所有していることは既に述べた。本項ではそれが、具体的にいかなる室により構成されているかを考察する。その概要を図示すると下図のようになる。(機能部分のみ)



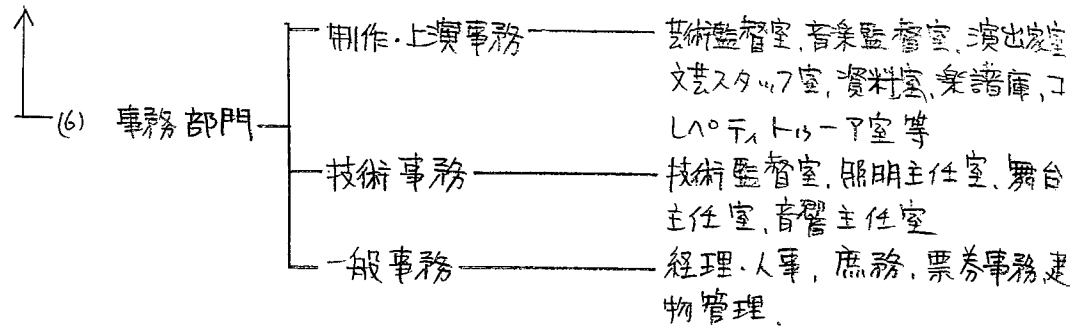


図4-40 西ドイツ公共劇場の機能部分の構成概要

この図に見るように、西ドイツの公共劇場の機能部分は、非常に多岐の分野にわたる複雑な構成をとっている。これをひとつの施設としてまとめ上げることは極めて難しい。特に、舞台・客席の固さには、観客の動線、出演者の動線、道具・技術系の動線という性格の異なる重ね合わせることの困難なるものの動線が集中するために施設計画上のさまざまな問題が生ずる。この問題をいかに解くかが、劇場計画の大きなポイントになっていると言える。西ドイツの公共劇場では観客のくつろげる公共エリアや舞台上に接近しやすい楽屋配置を考へることもさることながら、特に大道具類の移動動線上で多大な注意が払われている。これは、先に見たように、レポトリ一制となり、毎日演目が交替する西ドイツの公共劇場では、時間的、経費的に、大道具類のセッティング、解体が大きなネックになっている為、これをいかに合理化するかが、非常に重要な問題となっているからである。基本的には、西ドイツの劇場コンサルタント、アドルフ・ツッツマン^{*1}氏が指摘しているように、舞台と倉庫部門、製作部門とができる限り同一平面上に合理的に配置することが心掛けられている。また、大道具類の組立て、解体の手間を省くために、できるだけ大きな単位のまま舞台-倉庫間を移動できるように、通路やリフトの計画が考慮されている。舞台を極めて広くとっているのも、昼間にセットを組み立てたら、夜の公演には、少数の裏方だけで、全て進行できるようにしておく為である。その他、稽古部門や制作事務部門も充実している。

*1) 建築文化 1982.1月号 『第2次世界大戦後のドイツ劇場建築と劇場コンサルティング』 アドルフ・ツッツマン, P47

…これがいわゆる水平型配置という方式です。これは機能的に物を広さ確保した側舞台や後舞台をもつ舞台空間を核として、その周辺天井の高さを十分に取った大道具倉庫や組立場、画工場、木工場、金工場などの大製作場を可能な限り同一の床平面上に配置する方式です。

さて、上記のように極めて充実、分化した施設構成をもちているのが西ドイツの公共劇場であるが、この充実した計画理念は、第二次世界大戦後に著しい発展をとりあげている。それはハイバー州立劇場、ミュンヘンオペラ等、戦前からある劇場の戦災修復に始まり、ケルン市立劇場やゲルゼンキルヘン音楽劇場等の新築へと展開した。この戦後の展開の完成期に建築された劇場にダルムシュタット州立劇場とカールスルーエ州立劇場がある。これらはミュンヘン、ベルリン、ハンブルクなどの大都市に建つ公共劇場に比してその規模は小さいが、反面、戦後西ドイツの公共劇場が目指してきた計画理念が非常にコンパクトな形で達成されている。その中心はAutark(自足の)という理念である。それは、舞台芸術の制作・上演に関わる全ての部門、あるいは施設を同一の敷地内に集約的に構成しようという考え方である。西ドイツの公共劇場のように演目の毎日入れ替るシフトリーツシステムが確立されていると、関連施設が市内のあちこちに分散していると、その有機的なまとまりが達成しにくく、無駄な経費がかかるとなる。従って、全ての施設をできるだけ一ヶ所にまとめるように努力されてきた。ダルムシュタット州立劇場、及びカールスルーエ州立劇場では、これが、うまく達成されている。そこで次に、この二つの劇場をケーススタディとしてとり上げ、現代の西ドイツの公共劇場の施設計画の実際をながめてみた。

3) -b) ダルムシュタット 州立劇場

所在地: ハッセン州, ダルムシュタット市
建築家: ロルフ・フロニグ
劇場コンサルタント: アドルフ・ツォッツマン
竣工: 1972年
コスト: 約56,000,000 DM
ボリューム: 217,000 m³

<大劇場>

客席数: 13階715席, バルコニー席235席, 計950席
客席の間隔: 95cm, 客席の幅: 55cm
オーデトリアムの最大幅: 23m
オーデトリアムの最大奥行: 25m
最大視距離: 27m
主舞台寸法: 24m × 24.9m
下手側舞台寸法: 22.87m × 16m
上手側舞台寸法: 16.6m × 15.7m
後舞台寸法: 17m × 16m
ホール開口最大寸法: 19m × 8.5m (高)
ホール開口最小寸法: 10m × 5m
ホールの高さ: 25.7m
オーケストラピットの広さ: 130.4m²

<小劇場>

客席数: 1階席360席, バルコニー席110席, 計470席
客席の間隔: 95cm, 客席の幅: 55cm,
オーデトリアムの最大幅: 約23m
オーデトリアムの最大奥行: 約20m
最大視距離: 約21m
主舞台寸法: 20m × 15.3m
下手側舞台寸法: 14m × 13.5m
後舞台寸法: 14m × 11m
ホール開口最大寸法: 15.5m (幅) × 7m (高)
ホール開口最小寸法: 8m × 4.5m
ホールの高さ: 21.97m
オーケストラピットの広さ: 52.7m²

ダルムシュタット州立劇場は人口13万8千人のダルムシュタット市に建設された、中の上程度の規模を持つ公共劇場である。主としてバレエ、オペラに供される大劇場と、演劇に供される小劇場から成る。さらに稽古場を改造した実験劇場を持つ。これは、小さな新しい試みの上演に供されてくる。大、小実験劇場合わせて、1978/9年のシーズン

には年間577回の公演を持ち、27本の新演出を制作している。1年間に約32万人の観客を動員している。このような活動に対して職員の数構成は、企画制作文芸指導部35人、歌手23人、俳優30人、バレエ12人、コーラス42人、オーケストラ78人、技術者186人、管理事務35人、建物管理56人（但し、管理事務・建物管理の職員のうち46人はパートタイム）、計497人となっている。

当劇場の特徴は、大・小劇場のフロアセニアム周辺の可変機構（可動ポータル、可動側壁）、ゆったりとした舞台手法、合理的な道具製作所、組立場、道具倉庫等である。特に水平型配置（前出）の基本に忠実な舞台周辺の施設計画については、極めて評価が高い。当劇場の劇場コンサルタントを行ったアドルフ・ツォツマン教授はこの計画について「ダルムシュタット州立劇場は開場からすでに10年経ちました。私はこの計画に際して、舞台・倉庫・製作場を十分な天井高さを確保しつつ、すべて同一レベルに一体化できるように配置構想を練りました。そして現在、それが大変に経済的であったことが高く評価されています。」と、その設計基本方針が舞台周辺空間配置の合理化に置かれていたことを語っている。

大) 第2次世界大戦後のドイツ劇場建築と劇場コンサルタント
「アドルフ・ツォツマン」
建築文化 1982, 1月
P50

図4-41に、ダルムシュタット州立劇場の空間構成を示した。大劇場・小劇場の舞台は、いずれも3階にあるが、それと階を同じくして主要な大型製作場（画工場、木工場、金工場）、組立場、及び大道具倉庫が配置されている。また、これらと結ぶ通路も非常に高い天井高（3階層吹抜け）を持ち、一度組み立てられた大道具は解体することなく、舞台、倉庫間を移動することが出来るようになっている。このことにより、毎日のレポートリー演目の交替における作業性を非常に高くすることに成功している。大道具倉庫の一部は、地下2階にも設置されているが、この天井高も3階層吹抜けとされ、また舞台面とは、巨大な大道具をまるごと運搬できる大型リフトが結合されている。

楽屋は、舞台と同一レベル及び、その一階層下のレベルに丁度客席の下にもぐり込む形で設置されている。これにより、大道具関係の

空間構成図

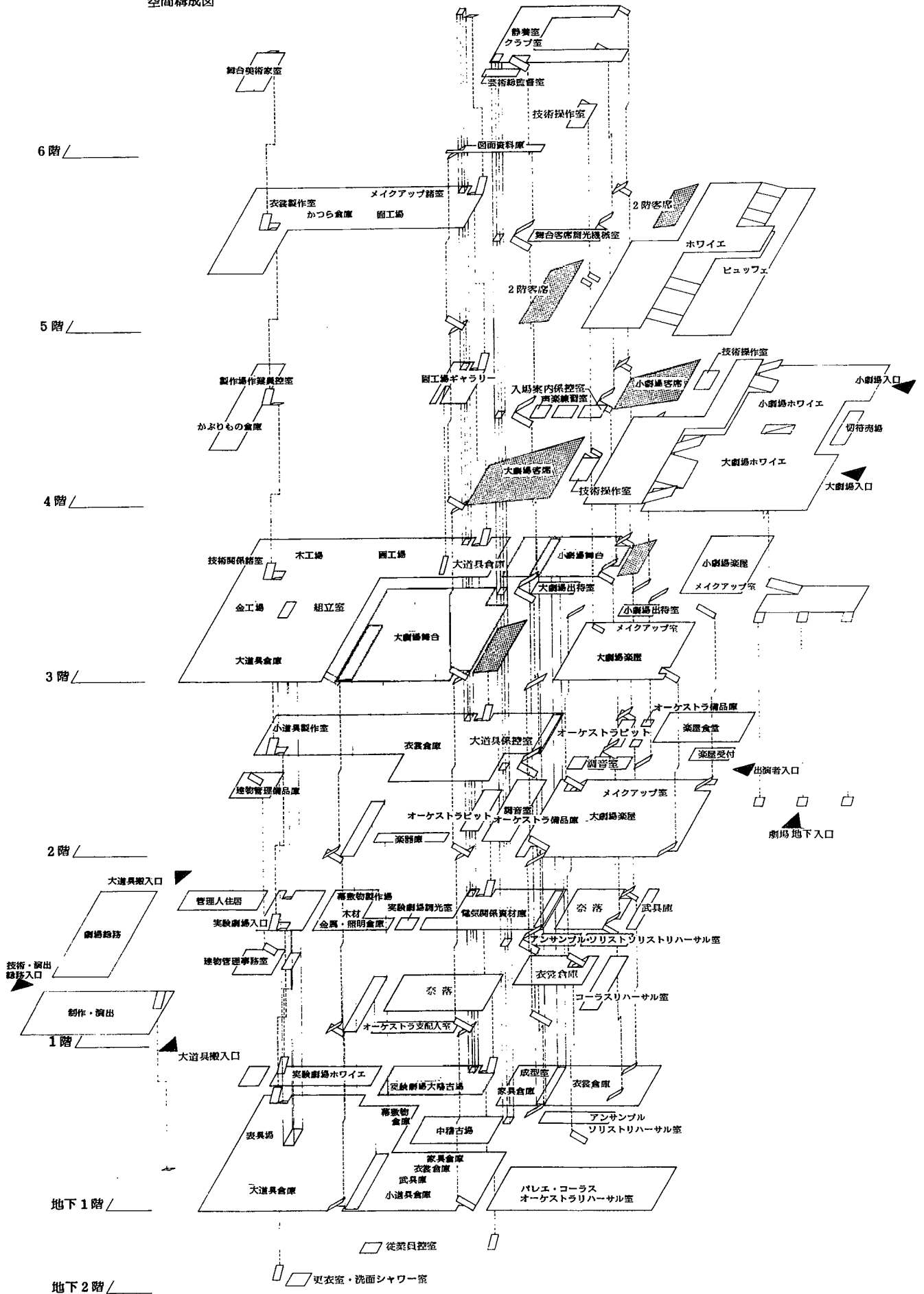


図4-41 鈴鹿市立劇場の施設構成概要

移動動線と、楽屋動線の明確な分離が達成されているが、反面、楽屋が全て無窓の居室となってしまったため、生活環境としての楽屋の性能に難点が残っている。

稽古場部門は地下1階、1階部分にまとめられている。ここにも楽屋と同一の問題が残されている。

企画制作文芸部門及び管理事務部門は1階の低層棟に集中して設けられている。

当劇場の敷地は傾斜している為、観客は4階からアフロ-4とする。

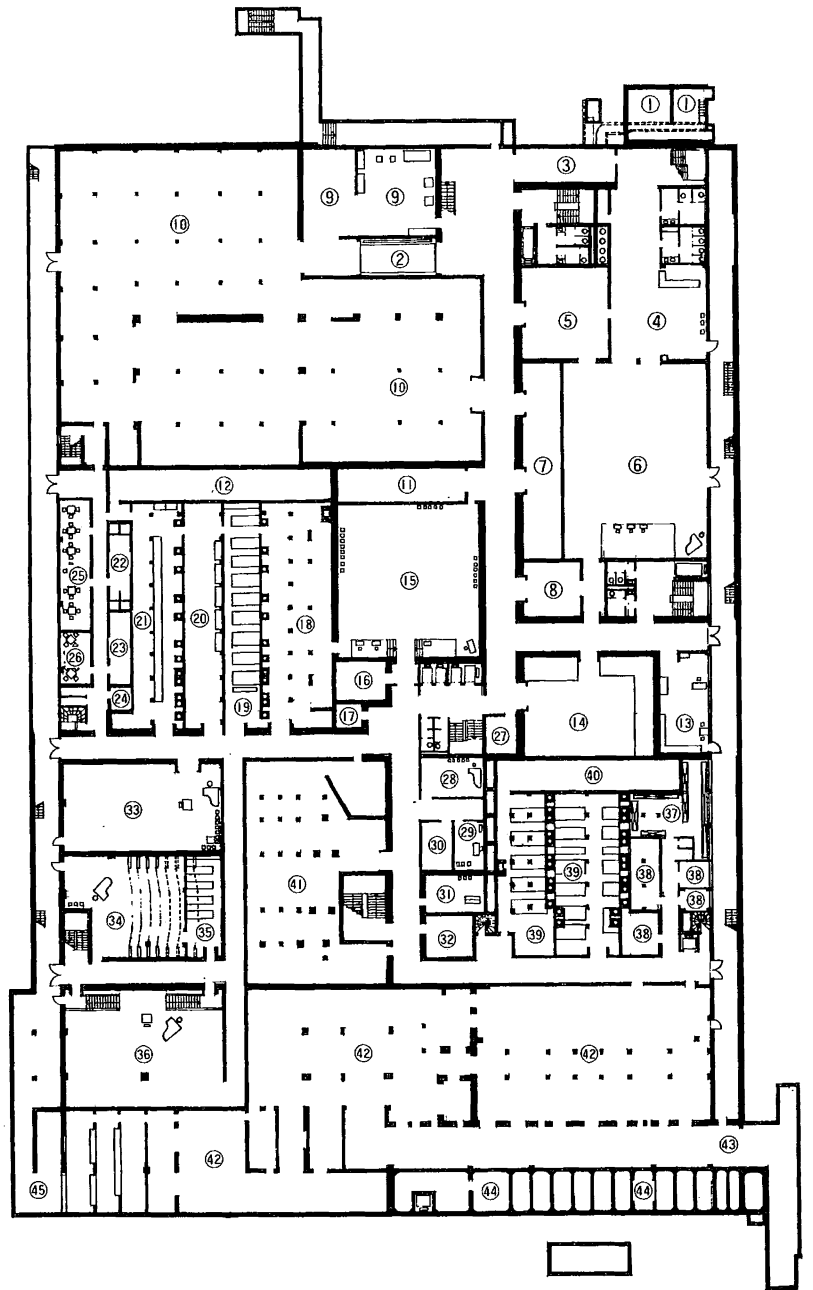
クロ-クは、省力化のためコンロッカー方式となっている。

上層階には、主として衣裳製作室、舞台美術アトリエなどが配置されている。

図4-42a~gに 地下1階から6階までの各階平面を示した。

1	管理人住居倉庫	43 m ²
2	大道具リフト	28
3	台類倉庫	43
4	実験劇場ホワイエ	231
5	実験劇場大稽古場倉庫	92
6	実験劇場大稽古場	330
7	舞台用家具倉庫	86
8	大稽古場出待室	37
9	表具場	135
10	大道具倉庫	1,250
11	敷物倉庫	51
12	背景幕格納庫	73
13	成型室(プラスチック・ゴム材)	58
14	舞台用家具倉庫	146
15	中稽古場	256
16	中稽古場出待室	23
17	清掃具庫	8
18	舞台用家具倉庫	183
19	衣裳倉庫	95
20	武具庫	99
21	小道具倉庫	127
22	シャワー室	22
23	倉庫	18

24	清掃具庫	6 m ²
25	清掃員控室	54
26	バレエ休養室	21
27	清掃具庫	14
28	アンサンブルリハーサル室	28
29	ソリストリハーサル室	17
30	倉庫	17
31	ソリストリハーサル室	27
32	倉庫	24
33	バレエリハーサル室	161
34	コーラスリハーサル室	131
35	楽譜庫	41
36	オーケストラリハーサル室	219
37	非常用電源室	56
38	倉庫	61
39	衣裳倉庫	117 + 94
40	背景幕格納庫	66
41	空調ダクト室	323
42	空調機械室	
43	排気口	
44	冷却水槽	
45	吸気口	
46		



地下1階平面 basement S=1:800

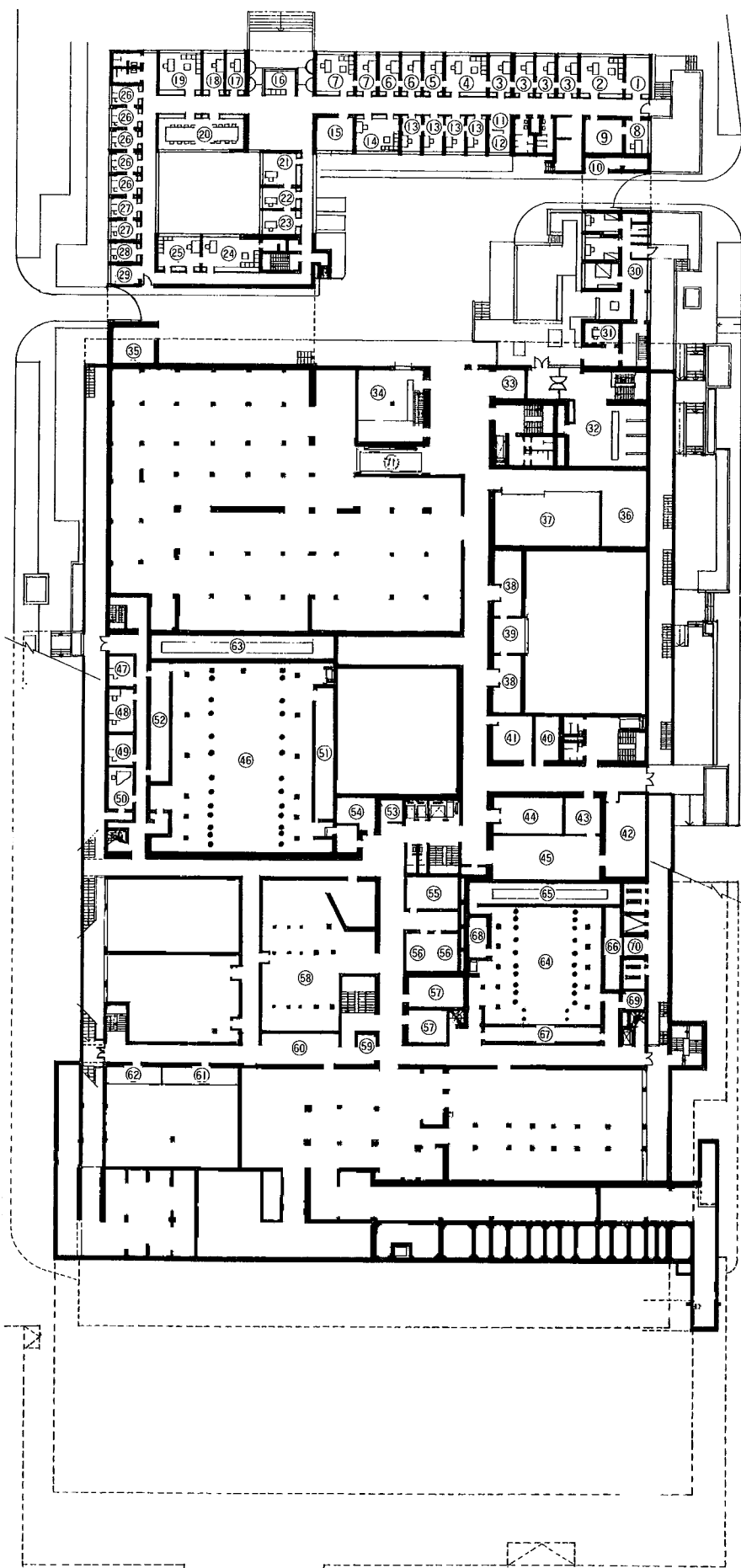
図4-42a ダルグシタット州立劇場

1	消防士控室	16m ²
2	給与事務室	31
3	人事事務室	15+15+14+14
4	総支配入室	31
5	秘書室	15
6	総務事務室	15+15
7	劇場友の会事務室	15+31
8	タイプ室	15
9	記録室	28
10	可燃性危険物倉庫	7
11	湯沸室	6
12	タイプ室	8
13	経理事務室	15+15+15+15
14	主計室	31
15	資料室	30
16	受付	10
17	オペラ部門演出部長室	15
18	音楽総監督秘書室	15
19	音楽総監督室	30
20	会議室	60
21	制作室	20
22	タイプ室	15
23	制作室	15
24	芸術総監督室	41
25	芸術総監督秘書室	21
26	文芸部員室	13+13+13+13+13
27	タイプ室	13+13
28	演劇部門演出部長室	13
29	湯沸室	10
30	管理人住居	116
31	管理人事務所	16
32	実験劇場入口ホールおよびクローク	123
33	彫塑用資材倉庫	19
34	建物管理事務室	82
35	非常用電源	22
36	幕・敷物製作場兼表具場	62

37	木材及び金属資材倉庫	99m ²
38	照明器具庫	32+32
39	実験劇場用調光室	23
40	電気資材庫	14
41	電球倉庫	37
42	電気工作室	58
43	レンズ倉庫	24
44	照明器具庫	51
45	低電圧分電室	70
46	奈落	501
47	オーケストラ支配入室	16
48	オーケストラ係控室	20
49	コーラス指揮者室	15
50	公演指揮者控室	20
51	大劇場舞台機構機械室	37
52	楽譜庫	33
53	清掃具庫	10
54	倉庫	19
55	ソリストリハーサル室	28
56	アンサンブルリハーサル室	35
57	ソリストリハーサル室 2室	30+24
58	衣裳倉庫	259
59	清掃具庫	3
60	コーラスリハーサル室	53
61	リハーサル室	20

62	倉庫	12
63	背景幕格納庫	82
64	奈落	239
65	背景幕格納庫	64
66	配線用ダクト室	22

67	武具庫	39
68	小劇場舞台機構機械室	16
69	清掃具庫	6
70	変電室	39
71	大道具リフト	28

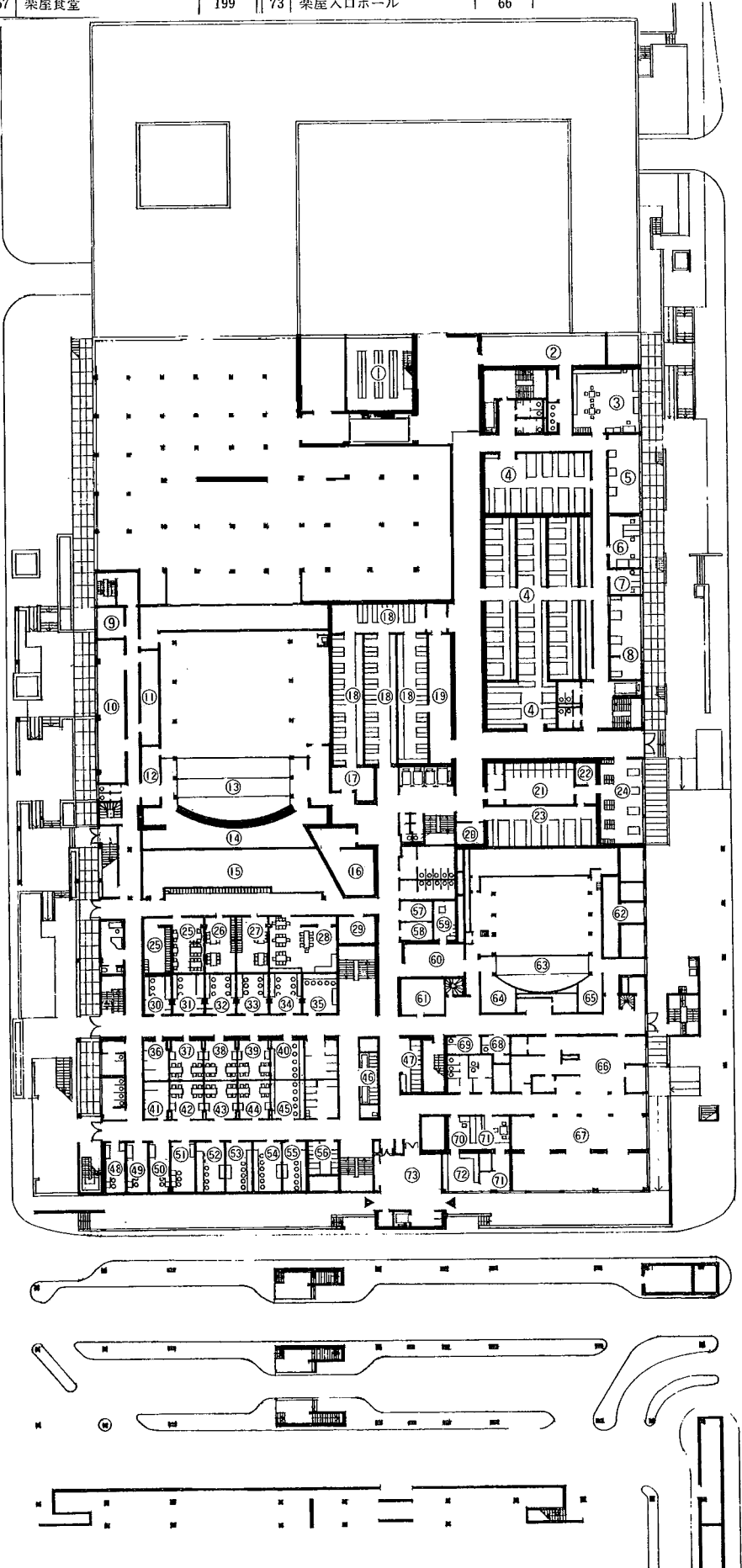


大劇場舞台機構機械室

図4-42b

1階平面 1st

1	建物管理備品庫	82m ²	62	変電室	63	68	楽屋食堂男子従業員更衣室	10
2	プラスチック加工場	67	63	小劇場オーケストラピット	53	69	楽屋食堂女子従業員更衣室	9
3	小道具製作室	73	64	小劇場オーケストラ備品庫	23	70	設備制御室	17
4	衣裳倉庫	327	65	"	20	71	電話交換室	32
5	予備室	41	66	楽屋食堂厨房	112	72	楽屋受付	22
6	大道具係主任室	28	67	楽屋食堂	199	73	楽屋入口ホール	66
7	照明主任室	13						
8	照明係控室	45						
9	バレエ振付師室	14						
10	大劇場下手側舞台機械室	68						
11	楽器庫	28						
12	前室	16						
13	大劇場オーケストラピット	130						
14	大劇場オーケストラ備品庫	90						
15	グクト室	128						
16	大劇場調音室	47						
17	"	19						
18	衣裳倉庫	244						
19	大劇場上手側舞台機械室	47						
20	清掃具室	8						
21	大道具係シャワー室	49						
22	機械室	8						
23	大道具係控室	70						
24	"	61						
25	大劇場オーケストラ控室	30人	55					
26	"	15人	29					
27	"	15人	29					
28	"	30人	60					
29	"	係室	17					
30	大劇場男性コールド/バレエ楽屋	3人	18					
31	"	3人	19					
32	大劇場男性コーラス楽屋	6人	20					
33	"	6人	20					
34	"	6人	20					
35	"	5人	18					
36	大劇場男性シャワー室	15						
37	大劇場男性黙役楽屋	8人	21					
38	大劇場男性黙役楽屋	8人	21m ²					
39	"	8人	19					
40	大劇場男性メイクアップ室	22						
41	大劇場女性シャワー室	15						
42	大劇場女性黙役楽屋	8人	21					
43	"	8人	21					
44	"	8人	19					
45	大劇場女性メイクアップ室	22						
46	大劇場公演用衣裳倉庫	16						
47	"	18						
48	大劇場女性ソリスト楽屋	3人	18					
49	"	3人	18					
50	"	3人	18					
51	"	3人	19					
52	大劇場女性コーラス楽屋	6人	22					
53	"	6人	22					
54	"	6人	22					
55	"	6人	20					
56	大劇場公演用衣裳倉庫	16						
57	大劇場舞台監督控室	10						
58	大劇場公演監督控室	10						
59	小劇場プロンプター控室	13						
60	小劇場調音室	29						
61	医務室	24						



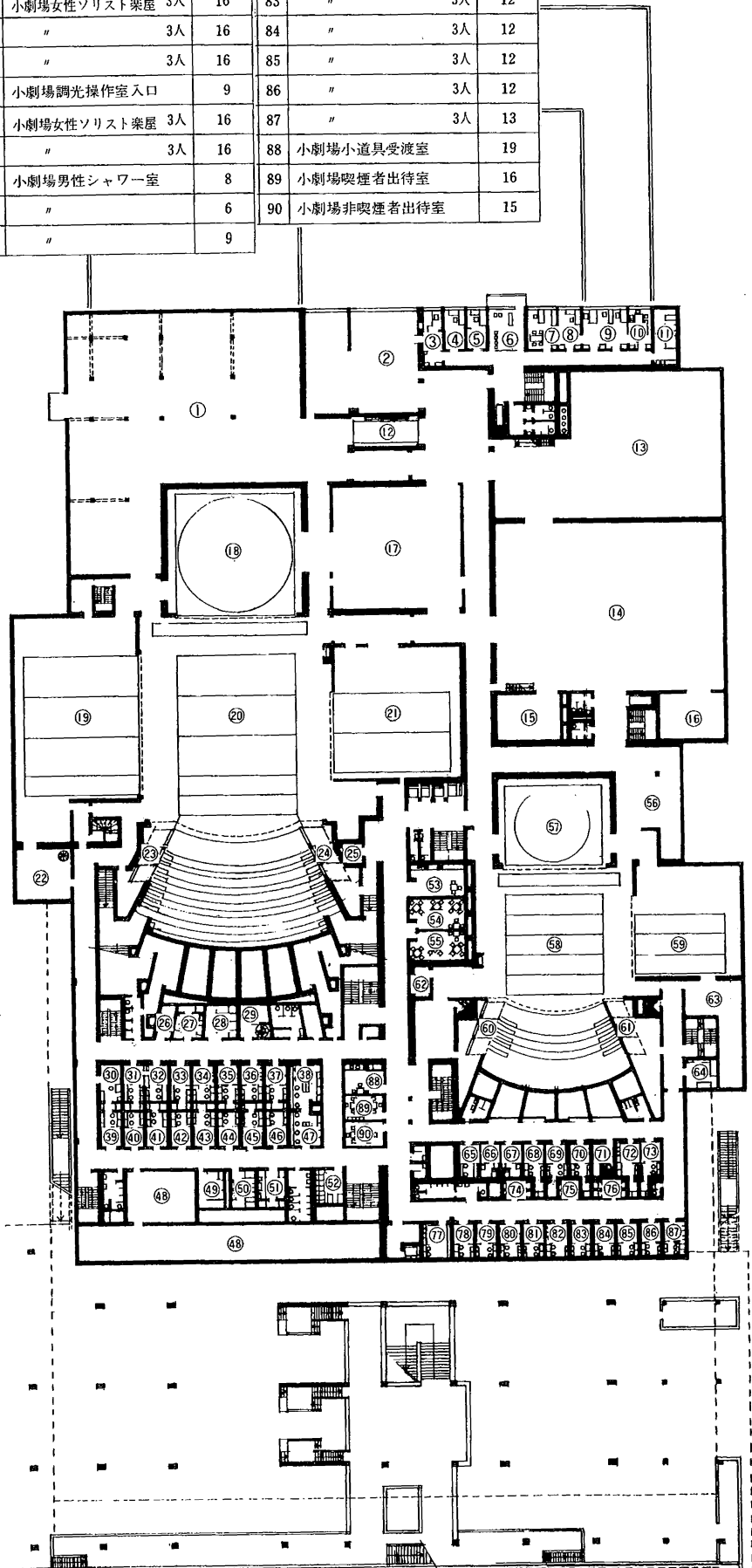
奈良国立劇場

図 4-42c

2階平面 2nd

1	大道具倉庫	792m ²	62	小劇場照明作業室	9	77	小劇場男性メイクアップ室	16
2	金工場	182	63	小劇場照明器具庫	61	78	小劇場男性ソリスト楽屋 3人	12
3	金工場事務室	18	64	食堂事務室	14	79	" 3人	12
4	照明部長室	13	65	小劇場女性メイクアップ室	11	80	" 3人	12
5	技術事務室	13	66	小劇場女性客演者用楽屋 1人	11	81	" 3人	12
6	打ち合わせ室	22	67	" 1人	11	82	" 3人	12
7	技術監督室	19	68	小劇場女性ソリスト楽屋 3人	16	83	" 3人	12
8	技術監督秘書室	14	69	" 3人	16	84	" 3人	12
9	技術事務室	28	70	" 3人	16	85	" 3人	12
10	技術会議室	14	71	小劇場調光操作室入口	9	86	" 3人	12
11	コピー室	20	72	小劇場女性ソリスト楽屋 3人	16	87	" 3人	13
12	大道具リフト	28	73	" 3人	16	88	小劇場小道具受渡室	19
13	木工場	446	74	小劇場男性シャワー室	8	89	小劇場喫煙者出待室	16
14	大画工場	605	75	"	6	90	小劇場非喫煙者出待室	15
15	絵具調合室	54	76	"	9			

16	絵具庫	50
17	組立室	246
18	大劇場後舞台	272
19	大劇場下手側舞台	410
20	大劇場主舞台	687
21	大劇場上手側舞台	264
22	大劇場照明器具庫	48
23	大劇場下手脇花道	36
24	大劇場上手脇花道	38
25	倉庫	4
26	清掃具庫	7
27	大劇場女性客演者用楽屋 1人	14
28	大劇場女性シャワー室	15
29	大劇場公演用衣裳倉庫	8
30	大劇場女性バレエソリスト楽屋 1人	13
31	大劇場女性コールドソレエ楽屋 4人	15
32	" 4人	13
33	大劇場女性バレエソリスト楽屋 4人	13
34	大劇場女性ソリスト楽屋 3人	13
35	" 3人	15
36	" 3人	13
37	" 3人	15
38	大劇場女性メイクアップ室	22
39	大劇場男性ソリスト楽屋 3人	15
40	" 3人	13
41	" 3人	15
42	" 3人	12
43	" 3人	15
44	" 3人	12
45	" 3人	16
46	大劇場男性ソリスト楽屋 3人	13m ²
47	大劇場男性メイクアップ室	18
48	空調機械室	217
49	大劇場男性シャワー室	16
50	大劇場公演用衣裳倉庫	16
51	大劇場男性客演者用楽屋 1人	15
52	大劇場公演用衣裳倉庫	16
53	大劇場小道具受渡室	26
54	大劇場非喫煙者用出待室	25
55	大劇場喫煙者用出待室	25
56	小劇場大道具倉庫	102
57	小劇場後舞台	155
58	小劇場主舞台	372
59	小劇場上手側舞台	190
60	小劇場下手脇花道	88
61	小劇場上手脇花道	53



日本文芸小劇場

図4-42d

3階平面 3rd

1	かぶりもの倉庫	66m ²
2	音響主任室及び弱電作業室	56
3	製作場女性作業員控室	18
4	製作場男性作業員控室	61
5	洗面シャワー室	39
6	木工場主任室	11
7	木工場備品庫	12
8	大画工場ギャラリー	44
9	縫製室	8
10	大画工場倉庫	24
11	画工場主任室	30
12	幕類倉庫	8
13	大劇場1階客席	715席 462
14	大劇場調光操作室	36
15	大劇場投映室	14
16	大劇場身障者席	20
17	大劇場ホワイエ	
18	声楽練習室	29
19	弱電機器室	17
20	音響効果資料庫	35
21	クローク係控室	21
22	パンフレット置場	12
23	入場案内係控室	23m ²
24	小劇場1階客席	360席 290
25	小劇場調光操作室	26
26	小劇場投映室	15
27	小劇場音響調整室	15
28	小劇場身障者席	13
29	小劇場ホワイエ	
30	小劇場休憩コーナー	21
31	大劇場クローク	52
32	控室	16
33	清掃具庫	10
34	大劇場コインロッカー	341
35	大劇場入口ホール	
36	大劇場当日券売場	16
37	切符事務室	33
38	前売券売場	7
39	前売券売場ホール	39
40	医務室	15
41	休養室	10
42	小劇場当日券売場	13
43	小劇場入口ホール	
44	小劇場コインロッカー	52

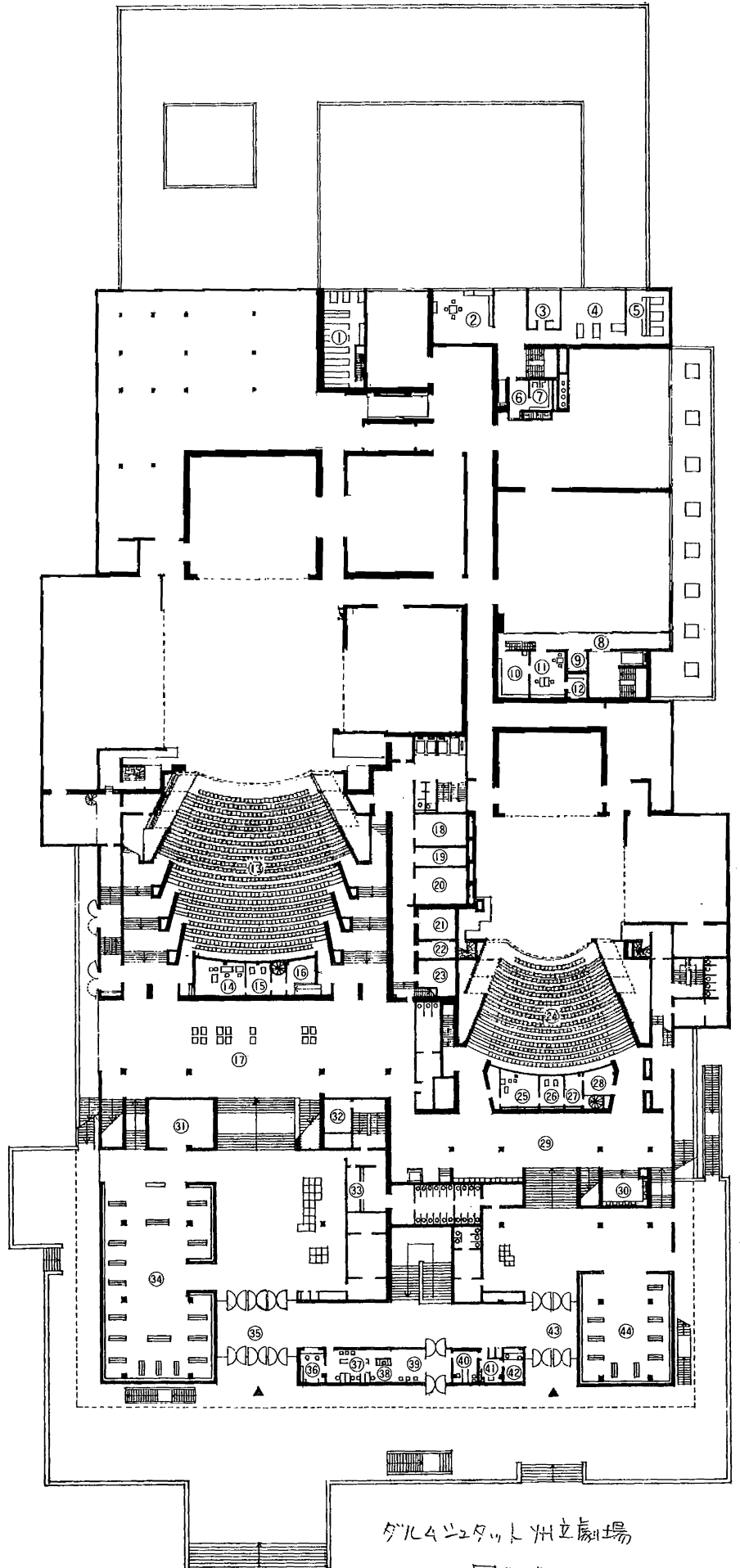
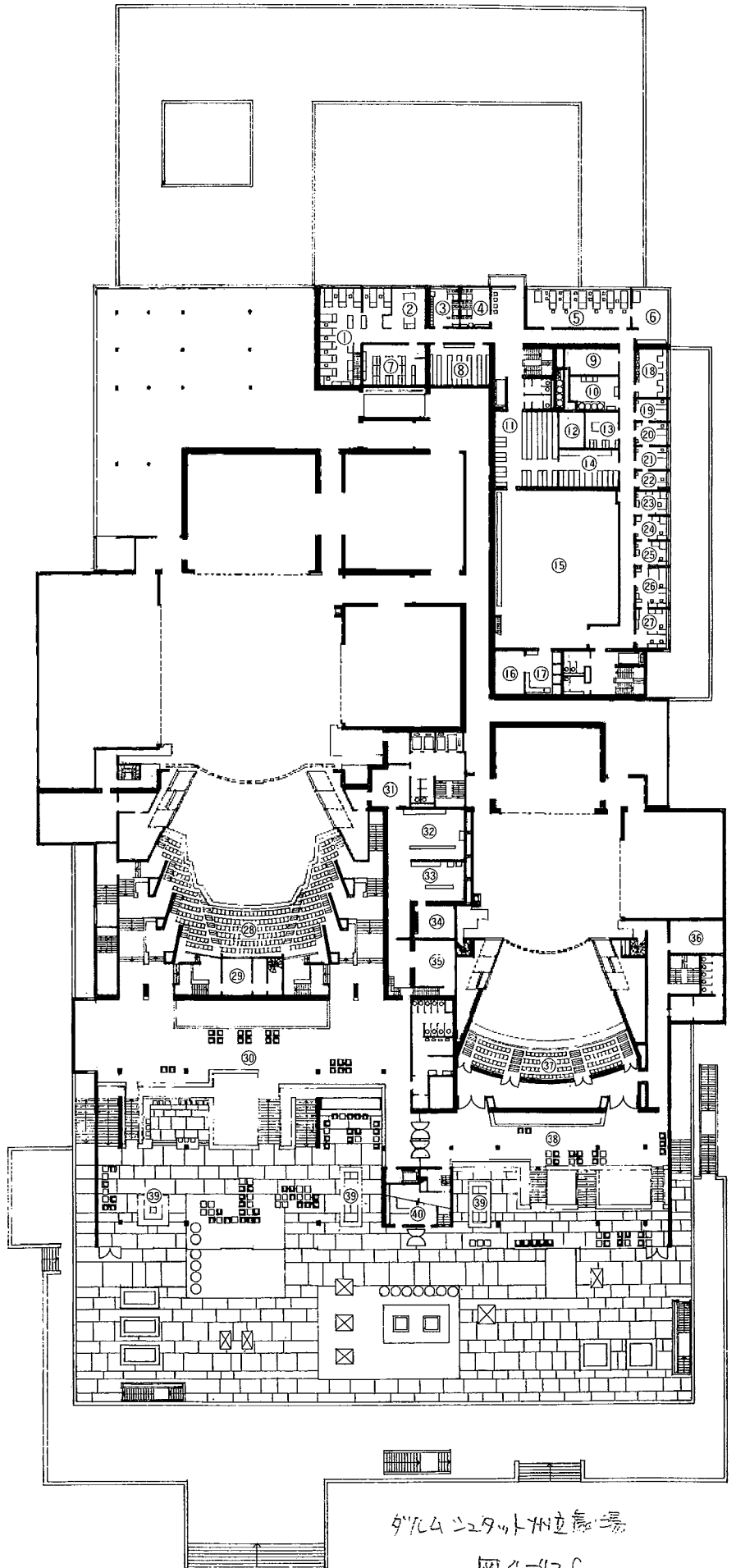


図4-42e

4階平面 4th

1	男性衣裳縫製室	91 m ²
2	男性衣裳裁断室	32
3	男性縫製工控室	19
4	女性縫製工控室	19
5	女性衣裳縫製室	67
6	女性衣裳裁断室	32
7	下着倉庫	41
8	はきもの倉庫	45
9	吹付室	28
10	洗濯乾燥室	30
11	衣裳倉庫	85
12	空調機械室	17
13	布地倉庫	23
14	かつら倉庫	38
15	小面工場	352
16	空調機械室	23
17	絵具調合室	27
18	はきもの製作場	26
19	衣裳管理係室	13
20	衣裳部長室	13

21	女性衣裳主任室	14 m ²	
22	男性衣裳主任室	10	
23	メイクアップ部長室	15	
24	男性メイクアップ主任室	14	
25	女性メイクアップ主任室	14	
26	メイクアップ師室	23	
27	メイクアップ師室	22	
28	大劇場2階客席	235席	191
29	倉庫	28	
30	大劇場ホワイエ		
31	大劇場客席調光機械室	30	
32	大劇場舞台調光機械室	68	
33	小劇場舞台調光機械室	64	
34	小劇場客席調光機械室	21	
35	ホワイエ備品庫	33	
36	小劇場照明器具庫	32	
37	小劇場2階客席	110席	114
38	小劇場ホワイエ		
39	ビュッフェ		
40	ビュッフェ倉庫	39	

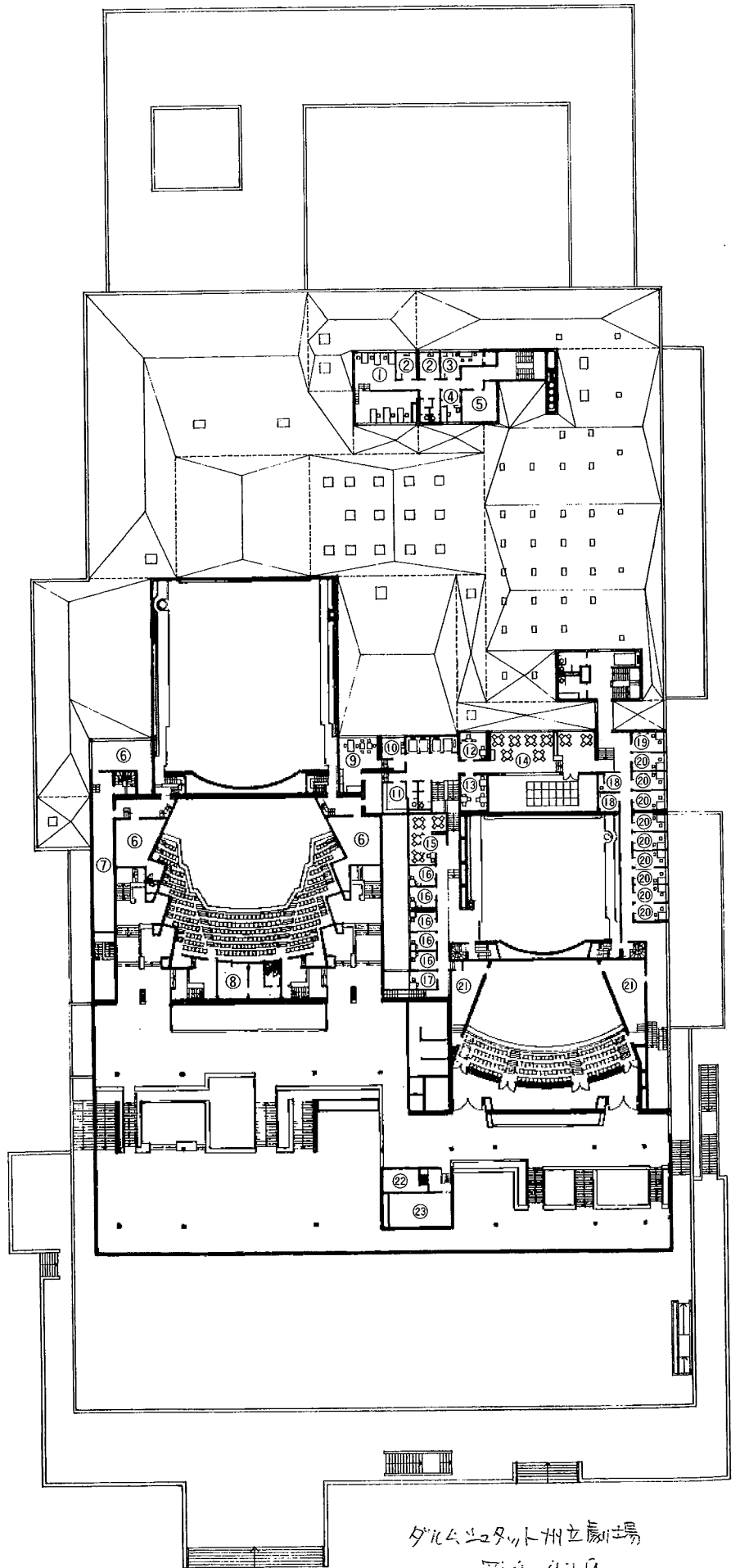


日比谷劇場5階平面

図4-42f

1	アシスタント室	62m ²
2	舞台美術家室	20
3	舞台装置設計管理室	15
4	衣裳デザイナー室	10
5	機械室	20
6	倉庫	102
7	図面資料庫	46
8	大劇場音響調整室	20
9	芸術総監督室	29
10	芸術総監督秘書室	13
11	湯沸室	12
12	男性バレエクラブ室	13

13	女性バレエクラブ室	15m ²
14	クラブ室	74
15	コーラスクラブ室	31
16	静養室	9×5
17	"	18
18	"	6×2
19	"	13
20	"	10×9
21	倉庫	75
22	機械室	13
23	倉庫	36



ダリアショチュウ州立劇場

図4-42 6階平面

6th

3) - c) カールスルーエ州立劇場

所在地：バーデン・ヴュルテンベルク州，カールスルーエ市

建築家：ハルムート・ハッツナー

劇場コンサルタント：ヴァルター・フーネケ

竣工：1975年

コスト：約 65,000,000 DM

ボリューム：160,000 m³

<大劇場>

客席数：1002席

オーデトリウム最大幅：最後部で約40m

オーデトリウム最大奥行：約28m

最大視距離：約29m

主舞台寸法：27.5 × 22m

下千、上千側舞台は変則形式

ポータル開口最大寸法：14 × 13m

ポータル開口最小寸法：12 × 6.2m

その高さ：26m

オーケストラピットの広さ：約110m²

<小劇場>

客席数：350～500人（オーフンステーツ形式）

オーデトリウムの最大幅：約26m

オーデトリウムの最大奥行：17m（エンドステーツの場合）

最大視距離：約18m（エンドステーツの場合）

その高さ：8.5m（ブリッツ形式）

オーケストラピットの広さ：約60m²

カールスルーエ市の人口は27万4千人でダルムシュタット市よりやや大きい。ただし劇場の規模は全体のボリュームを比較すると、ダルムシュタット州立劇場のほうがカールスルーエ州立劇場に比して3割強大きくなっている。カールスルーエ州立劇場は1002席の大劇場と、1イン・フロセニウムスタイル（オーフンステーツ形式）の小劇場を持つ。大・小劇場合せて、1978/9年のシーズンには586回の公演を行い、計23の新演出を制作している。この年の年間観客動員は約39万人である。職員構成は、企画制作文芸部門36名、歌手28名、俳優31名、バレエ23名、コーラス44名、オーケストラ84名、技術者195名、管理事務33名、建物管理53名計527名で、ややダルムシュタット州立劇場より多し、ほぼ同規模と考へてよいであろう。

空間構成図

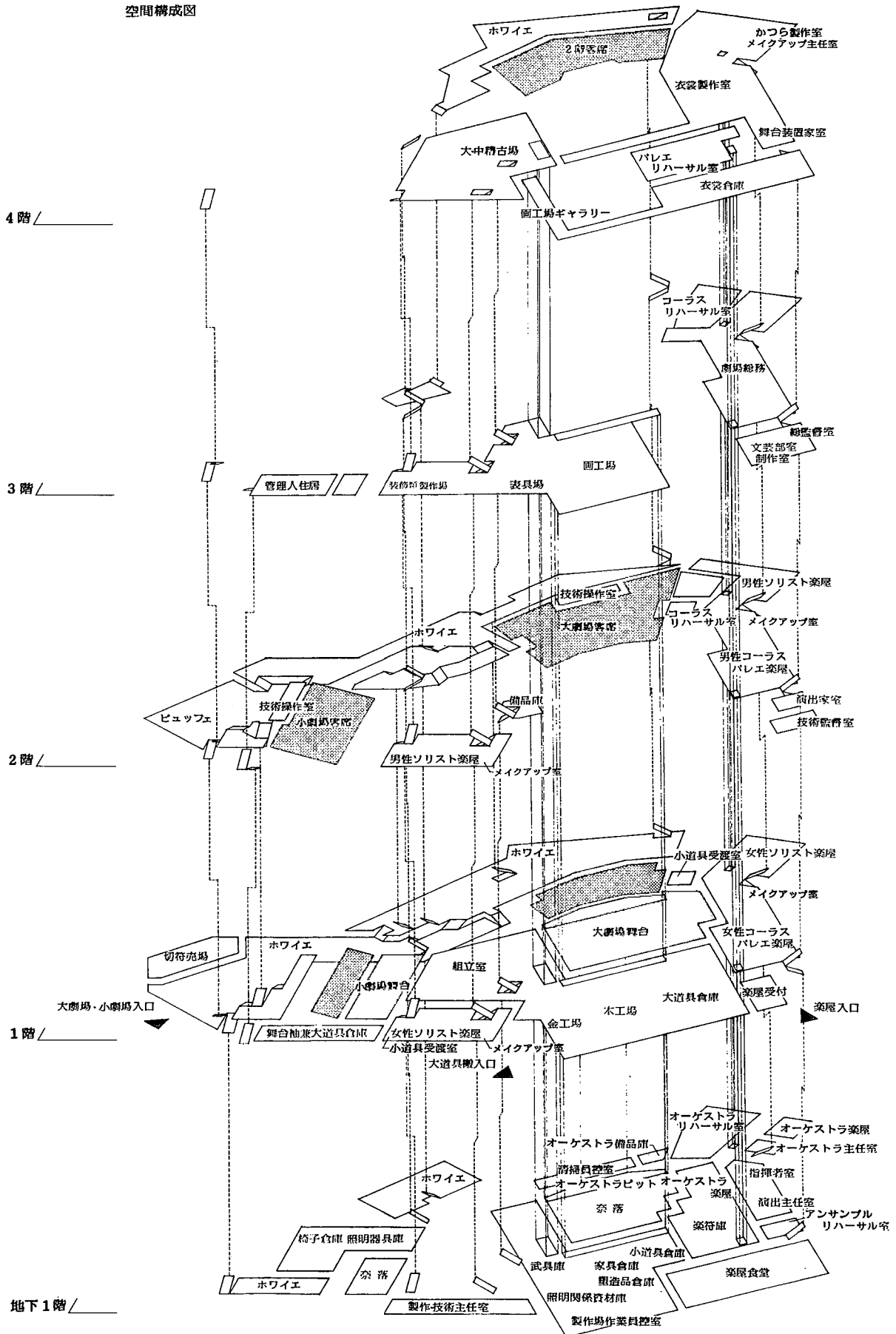


図4-43 カールスルーエ州立劇場の施設構成概略

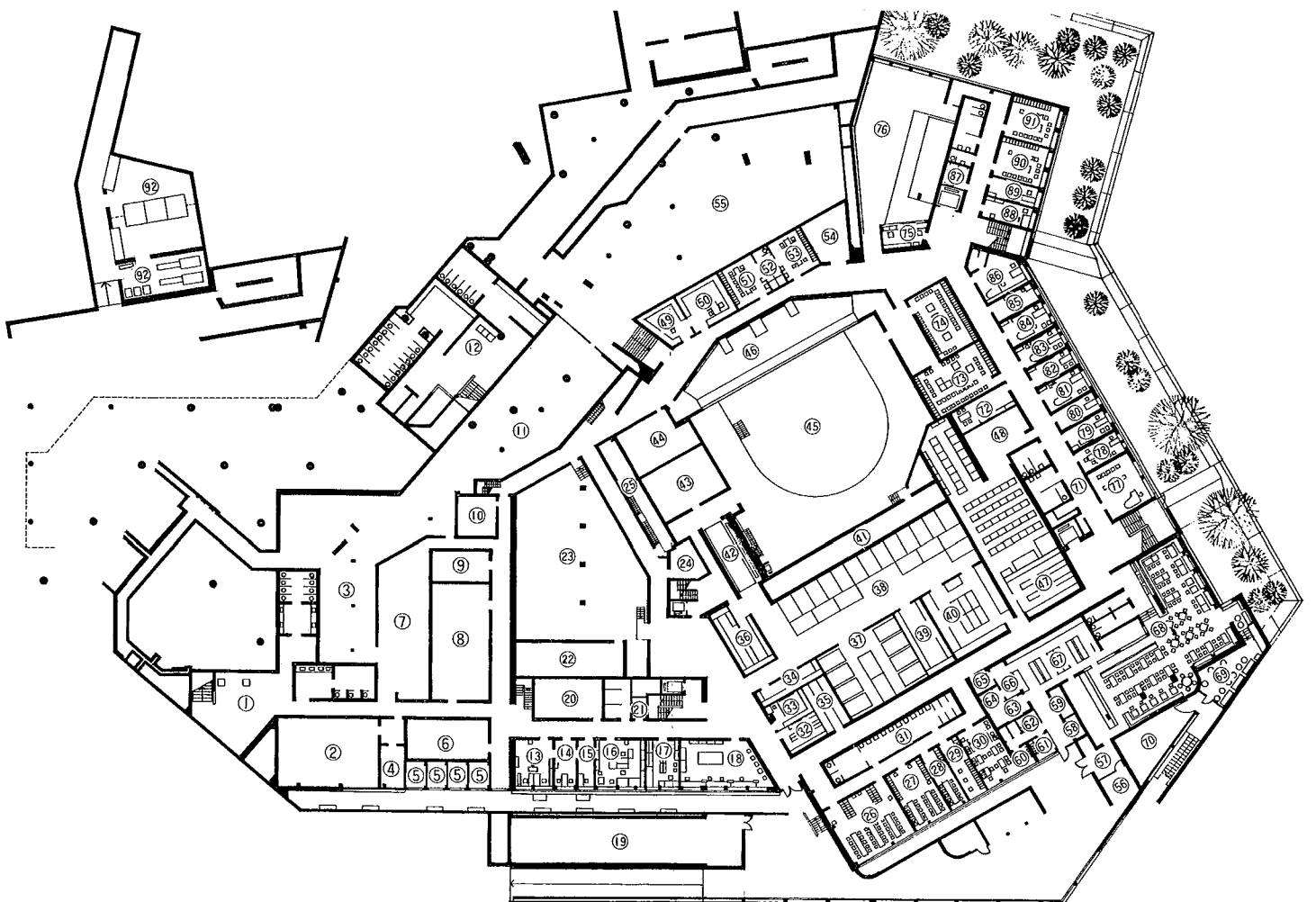
当劇場の最大の特徴は、大小劇場とも従来の型にとらわれな自由な発想を追求している点である。大劇場はフランクフルトの大回り舞台の流れを汲む、回り舞台による舞台転換を中心とした舞台空間の構成をとっている。プロセニア開口部は、ポータルブリッツとポータルタワーがそれぞれ独立して可動するように工夫され、完全にポータルタワーを取り除くと客席空間を包み込むような幅の広い前舞台領域をつくることができる。小劇場はフライフロアのない完全なオープンステージ形式である。

もうひとつの特徴は、舞台裏の技術諸室や事務諸室、楽屋、稽古場、製作場が、組織構成の大きさの割に、全体としてコンパクトな建物の中に整然とまとめられている点である。劇場全体の各部門の配置計画、大変参考になる建物である。

図4-43に、カールスルーエ州立劇場の施設構成を示した。大劇場と小劇場の舞台、組立場、大道具倉庫、金工場、木工場など大型の大道具が移動する部門はやはりタルムシュタット州立劇場の場合と同様、同一平面上に集められている。ただし、金工場については、この階に大きな平面が確保できなかった為、3階に設けられており、舞台との連絡は大型の背景幕搬送リフトによっている。楽屋部門は大、小劇場の両方に、舞台と同一階及びその上階にコンパクトに設けられている。全この楽屋が外部に面して採光・換気が行えるように計画され、楽屋環境は非常に良い。大稽古場部門は主として4階を中心としてまとめられている。ただし、オーケストラ稽古場は、他のオーケストラ関係諸室とともに、オーケストラピットのシバルである地下1階にまとめられている。事務室関係は3階を中心としてまとめられている。

図4-44 a~eに各階平面図を示した。

1	小劇場ホワイエ	m ²	24	エレベーター機械室	16	47	小道具倉庫	39	70	自転車置場	44
2	バッテリー室	100	25	防火シャッターピット	32	48	楽譜庫	171	71	清掃具庫	2
3	小劇場用椅子倉庫	58	26	大道具係控室	60	49	清掃薬品庫	20	72	プロンプター・舞台監督室	21
4	開閉器室	14	27	"	36	50	建物管理主任室	28	73	オーケストラ楽屋 33人	52
5	変電室	24	28	小道具係控室	18	51	清掃員控室	22	74	" 27人	31
6	高圧変電室	48	29	照明・音響作業員更衣室	18	52	シャワー室	10	75	録音室	14
7	小劇場奈落	82	30	照明・音響作業員控室	32	53	清掃員控室	22	76	オーケストラリハーサル室	197
8	低電圧配電室	95	31	シャワー室	53	54	オーケストラ備品庫	28	77	アンサンブルリハーサル室	37
9	小劇場舞台機構機械室	25	32	小物部品庫	16	55	空調機械室	160	78	評議員室	17
10	小劇場照明器具庫	21	33	工具室	15	56	飲物貯蔵庫	15	79	演出主任室	17
11	配線配管室	240	34	照明関係資材庫	16	57	空ビン倉庫	15	80	楽譜資料係室	14
12	大劇場ホワイエ		35	布地倉庫	19	58	清掃具庫	4	81	音楽稽古指導教師室	20
13	大道具主任室	28	36	武具庫	28	59	ビール貯蔵庫	6	82	コーラス指揮者室	14
14	倉庫主任室	15	37	照明器具庫	90	60	食堂従業員女性更衣室	5	83	オペレッタ指揮者室	17
15	小道具主任室	14	38	家具倉庫	487	61	食堂従業員男性更衣室	6	84	第一指揮者室	20
16	照明主任室	35	39	塑造品倉庫	31	62	食堂チーフ室	4	85	指揮者室	11
17	電気音響スタジオ	23	40	幕類倉庫	70	63	厨房倉庫	10	86	音楽総監督控室	26
18	照明作業室	53	41	大劇場背景幕格納庫	58	64	冷凍庫	6	87	シャワー室	8
19	貯水槽	127	42	大道具リフト	28	65	主冷蔵庫	6	88	オーケストラ管理係室	15
20	空調機械室	39	43	大劇場舞台機構機械室	51	66	冷凍室	9	89	オーケストラ主任室	14
21	清掃具庫	4	44	制御盤室	43	67	楽屋食堂厨房	75	90	オーケストラ楽屋 15人	29
22	スプリンクラー室	54	45	大劇場奈落	254	68	楽屋食堂	240	91	" 15人	29
23	空調機械室	279	46	大劇場オーケストラピット	110	69	プレイルーム	32	92	空調機械室	557

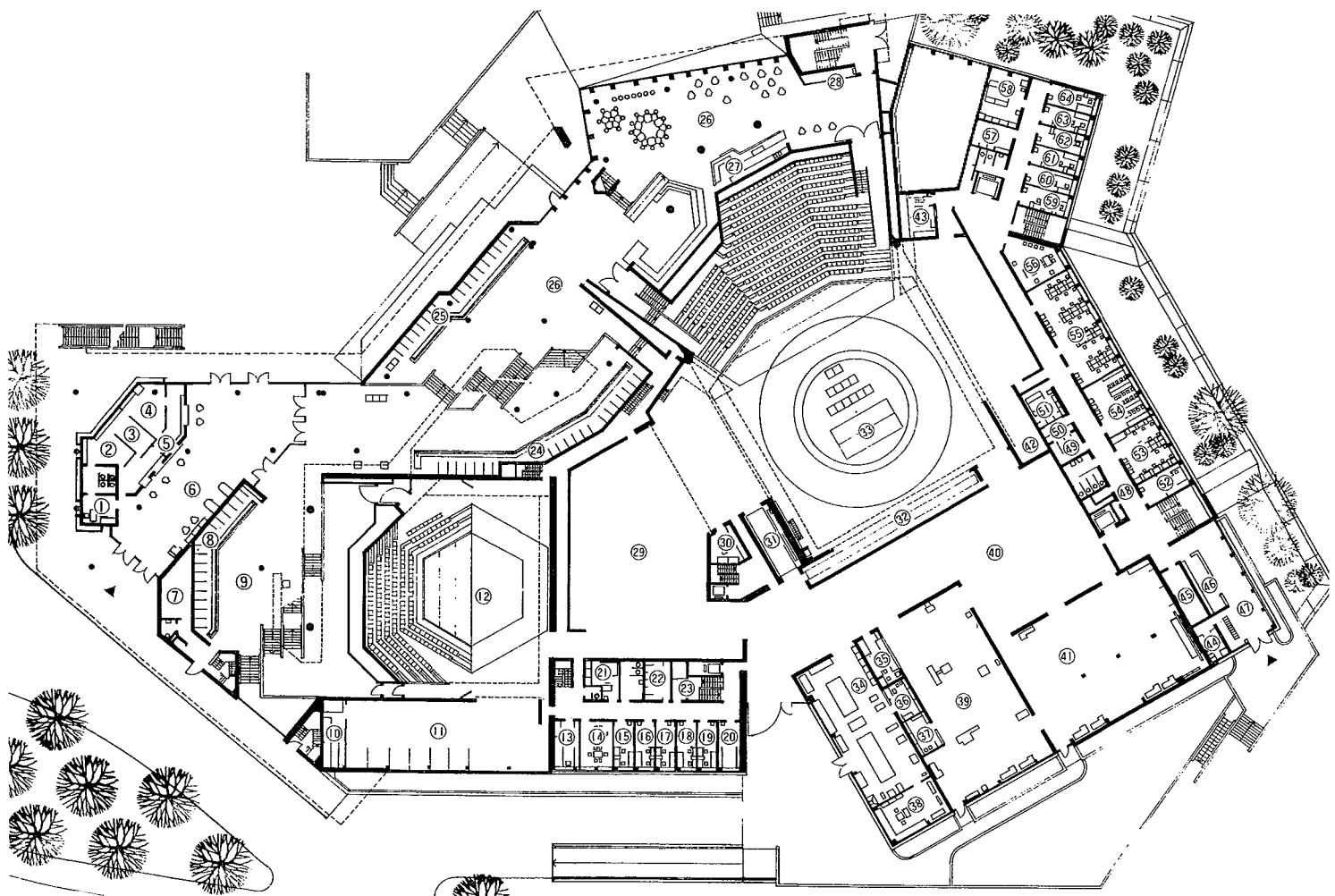


地下1階平面 basement S=1:800

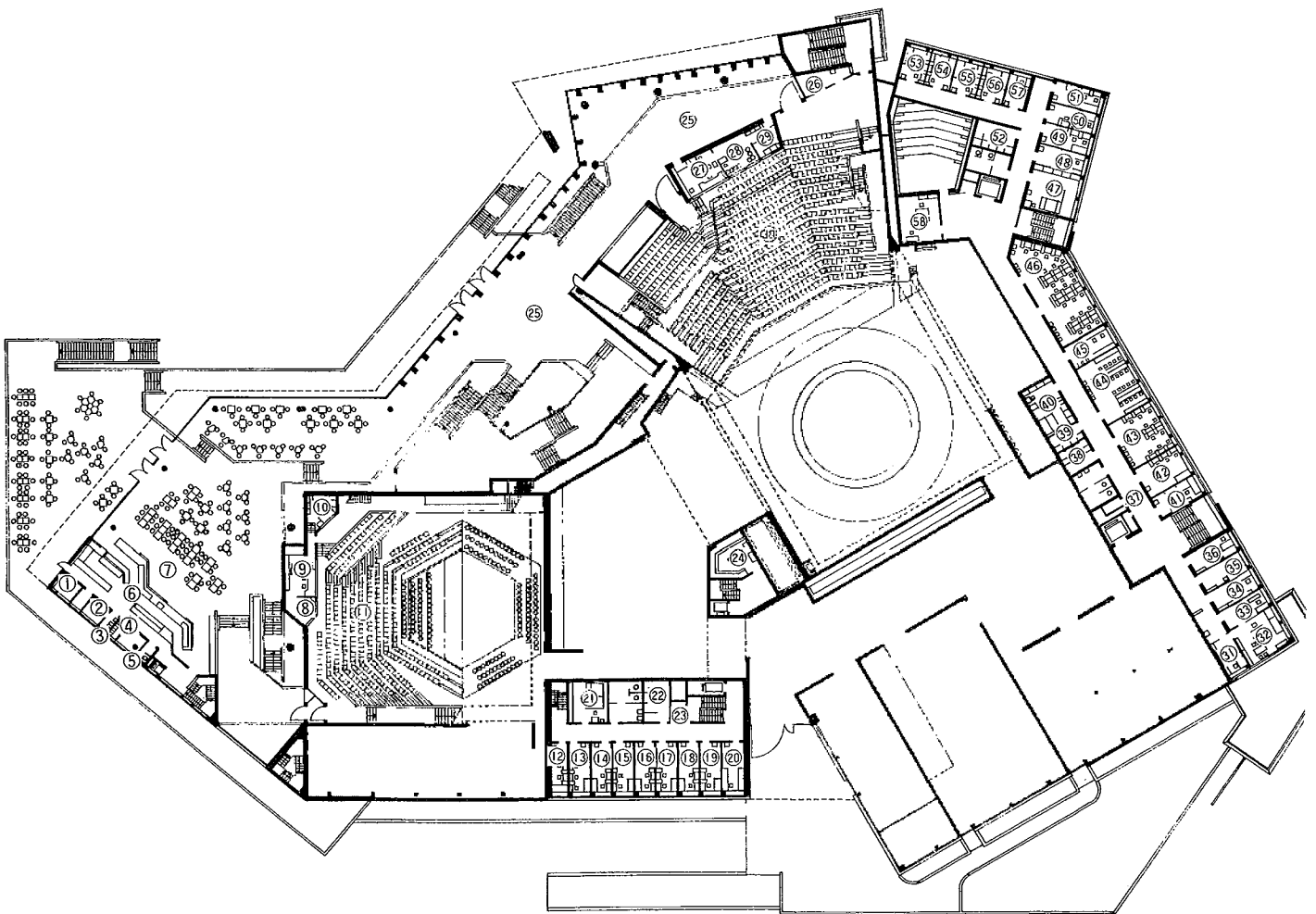
カーニール工州立劇場 図4-44a

600

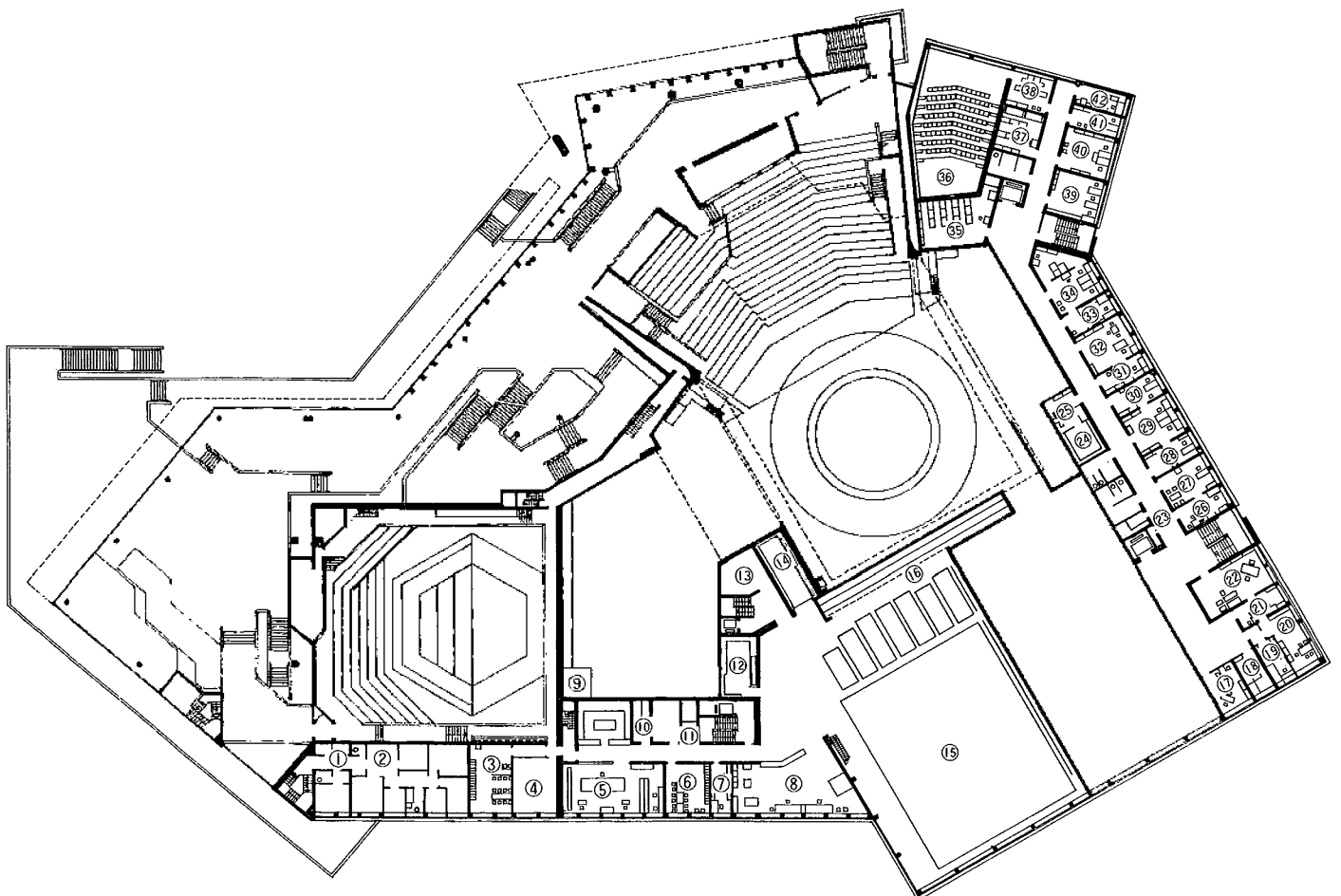
1	医務室	14m ²	24	大劇場クローク	82	47	楽屋入口	
2	会員券事務室	23	25	"	63	48	清掃具庫	2
3	"	15	26	大劇場ホワイエ		49	大劇場女性バリエシャワー室	11
4	当日券事務室	23	27	大劇場ビュッフェ厨房	24	50	大劇場女性コーラスシャワー室	7
5	切符売場	36	28	清掃具庫	7	51	大劇場公演用衣裳倉庫	17
6	入口ホール		29	大道具組立場	412	52	大劇場女性メイクアップ室	17
7	飲物貯蔵庫	25	30	備品庫	16	53	大劇場女性コールドバリエ楽屋 13人	38
8	小劇場クローク	60	31	大道具リフト	28	54	大劇場女性コーラスエキストラ楽屋 20人	41
9	小劇場ホワイエ		32	大劇場背景幕格納庫	58	55	大劇場女性コーラス楽屋 24人	79
10	小劇場舞台備品庫	20	33	大劇場舞台	m ²	56	大劇場出待室	31
11	小劇場舞台袖兼大道具倉庫	207	34	金工場	149	57	大劇場女性シャワー室	14
12	小劇場舞台		35	小道具製作場	20	58	大劇場公演用衣裳倉庫	29
13	小劇場小道具受渡室	18	36	金工場主任室	14	59	大劇場女性バリエソリスト楽屋 3人	15
14	小劇場出待室	23	37	木工場主任室	14	60	大劇場女性メイクアップ室	14
15	小劇場女性ソリスト楽屋 3人	14	38	武具製作場	40	61	大劇場女性ソリスト楽屋 3人	14
16	" 3人	14	39	木工場	286	62	" 3人	14
17	" 3人	14	40	組立場	292	63	" 3人	14
18	" 3人	14	41	大道具倉庫	326	64	" 3人	14
19	" 3人	14	42	備品庫	32			
20	小劇場女性メイクアップ室	15	43	大劇場小道具受渡室	22			
21	小劇場公演用衣裳倉庫	16	44	医務室兼防災センター	12			
22	小劇場女性シャワー室	14	45	弱電気室	18			
23	清掃具庫	4	46	電話交換室兼楽屋受付	18			



1	ビュッフェ倉庫	5m ²	30	大劇場1階客席	m ²
2	冷蔵庫	8	31	技術監督秘書室	13
3	ビュッフェ女性従業員更衣室	3	32	技術監督室	29
4	ビュッフェ男性従業員更衣室	3	33	技術アシスタント室	14
5	ビュッフェ事務室	6	34	演出家室	14
6	ビュッフェ厨房	53	35	演出部長室	14
7	小劇場ホワイエ		36	総監督補佐室	15
8	小劇場投映室	12	37	清掃具庫	2
9	小劇場調光操作室	18	38	大劇場男性パレエシャワー室	11
10	小劇場音響調整室	13	39	大劇場男性コーラスシャワー室	7
11	小劇場客席		40	大劇場公演用衣裳倉庫	22
12	小劇場男性個室楽屋 1~2人	12	41	パレエ振付師室	14
13	" 1~3人	14	42	大劇場男性パレエソリスト楽屋 3人	23
14	小劇場男性ソリスト楽屋 3人	14	43	大劇場男性フォルドソリスト楽屋 10人	35
15	" 3人	14	44	大劇場男性コーラスエキストラ楽屋 20人	44
16	" 3人	14	45	大劇場男性メイクアップ室	16
17	" 3人	14	46	大劇場男性コーラス楽屋 22人	72
18	" 3人	14	47	大劇場公演用衣裳倉庫	30
19	" 3人	14	48	大劇場男性メイクアップ室	14
20	小劇場男性メイクアップ室	15	49	大劇場男性ソリスト楽屋 3人	14
21	小劇場公演用衣裳倉庫	21	50	" 3人	14
22	小劇場男性シャワー室	14	51	" 3人	14
23	清掃具庫	4	52	大劇場男性シャワー室	14
24	備品庫	22	53	大劇場男性ソリスト楽屋 3人	12
25	大劇場ホワイエ		54	" 3人	12
26	清掃具庫	14	55	" 3人	12
27	大劇場調光操作室	21	56	" 3人	12
28	大劇場投映室	15	57	大劇場男性個室楽屋兼音響室 1~2人	10
29	大劇場音響調整室	10	58	コーラスリハーサル室兼コーラス用楽譜庫	25



1	倉庫	4m ²	22	総監督室	40m ²
2	管理人住居	127	23	清掃具庫	2
3	技術者更衣室	39	24	備品庫	15
4	制御機械室	32	25	休憩室	15
5	装飾製作室	72	26	総支配人秘書室	17
6	更衣室	39	27	総支配人室	23
7	製作場主任室	14	28	人事部事務室	16
8	表具場	90	29	"	29
9	装飾類倉庫	30	30	人事部長室	17
10	シャワー室	9	31	経理監査秘書室	14
11	清掃具庫	4	32	経理監査室	26
12	絵具庫	28	33	主計室	20
13	倉庫	22	34	簿記室	23
14	大道具リフト	28	35	記録室	43
15	画工場	806	36	コーラスリハーサル室	152
16	大劇場背景幕格納庫	58	37	記録室	23
17	文芸部主任室	20	38	特別簿記室	20
18	文芸部秘書室	13	39	郵便係室	30
19	文芸部アシスタント室	12	40	記録事務室	29
20	制作室	27	41	特別簿記室	14
21	総監督秘書室	15	42	広報部長室	14

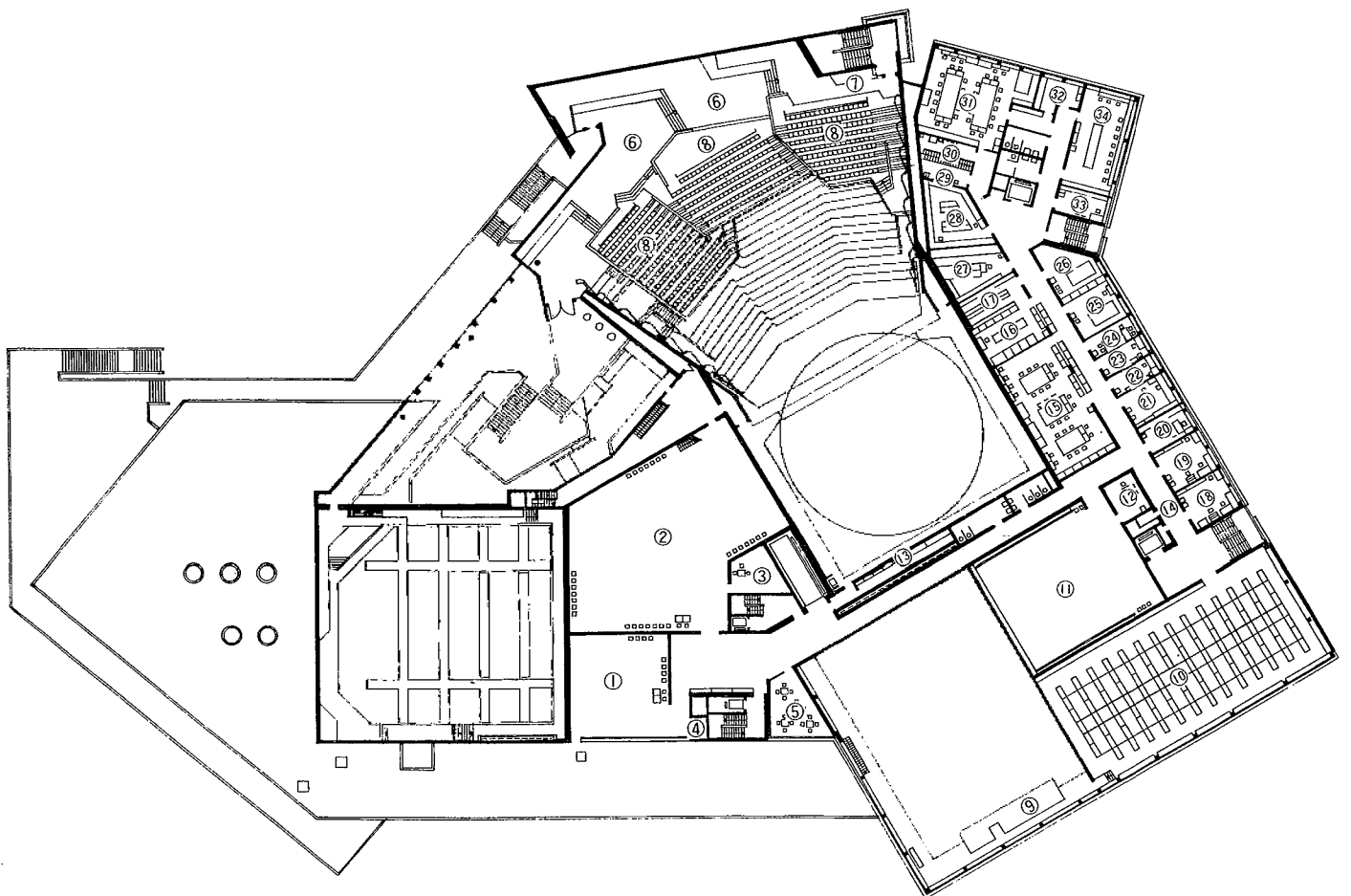


3階平面 3rd

ナニワカニエ立劇場

図4-44d

1	中稽古場	147m ²	22	衣裳デザイナー室	14m ²
2	大稽古場	415	23	"	14
3	大稽古場出待室	25	24	休憩室	12
4	清掃具庫	4	25	男性衣裳裁断室兼着付室	29
5	談話室	37	26	女性衣裳裁断室兼着付室	31
6	大劇場2階席ホワイエ		27	布地倉庫	37
7	清掃具庫	7	28	かつら倉庫	43
8	大劇場2階客席		29	男性衣裳縫製工更衣室	13
9	画工場ギャラリー		30	女性衣裳縫製工更衣室	15
10	衣裳倉庫	462	31	女性衣裳縫製室	112
11	バレエリハーサル室	247	32	吹付室	19
12	バレエリハーサル室付属室	17	33	メイクアップ主任室	18
13	照明係更衣室	23	34	かつら製作室	70
14	清掃具庫	2	35		
15	男性衣裳縫製室	114	36		
16	はきもの製作室	37	37		
17	はきもの倉庫	25	38		
18	舞台装置家室	29	39		
19	"	29	40		
20	衣裳主任室	20	41		
21	衣裳デザイナー室兼アシスタント室	24	42		



4階平面 4th

カールスル-工州立劇場 図 4-44 e

4) 西ドイツのランデステアター、市民ホール

4-1) ランデステアター

西ドイツの公共劇場では、これまでに見たとおり、クローズドなシステムをとり、自分の所有する劇場で公演をすることが基本となつてゐる。しかし、こうした劇場が持てるのは、いくらか数が多いといへどもやはり、人口の多い限られた都市である。公共施設として劇場を考へる場合、そのサービスを受けられない小さな町や村が問題となる。西ドイツでは、こうした地域の公演活動を活性化させるために、いわゆる「^(ビューネ)ランデス・テアター」方式を考へてゐる。これは、ある地域の拠点都市に劇団の本拠地を置き、その周辺町村へ出張公演を行うものである。

たとえば、ハノーバー市に拠点を置く、「Landesbühne Hannover」(ハノーバー・ランデスビューネ)を例にとると次のような具合である。ハノーバー・ランデスビューネはハノーバー市内では、二箇所の劇場を拠点として計 84公演の公演を行つてゐる。(1978/9年シーズン)。しかし、この本拠地公演は、活動のほんの一部であり、これ以外の場所、即ち、周辺の市町村で、年間388公演もの出張公演を行つてゐるのである。たとえば1979年1月の公演スケジュールを示すと次のようになる。

演目1 "Der Diener zweier Herrn" (Goldoni) (21都市 25公演)

(日付)	(市町村名)	(日付)	(市町村名)
1月 2日	Braunlage	1月 20日	Holzminde
7日	Berensen	22日	Hantensbüttel
8日	Nienburg VB	23日	Bad Gandersheim
9日	Nienburg Stadt	24日	Salzg.-Leb (2公演)
10日	Gronau	25日	Einbeck
11日	Moringen	26日	Burgdorf
12日	<u>Hannover</u>	30日	Wunstorf (2公演)
13日	Gehrden	31日	Witten (2公演)
14日	Seesen		
15日	Königsutter		
16日	Bad Lauterberg		
17日	Langenhagen		
18日	Herzberg		
19日	Schöningen		

演目2 "Emilia Galotti" (Lessing)		(16都市18公演)	
(日付)	(市町村名)	(日付)	(市町村名)
1月10日	Stadtthagen	21日	Büddenstedt
11日	Rinteln	22日	Gütersloh
12日	Fallingb.otel	23日	Peine
15日	Bergneustadt	24日	Goslar
16日	Barsinghausen	25日	Werl
17日	<u>Hannover</u>	26日	Sulingen
18日	Northeim	27日	Wolfenbüttel
19日	Salzg.-Bad	29日	Düren
20日	<u>Hannover</u>	30日	<u>Hannover</u>

演目3 Blick zurück im Zorn (J. Osborne) (5都市5公演)	
(日付)	(市町村名)
1月22日	<u>Hannover</u>
23日	Verden
26日	Uelzen
28日	Bückeburg
29日	Buderstadt

つまり、『ハリー・ランデスビューネ』は、1979年1月中に3つの演目と、48公演行って113か。この内、ハリー市で行った公演は、わずか5公演で、残りは 周辺地域へ出張を行って113のである。このうち、最も遠くへの出張公演としては道路距離にして約200km離れた都市の公演が見られる。(Witten市)

事業体名	本地公演	出張公演	事業体名	本地公演	出張公演
Landesbühne Hannover	84	388	Landestheater Detmold	317	306
Grenzlandtheater des Kreises Aachen	215	83	Landesbühne Rhld.-Pfalz	111	34
Saarl. Landestheater	135	87	Burghofbühne Dierskirchen	0	163
Rheinisches Landestheater	154	165	Stadtebundtheater Nordostoberfranken	152	100
Landesbühne Niedersachsen-Nord	93	318	Theater am Niederrh. O.	7	162
Pfalz theater	295	152	Landestheater Schwaben	85	170
Würtemb. Landesbühne	257	280	Badische Landesbühne	26	215
Westfäl. Landestheater	34	260	Schleswig-Holst. Landestheater	496	206
Landestheater Würtemb.-Hohenzollern	177	82			

表4-6 ドイツのランデスビューネ(ビューネ)型の公共劇場

註 "Theaterstatistik 1978/79", p.13~21より作成

表4-5に、「Theaterstatistik 1978/79」に見るラニデステアター
(ビューネ)的な色彩の強い事業体を抜き出してみた。これを見ると、
これらのラニデステアターで覆う活動範囲はほぼ全国にわたり、その
活動が、地方への演劇活動の浸透にいかにも重要な要素となってい
るかが判る。

4) - b) 市民ホール (多目的ホール)

先に西ドイツではランドステアターが演劇活動の地方分散に貢献している状態を示したが、その上演場所として良く利用されるのが、いわゆる "Festsaal" "Kulturhaus" "Festhalle" "Stadthalle" 等と呼ばれる多目的ホール施設である。ここではそれらをまとめて便宜上、市民ホールと呼ぶことにする。

ハルリニ工科大学でこうした市民ホールを主として研究している、ヤン・フーベルコロン氏によると、西ドイツの市民ホールは以下の

*2)
西ドイツの多目的空間
ヤン・フーベルコロン,
BTR, 1976/5
P18~21

4つのタイプに分類されるという。^{*1}

(1) 小さな町や村に建つ多目的ホールを主として町民のスポーツや文化的な催しに使用される小規模で単純なホール施設。近年町村の合併が盛んであるが、合併後の新しい核をつくる意味でこの種の施設が頻りに建設されている。価格の半ばほどのプレファブ式ホールの独壇場となっている。

(2) 小さな都市においての都市の拡張を契機にお祭りホール ("Festhalle") 的な市民ホールが建設されることが多い。これらのホールは形態的には(1)とあまり変わらないが、その使用プログラムに大きな違いがある。即ちスポーツ施設は別に設置されるため、スポーツ的な催物は考えず、専ら社交・文化的企画やお祭り、政治的な集会などに目的を絞って使用される。

(3) 人口約5万人前後の都市になると文化的な意味で大きな都市との競争を意識する。こうした都市では狭い意味での市民ホールが建設される。このタイプの市民ホールは、巡回劇団^{*2}の公演を強く意識するので、通常ひとつの施設に性格の異ったふたつのホールを併設する。ひとつのホールは演劇公演用の750席程度のホールである。これは基本的に劇場建築の定式にのっとって設計される。即ち、傾斜した床面を持つ客席と中規模舞台^{*3}からなる。ふたつ目のホールは、約1500席程度の客席を持つお祭りホールであり、これは、平らな床を持ちオーブンで可変的な演技面が設定できるようなホールである。

*2) ランステアター等の地方を巡回する劇団

*3) 西ドイツ法域上の舞台規模種別

(4) 10万人を越えるような都市になると、多目的ホールは、劇場等の

専用の文化施設に対峙され、主としてマスとしての市民の商業的な催し物に供される。先の中規模都市の施設と違う点は、大都市の施設は規模が大きくなり、多くの規模や性格の異なる複数のホールが複合されてくるという点である。たとえば、ひとつの施設内に、文化ホール、お祭りホール、多くの会議ホール、展示空間などが設定される。また、大都市では、非常に特殊化された指向をもつ多目的の設備もつくられる。たとえば「スポーツホール、円形競技施設、展示ホール、コンサートホール、会議場等」と呼ばれるものである。これらの施設は専門的な方向を持ちながらも、さまざまな企画をこなすという点でやはり多目的ホールである。

ヤン・フェーベルコルン氏は上記のように西ドイツの市民ホールのタイプを分類しているが、ここで興味をひくのは、特に①と④の最初のタイプである。対象とする催し物の内容としては、我国の多目的ホールとしての文化会館と非常に類似している。しかし大きく相違する点は、我国の文化会館は、複数のホールを設定する場合には、通常客席規模の大小は変えるが、ホールのタイプとしては、ほとんど相似形の施設としてしまうのに対して、西ドイツの場合は段床形式の演劇用ホールと平土間形式のお祭りホールという形態内容が、大きく異なるタイプのものを併設するという点である。この種のホールの例として図4-45にヴッテン市市民ホールを示す。先ほどから述べているように劇場スタイルの演劇ホールと、平土間主体のお祭りホールから成る。演劇ホールは、特に目新しいところはないので、お祭りホールについて詳しく見た。図4-46にお祭りホールのバリエーションを示した。これに見るように、可動用のワゴン舞台を持った非対象の空間で、自由な形の舞台をつくり出すことが出来る。また、イスの代わりにテーブルを設置することも出来る。全体を2室に区切って使用することもできる。市民のための、バー、宴会、パーティション、会議、お祭り等極めて多目的な利用が可能である。

最近では高度な空間可変技術を駆使して、この2種のホールをひとつ

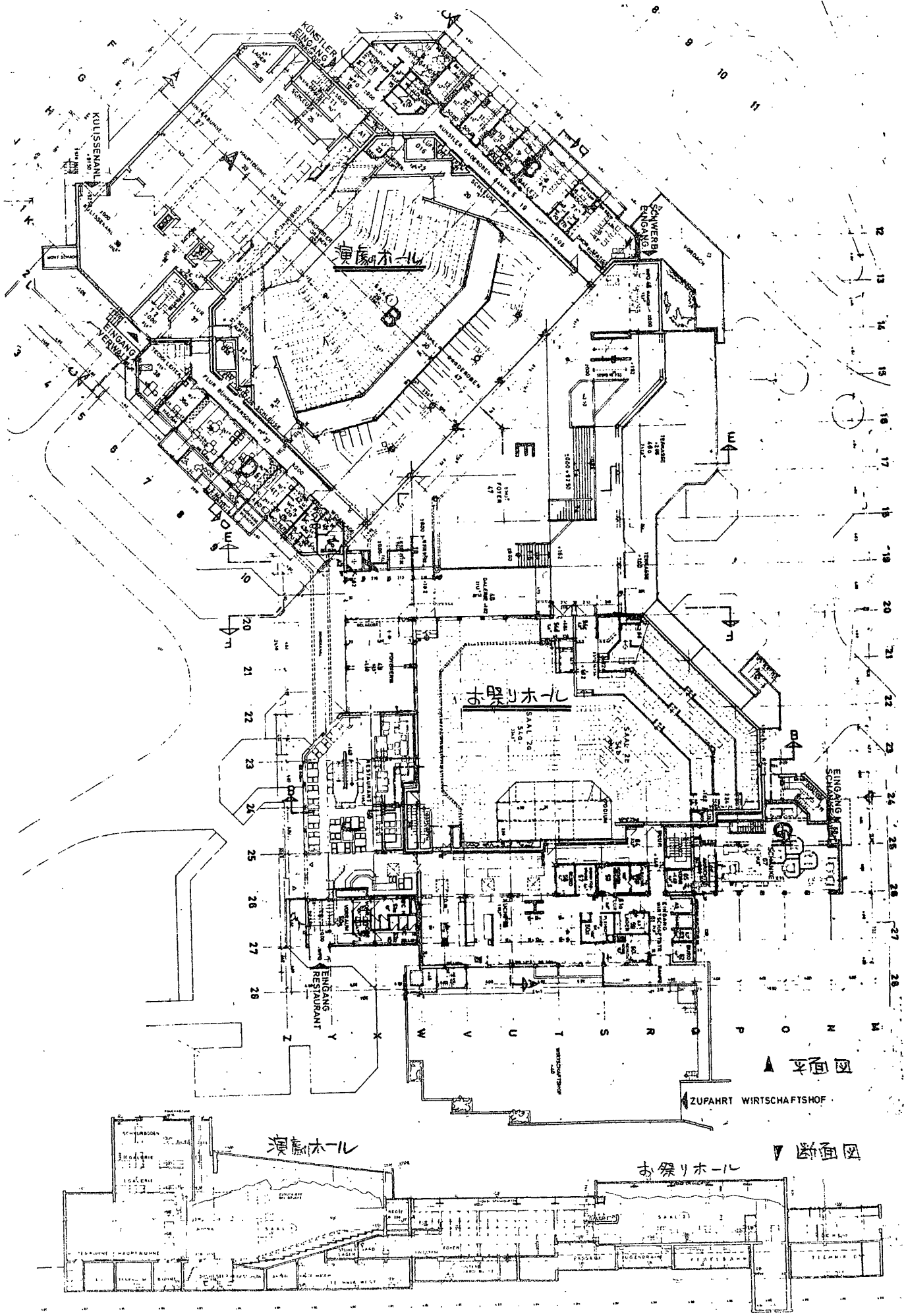


図4-45 ゴッティンゲン市市民ホール

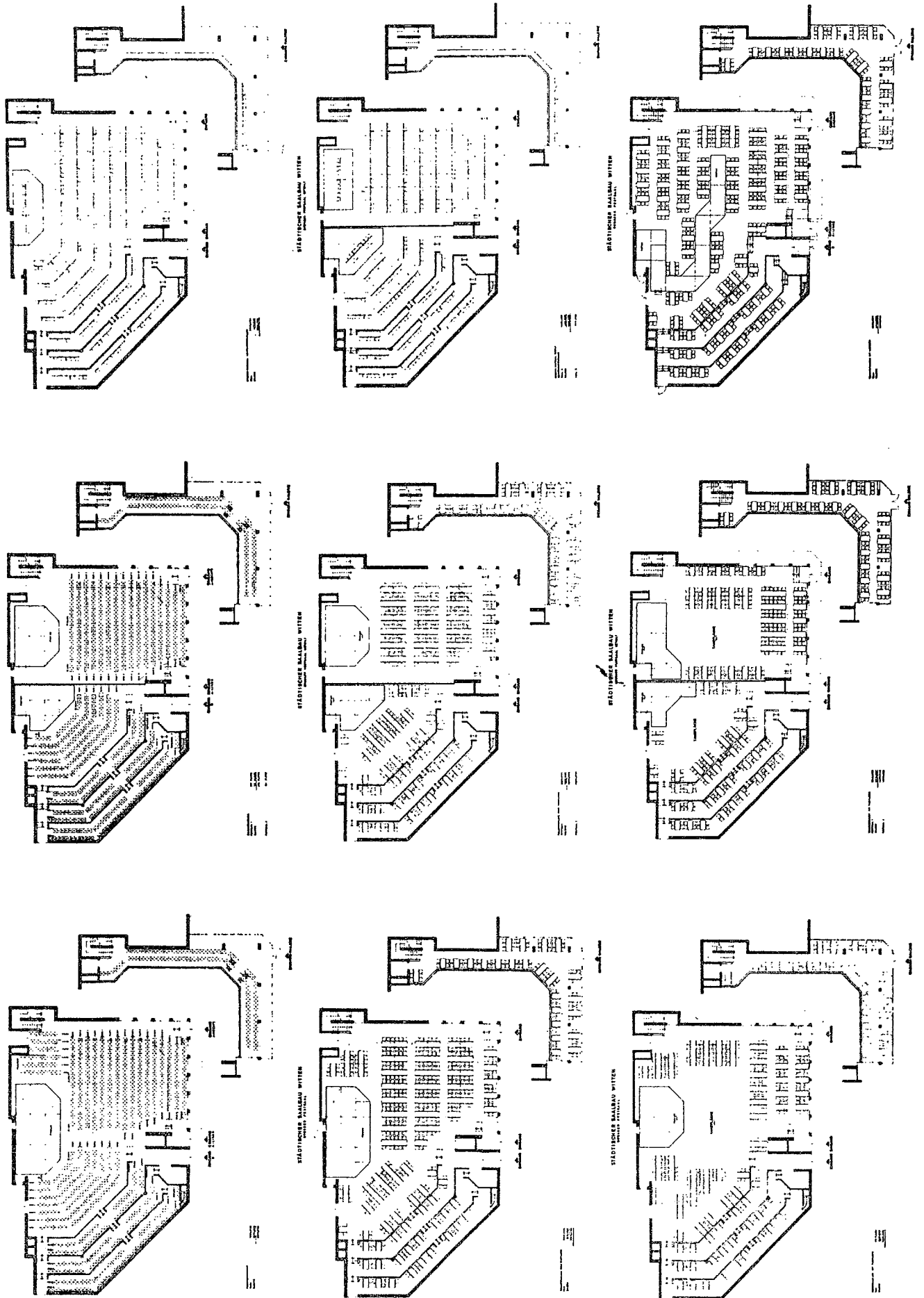


図4-46 ゲッティン市市民ホールのお祭りホールへのバリエーション

に重ね合わせたようなホールも多く出現している。ここではその一例としてノルダージュタットの市民ホールを示す。(図4-47 ~ 4-49c)
 このホールの特徴は、平土間にも段床にも可変できる観客席を持ち、かつ、主ホールの両側面に可動間仕切りで区画された小空間を付属し、客席空間の拡大・縮小が出来るという二点にある。つまり先にあげた、演劇的な催し物とお祭りの催し物をもつ一つのホールで行ってしまおうとするものである。図4-49a~cに、その6つのバリエーションを示した。図4-49aの半分は大型ショーの場合で、可動間仕切りは取り払われ、観客席が拡大されている。残りの半分は、普通の演劇上演に使用した場合の図である。図4-49bの半分は、舞台を客席空間のまん中に設置したアリーナ形式演劇の場合、おりの半分は、中央の平土間を囲んでテーブルを配置したダンスパーティの場合である。図4-49cの半分は、可動間仕切りを取り払ってテーブルを置いた大会議の場合、他の半分は、小会議の場合の使い方を示している。このように、客席床の可変機構等によって極めて多様な催しに対応した空間造りに成功している。

西ドイツでは、市民ホールは、多目的ホールとして極めて多様な使われ方に対応できるように工夫がなされている。こうした考え方は、我国のマニエリ化した文化会館に新しい息吹を吹き込んでくれるであろう。ただし、ここで、ひとつ注意しなければならないことがある。西ドイツでは、こうした市民ホールは、たとえ形態的に舞台芸術が可能に作られていても、それは決して舞台芸術の創造施設としては扱われていないという点である。セン・フィーバルコルン氏は前出の文章の最後に次のように書いている。

「多目的ホールがたとえあるひとつの都市の観点からは合理的で納得のゆく施設のように見えても、^(x1)(総合的な)文化環境という意味では、こうした決定は、否定すべきものである。^(x2)というのは、多目的ホールは舞台芸術を創造するものではなく、その上演を普及させるものだからである。つまり、創造と普及はひとつの総体としてあるのである。

(x1) 自立した劇場も経済的であるという点で

(x2) 自立した劇場よりも多目的ホールの方が良いという決定

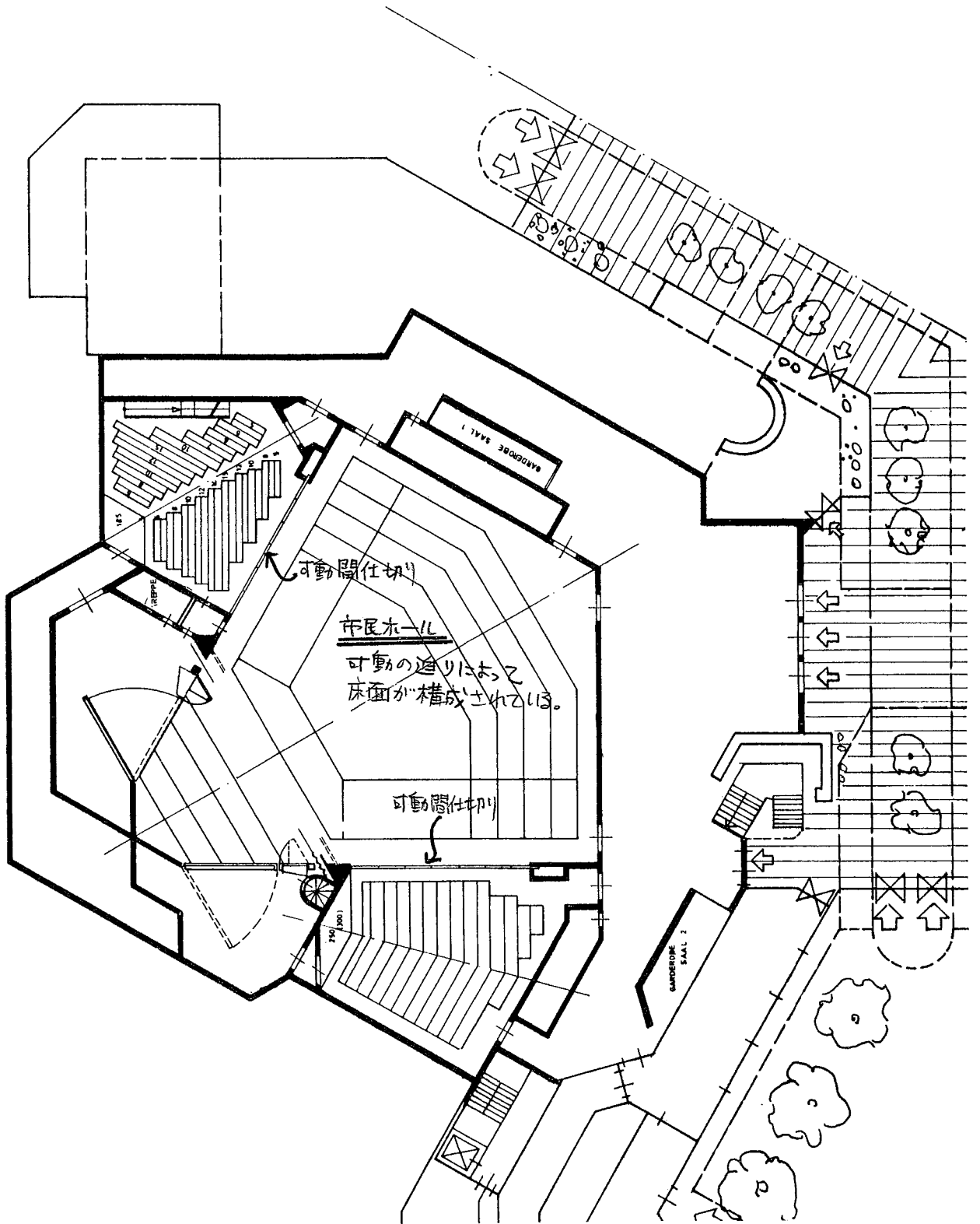
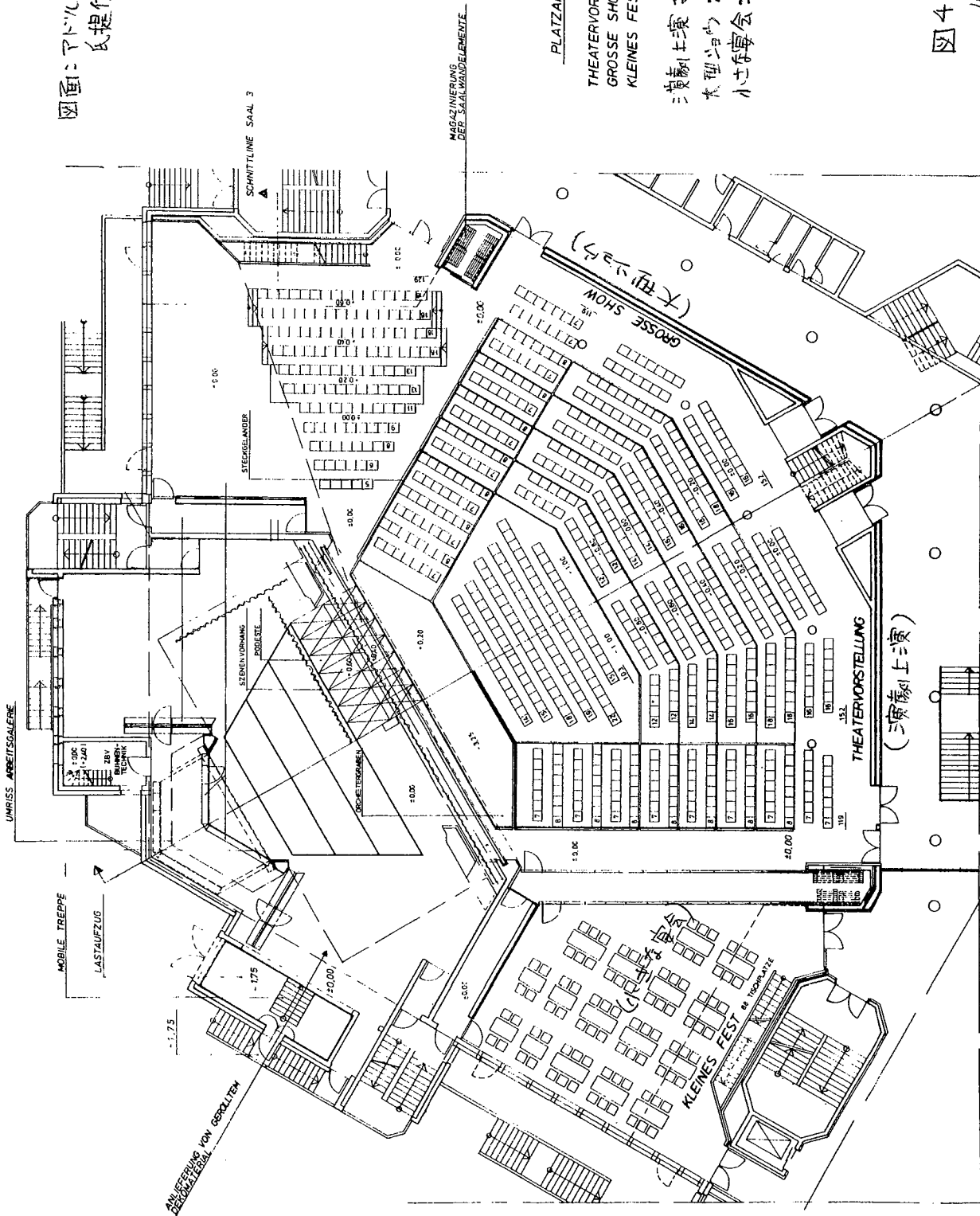


図4-47 ルターシュタット市市民ホール 平面図

図面にアドルフ・ツォッツマン氏提供



PLATZANGEBOT PARKETT

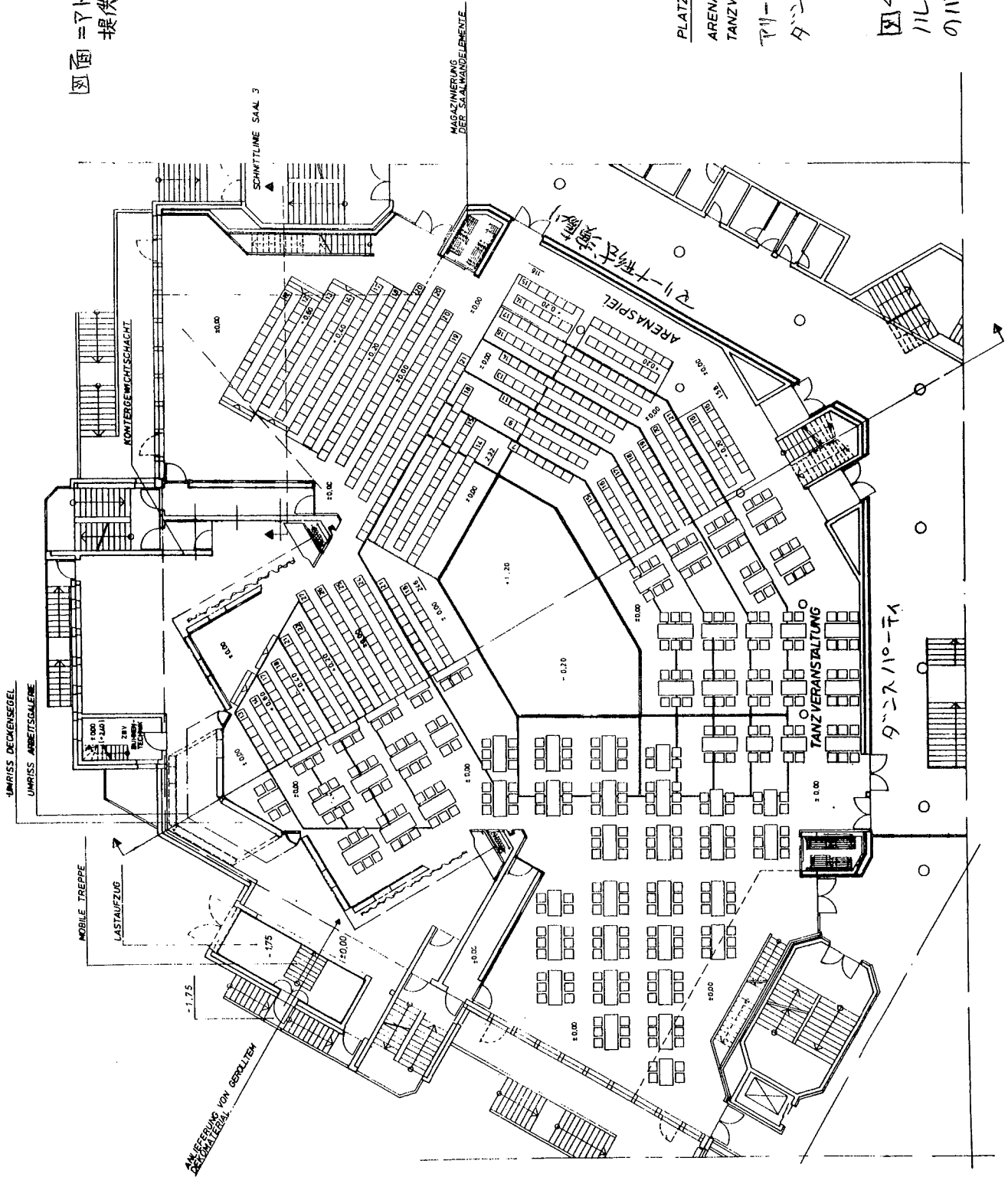
THEATERVERST. = 645 PLATZE
 GROSSE SHOW = 903
 KLEINES FEST = 88

演劇上演 645席
 大型ショー 903席
 小規模公演 88席

図 4-49a

ルター・シタット市市民ホール
 のハリエーション

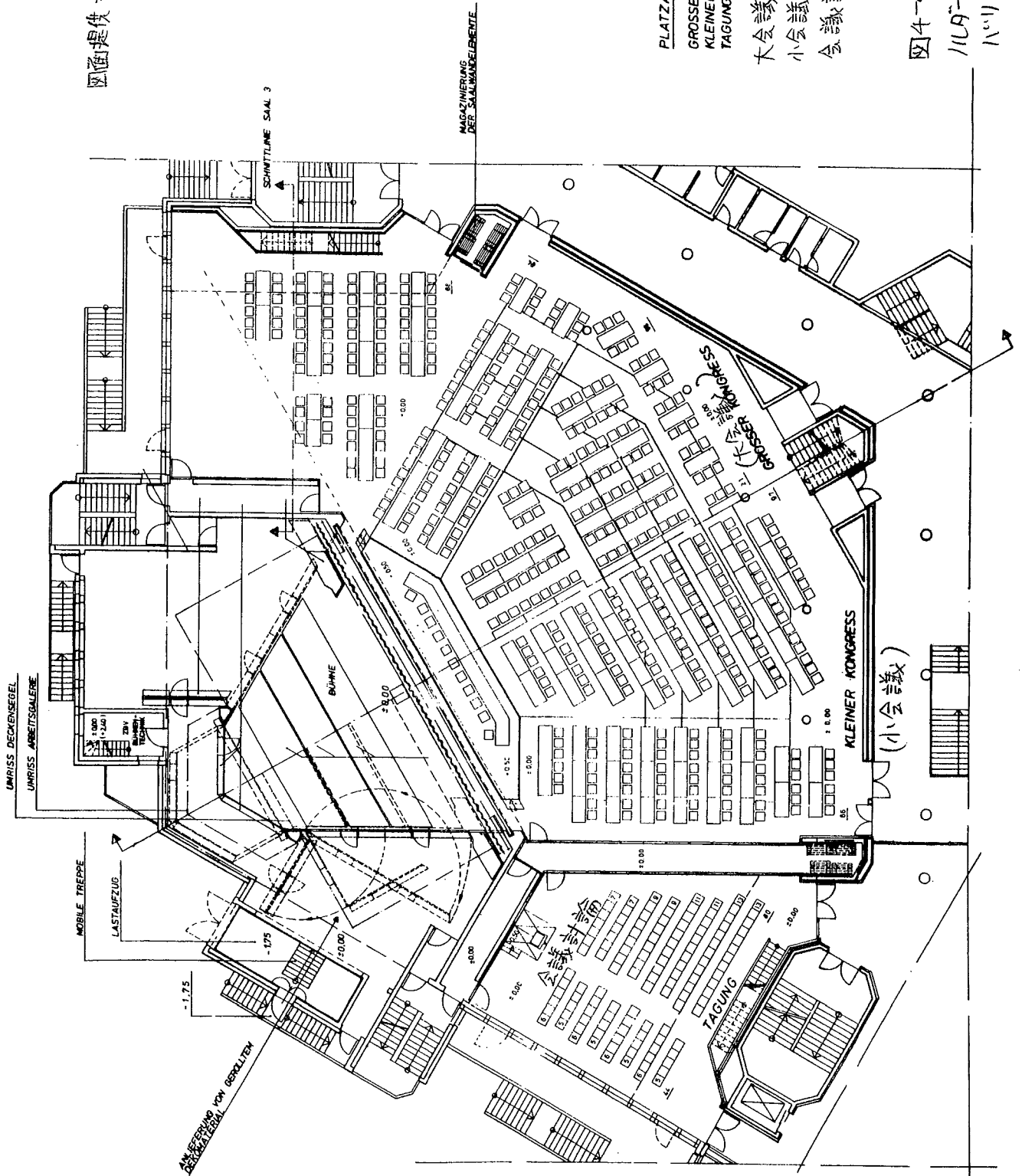
図面 = アトール・ツォツツマン氏
提供



PLATZANGEBOT PARKETT
 ARENASPIEL = 1100 PLATZE
 TANZVERANST. = 644
 アリーナ形式演劇 = 1100席
 ダンス110-7A = 644席

図4-49b
 ハルターシュタット市民ホール
 のバリエーション

図面提供 = アトール・ツォッパ・マニエ



PLATZANGEBOT PARKETT	
GROSSER KONGRESS	578 PLÄTZE
KLEINER KONGRESS	326 "
TAGUNG	124 "

大会議 578席
 小会議 326席
 会議討論 124席

図4-49c
 1/A-ジュネイト市市民ホールの
 パーティエーション

創造なくしては普及はあり得ないし、その逆もあり得ない。とこそ、巡回公演を行う商業ベースの巡回劇団も、その基本は、自立した劇団の形態を基礎にして出来ており、また、作品や俳優も、自立劇場から貸りて来ることが多い訳で、こうした点を考えると、補助金を受けている劇場*2と、商業ベースで運用されている多目的ホールとの関係は、合わせて考えなければならぬ。」

*1)

主として公共劇場

つまり、多目的ホールは、他に舞台芸術を創造する機関があって、はじめて機能するのであるから、文化行政は、自立劇場と多目的ホールを総合的な見地から扱ってゆかねばならないと説いている。西ドイツの多目的ホールにおける舞台芸術活動は、クローズドシステムによる公共劇場を中心とした自立劇場があるおかげで、可能であるのだという認識が識者の中では確立されている。残念なことに我国の文化行政には、この認識が全くといって良いほど欠如している。

本節では基本的にクローズドシステムをとる西ドイツの公共劇場を様々な角度から眺めた。本文中に見るように、西ドイツの公共劇場は地域の文化活動の中心として定着し、その安定した活動能力と完成された機構という面において勝れている。そしてその活動は、補助金率が年間予算の80%を越えているように、社会生活に必要不可欠な施設として広く市民に受け入れられている。しかし、反面、これらが莫大な資金を必要としていることも否めない。毎年のように、劇場の規模が大きすぎないかという疑問が湧き出ていることも事実である。これは予算面ばかりでなく、芸術面についても言える。この点については象徴的な事件が近年、各地で生じている。たとえば、

x1) "Theater heute"
1979/10, P15
"Die Gruppe und
das Stadttheater"

"Theater heute" 1979年10月号^{*1}には、次のような記事が掲載されている。

「デュッセルドルフの芸術総監督であるギュンター・ハーリッツは、演出家ノーター・レッシャーを即時解雇した。そしてこの解雇は、単なる任意の劇場職員解雇を意味するばかりでなく、非常に興味深くかつ重要な実験の終焉を示しているように見える。いや、ひょっとしたら、ある問いへのあまりに早すぎる解答と見えるかもしれない。この問いとは、市立劇場というひとつ屋根の下にある自由な(演出家-俳優の)グループが、相互の利益のもとに統合(この場合おそらく統合というのは既に誤った用語の使い方がかもしれない)されうるのかという問いである。-----」

この記事の背後に読みとれるように、最近ドイツの公共劇場において、特定な演出家と俳優の結びついたグループが、独自の小組織をつくり、ひとつの劇場という大きな機構の中で特殊な島をつくる傾向がある。たとえば、ゲッポータールのポナハウツェのグループ、ミュンヘンのゲオルゲ・タホリのグループ、ベルリンのフライエフォルクスビューネのノーター・ツァデーックのグループ等があげられる。これは、非常に大きく脹れ上がり、芸術上の小まわりのきかなくなった公共劇場で、演出家-俳優の思考の緊密な流れをもう一度回復させ

よるとする試みとして受けとられている。

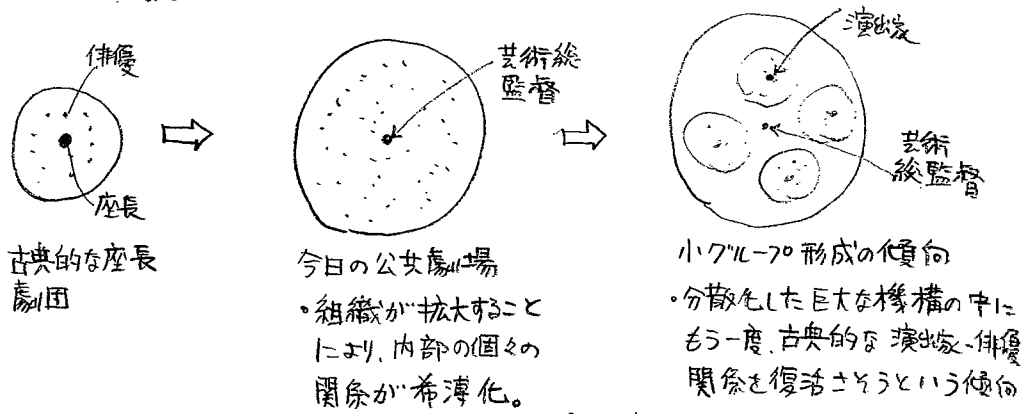


図4-50 西ドイツ公共劇場の機構の質的変遷。

公共劇場の前身は座長制による旅劇団が、領主の保護によって土地へ定着することに始まった。座長制の劇団においては、その演劇思想は座長によって統率されていた。もし、彼の意見に異なる者が出たなら、彼は、おそらく、その集団から離れていったであろう。私的な集団であれば、これが最も自然な姿であった。それが時代の流れとともに、劇団の安定を求め、かつ、演劇の社会的な効用が認識されて、公共の組織(公共劇場)として育っていった。その背景には、社会啓蒙(Aufklärung)という考え方があった。古典的な私人としての座長にかわり、精神面での国家統一という唯一の最高理念を掲げ、公的な最高の教養者としての芸術総監督が、公共劇場の指導者として強力な集権的なイニシアチブを取るようになった。しかし、戦後は、そのAufklärungの意味も、精神的国家統一という理念も変化し、むしろ様々な社会的見解、芸術上の見解を反映するミクロコスモスとしての、つまり、多極的なオーブ的な批判と、自由な精神活動が可能な劇場へと脱皮すべきであった。しかし、現実には、芸術総監督を頂点に据える中央集権的な形態はほとんど変化することはなかった。先に見た、公共劇場における小グループの形成という動向は、おそらく、こうした巨大な中央集権機構の中に、より精神的に結束した、融通性のきく芸術創造活動を回復させようとする試みであろう。そして、これが、今日の公共劇場の組織機構の中では、いかに困難なことかが、先のデュッセルドルフの例を見て理解できる。今日の西ドイツの公共劇場の課題は、組織的、芸術的にいかにコンパクトと融通

性のある形へ脱皮させてゆくかにあると言、て良いであろう。

上記に見るように勝れて安定した機構を持つ西ドイツの公共劇場もまったく問題がないとはい難い。そして、その問題はむしろ勝れて安定しているところにあると言う逆説的な言い方すら出来る。この点を解決する為に、西ドイツの公共劇場は今後益々苦難の道と歩まねばならぬであろう。従って、西ドイツの公共劇場が、今のところ非常に理想に近い形で運用されているからと言って、その組織や運用の方法をそのまま無批判に手本とすることは必ずしも正しいとは言えないであろう。では、我々が最も学ぶべき点はなんであろうか。ひとつは、芸術文化活動における創造の重さが十分に認識されているという点である。西ドイツにおいても、本節4項で考察したように、市民ホールと称する多目的ホールの建設が盛んである。そして、ここには劇場的な空間は用いられていないが、舞台芸術を創造する力は持っている。全て外部の劇団や楽団の活動に依存している。この点では我国の文化会館と極めて類似した性格を持っている。しかし、西ドイツの識者や文化行政の担当者は、「補助金を受けられている劇場と、商業ベースで運用されている多目的ホールとの関係は合わせて考えねばならない」(前出)と主張するヤン・フェーベルホルン氏のように、市民ホールの限界についてはきりした認識を持っている。これは、我国の文化会館に関しては、施設を建設することに目が向き、その創造活動はいかにしたら達成されるかという点についての配慮が薄いのは好対照である。少なくとも、舞台芸術の社会的な価値を認め、その振興に公の力によって遂行しようとする限り、その創造のあり方にまで、深く理解の届いた文化行政の理念と方策を追求することが必要ではなからぬ。

西ドイツの公共劇場の活動が我々に示唆を与えてくれる点はもうひとつある。それは劇場が毎日定常的な活動を継続させることがいかに大切であるかということである。西ドイツの公共劇場の客席数は本文中でも見たように我国の多目的ホールのそれに対して非常に小さい。客席数400席などという小劇場も、西ドイツではむしろ一般

的である。こうした小さな劇場でも、その活動を毎日継続させてゆくことが出来れば、総体として極めて大きな観客動員力を得ることが出来る。たとえば、400席の劇場で年間250日の公演を行えば、その年間動員力は既に10万人となる。もちろん毎日観客を集めるということは小さな都市にとっては必ずしも容易なことではないであろう。西ドイツの公共劇場では定期会員獲得のために非常な努力を払い、また各種の観客組織(フォルクス・ビューネ等)も、その活動をバックアップしている。筆者が滞独の折、良く次のような意見を耳にした。「劇場の活動は1日たりとも休むことは出来ない。もし、お客がふらりと芝居を見に劇場にやっ来て、それが休むたと判らたう、彼は二度と見に来ない。」この言葉によっても劇場の関係者が観客の心理をいかに大切にしているかが判るのである。また、舞台芸術活動は、少数ではあってもそれを支える情熱的な観客を必ず必要とする。1年に100回も200回も劇場通いをする観客もいる。こうした中から明日の舞台芸術を支える若い芽が育って来るのである。西ドイツの公共劇場では、非常に安い学生券を用意したりするなど、こうした若い芽を育成することにも十分な配慮を払っている。我國の公共ホールの客席数の設定では、経済効率を考へるあまり、いかに少ない公演回数で、多数の観客を集めることが出来るかという、興業的な発想にばかり支配されていく傾向は否めない。畢竟観客席の大きいホールを建設することになり、建ってから、それを年間通して満席とすることに回苦八苦する結果となっている。公共という立場で舞台芸術活動を振興させようとするとき、必ずしも、このような、目先のみを考へた経済効率優先の考へ方をとることは長い目で地域の文化活動をながめた場合、得策とは言えないのではないかと。今、1日しか公演ができないなら、11かたして2日間の公演が可能になるか、さらには10日、1ヶ月といった長期の公演かどのようにしたら成立できるかを考へてゆくことが必要ではないか。舞台芸術を生活に根づかせるには息の長い定常的な活動の持続が、いかに大切かを西ドイツの公共劇場の活動は我々に示してくれている。